

第2図 曽井第2遺跡周辺図(S=1/5,000)

在していたよう、伊東氏の一族である曾井氏が居城していたようである。曾井城が最初に文献に登場するのは、延文6〔1361〕年の土持文書の一色範親状に、清滝（清武）城から曾井城に攻め寄せられた時に土持時栄が馳せ参じ軍功をあげたことに対する感謝が記されている（文献⑧）。このことから14世紀後半には確実に曾井城は存在していたことになる。その後、曾井氏は、応永年間〔1394～1428年〕頃に島津氏に通じ、文安元年〔1444年〕には伊東氏に攻められ落城している。天正五年〔1577年〕伊東義祐が島津氏に敗れると、連動するように島津氏の居城となり、地頭の比志島義基が入城した。この頃周辺の出来事は当時宮崎城主であった上井覚兼の『上井覚兼日記』によって記録され、度々曾井城が登場する。中でも天正十一年〔1583年〕曾井の市で盗みを行ったとされる木花寺の小者が曾井衆に捕らえられ、加江田の役人に引き渡されたが、加江田の役人は確証がないとした。という記述箇所がある（文献⑨）。このことから16世紀後半には、城下もしくは周辺に市が開かれていたことがわかり、町として賑わいをみせていましたと考えられる。しかし、天正十五年〔1587年〕豊臣秀吉の九州侵攻により、島津氏は日向の大部分から撤退し、再び曾井城は伊東氏のものになり、伊東祐兵が入城した。翌十六年祐兵は筑肥城に入城すると、河崎權助がかわりに入った。その後、曾井城は元和元年〔1615年〕の一国一城令で廢城になるまで存在していたことになる（文献⑩）。その他、中世の城跡である古城跡（第1図-14）や山ノ城跡（第1図-15）などがある（文献⑪）。

（2）周辺寺社

遺跡は寺院関連遺跡の可能性がある。周辺には寺社跡が多く残る。周辺寺院の中でも伊満福寺は中心的な存在である。伊満福寺（第1図-16）は、日向七堂伽藍の一つであり、8世紀の推古天皇頃日羅が開山されたとされている。戦国時代には焼失したり無住寺になったりしたが、江戸時代には真言宗寺院として再興している。明治3年〔1870年〕廃寺となつたが、明治17年〔1884年〕に復寺した。その他、「日向地誌」には恒久村西部から古城村東部にかけては瑞雲寺（曹洞宗・筑肥長持寺末派）・護東寺（伊満福寺奥院）（第1図-17）が存在していたとされる（文献⑫）。また、神社は正八幡神社（第1図-18）が存在する。

【参考資料】

- 文献①：宮崎市教育委員会 1990「宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅱ」
- 文献②：清武町教育委員会 1990「清武町遺跡詳細分布調査報告書」「清武町埋蔵文化財調査報告書」第4集
- 文献③：宮崎県 1990『宮崎県史』通史編 中世2
- 文献④：宮崎県 1927『宮崎縣史蹟調査第一輯 宮崎市宮崎郡之部』
- 文献⑤：宮崎県総合博物館 1982『宮崎県総合博物館収蔵資料目録』
- 文献⑥：安楽勉 1964「曾井遺跡」「郷土研究」第2号 南九州短期大学附属宮崎高等学校
- 文献⑦：宮崎県 1990『宮崎県史』資料編 考古1
- 文献⑧：宮崎県 1990『宮崎県史』史料編 中世1
- 文献⑨：東京大学史料編纂所 1954『大日本古記録 上井覚兼日記（上）』岩波書店
- 文献⑩：1997『宮崎県の地名』平凡社
- 文献⑪：平部嶌南『日向地誌』（1976『日向地誌（復刻版）』青潮社）



第3図 曽井第2遺跡グリッド配置図(S=1/2,500)

第Ⅱ章 第一次調査の記録

第1節 調査の概要（第3・4図）

発掘調査は、宮崎市大字恒久字曾井5549-10番地ほかの約4,300m²を、平成17年8月17日から平成18年3月6日までの120日間行った。調査の便宜上、調査区中央部の緩斜面付近を「A区」、調査区北側を「B区」、調査区南部の六地蔵輪を含む石塔集中部周辺を「C区」と呼称する。

調査は平成17年8月17日から着手した。事前に石塔群が確認されている調査区中央部（C区）は見通しがきかない程樹木が繁茂していたので、作業員の人力にて伐採した。その後、重機によってA・B区の表土（第Ⅰ層）と耕作土（第Ⅱ層）の除去を行った。除去の結果、石塔群以外目立った遺構などは確認できなかつたが、8月下旬より掘り下げ作業を開始した。連日の気温が35度前後まで上昇し、炎天下の中作業であったが、基本土層の第Ⅲ層（灰褐色土）中から中世～近世の陶磁器等が多数出土し、順調に作業が進んでいった。

しかし、9月6日に宮崎県内に未曾有の災害をもたらした台風14号が上陸し、調査に大きな障害をもたらした。調査区域内では、調査区域外の遺跡西側崖面が崩落し、多量の土砂が調査区内に流入した。また、調査区全体にも土砂が流入し、除去に多大な時間を費やした。さらには、調査に参加していた多くの作業員宅が床上浸水等の被害を受け、災害復旧のため1か月近く作業員の多くが調査に参加できず、数名での調査を余儀なくされた。

10月に入りようやく調査体制が復旧し、本格的調査が再開された。部分的に第Ⅱ層が厚く堆積していたため、10月中旬には再度重機によりA・B区第Ⅱ層の除去を行った。その後、作業員による第Ⅲ層掘り下げ作業の結果、調査区中央部（A区）では、五輪塔片などの石塔片を再利用した近世の石列が検出されたほか、多くの柱穴が確認され、中世～近世の掘立柱建物跡5棟・池跡と考えられる瓢形の大型土坑1基・井戸跡6基をはじめ多くの遺構・遺物が検出された。調査区北側（B区）では、古代の周溝状遺構1基、中世の掘立柱建物跡3棟や溝状遺構3条などが確認された。

平成18年1月6日より第Ⅳ層～第Ⅴ層の掘り下げを開始した。第Ⅴ層は、傾斜による流出のため、調査区全体のおよそ1/3が残存しているのみであった。第Ⅴ層からは多くの土師器が出土したが、土質によるためか、そのほとんどが摩耗した細片であった。

調査区域外の六地蔵輪2基を含む石塔群周辺（C区）は、伐採の後10月上旬に精査を行い、11月上旬に石塔群の写真測量による図化作業（平面図・立面図）を行った。12月に入り石塔群の取り外し作業と個別石塔の実測図作成作業を開始した。取り上げた石塔片は全部で78点あり、その内訳は六地蔵輪3・無縫塔1・手洗鉢3・板碑15・地蔵3・経碑1・五輪塔片多数・宝瓶印塔片などであった。

この時点で、中世から近世にかけての成果がひととおり確認できたため、地元住民を対象とした現地説明会を2月12日に開催し、78名が参加がした。

その後、残りの遺構の掘り下げや検出状況の写真及び図化記録を行い、3月2日から重機による調査区の埋戻しや事務所撤去等を行い、平成18年3月6日に調査の全工程を終了した。総調査日数は120日間であった。

調査によって検出された石塔類は、平成18年4月に地区管財組合の手によって、遺跡から約200m離れた正八幡神社敷地内に移設され、再び穏やかな状態に復すこととなった。

遺跡の記録のため、国土座標（X・Y座標）に乗じた10m単位の区画を設定した。10mの区画毎に南北方向は1～13・東西方向はA～Jと割り付けた。この2つの組合せによってグリッド（例えば「B 2区」「D 5区」など）を設定した。

確認された遺構・遺物は以下のとおりである。

【古代】周溝状遺構 1基、土師器（内黒・布痕を含む）、須恵器、縁釉陶磁器片など

【中世】井戸跡、溝状遺構、輸入陶磁器（青磁・白磁・青花染付）、国産陶磁器、土師器、木製品（井戸枠）

【中世～近世（詳細時期不明）】掘立柱建物跡、溝状遺構、井戸跡、石塔類

【近世】掘立柱建物跡、柵列跡、溝状遺構、井戸跡 4基、石列、池状遺構、門跡と考えられる土坑 2、陶磁器、石製品（白・硯など）、木製品（井戸枠など）、瓦、石塔類



第4図 一次調査分遺構検出状況図(S=1/750)

第2節 基本層序（第5図）

曾井第2遺跡は、標高差約5mの高低差をもつ緩斜面に位置する。緩斜地ゆえに土の流失は多かったと考えられる。さらに斜面上方（西側）には丘陵東端部の急峻な斜面が存在し、上方から多量の土砂が流入しやすいと考えられる。調査時においても、大雨の後は土砂が一晩で堆積していることも多かった。また、調査区域の大部分は、調査着手直前まで畑地や水田であったので、耕作による削平も度々であったと推測される。このように、曾井第2遺跡の土層堆積は不安定で、基本層序どおりの堆積状況を示していないところが多く、層厚など不明な点が多い。面的な調査は第V層まで、第VI層上面を検出したところで調査を終了した。

【曾井第2遺跡基本層序】

第I層…黒色土 [Hue : 10YR-2/1] 土質はやわらかい。現在の表土。

第II層…黒褐色土 [Hue : 2.5Y-3/1] 土質は第I層より少しあたかい。最近の耕作土。

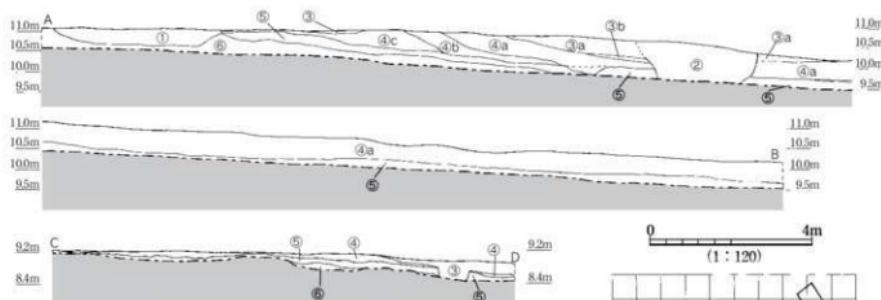
第III層…明灰色土 [Hue : N-6 / ~N-5/] 肉眼では明るい灰色に見える。砂質も粘質もある。乾くとコンクリートのようになる。主に中世～近代の遺物を包含する。

第IV層…にぶい黄褐色土 [Hue : 10YR-5/4～2.5Y-5/4] 5cm程の灰色および灰黃褐色粘質土ブロックを多量に含む。

粘質は少しあるが脆い。遺物をほとんど含まない。複数のユニットが存在し、短期間で堆積した土砂の可能性がある。

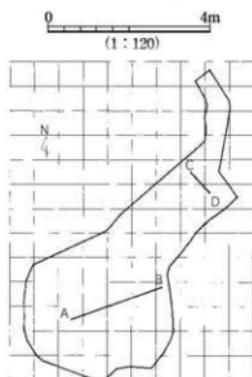
第V層…黒褐色土 [Hue : 10YR-3/1～2.5Y-3/1] 構成土粒は粗いが、粘質がある。全体的に1cm前後の赤褐色土粒と灰色粘質土粒を含む。主に古代～中世の遺物を包含する。遺物注記でⅢ層出土「Ⅲ」と書いたものは主にこの層からの出土である（調査時は「第Ⅲ層」としていたが、整理段階で「第V層」に変更する）。

第VI層…にぶい黄橙色土 [Hue : 10YR-6/4] 粘質・砂質とともにあり、灰色砂質土や暗褐色土のブロックを含む。地山を形成する層である。遺物は出土しなかった。

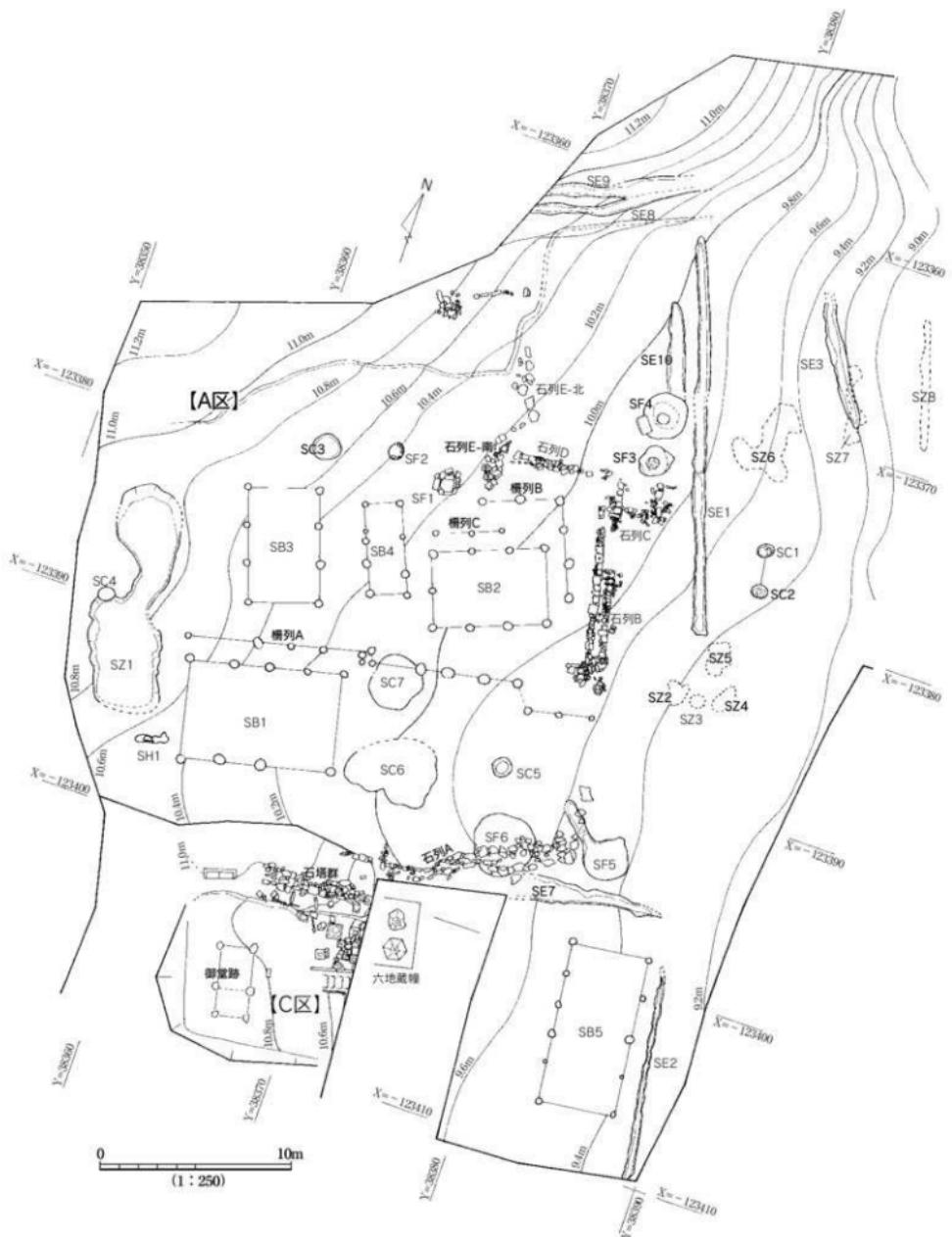


【土層注記】

- ① -SZ1の稚土
- ② -SZ7の稚土
- ③a-基本層序の第Ⅲ層
- ③b-基本層序の第Ⅲ層
- ④a-基本層序の第Ⅳ層
- ④b-基本層序の第Ⅳ層
- ④c-基本層序の第Ⅳ層
- ⑤-基本層序の第V層
- ⑥-基本層序の第VI層



第5図 土層堆積状況図(S=1/120)



第6図 A・C区遺構検出状況図(S=1/250)

第3節 A区の調査（第6図～第50図）

A区は調査区の中央部から西側にかけての約3,040m²である。A区は、本来東に下る急傾斜面であった場所を近代に2段に造成したと考えられ、新しく削り込んで作られた1段目(940m²)と西端部を水平に成形して作られた2段目(2,100m²)から構成される。1段目は、近年造成された場所なので、遺構・遺物は確認されなかった。2段目は東方向に向かって約2.4m(最高標高11.2m～最低標高8.8m)緩やかに下る緩斜面である。調査前は畠地であったが、地元住民に聞き取り調査をしたところ、昭和の早い時期に人が住んでいたらしいとの証言もあった。西端部は、造成のため、第II層～第IV層が削平されていたが、調査は主に第III面上面の検出作業から着手した。

調査の結果、中世～近世の掘立柱建物跡5棟・掘立柱建物跡に伴うと考えられる構列と石列・井戸跡6基・溝状遺構7条・門跡と考えられる配石土坑2基・池跡と考えられる土坑1基・土坑数基・ピット多数、それらに伴う土器・陶磁器などの遺物が多数検出された(第6図)。

1. 中世の遺構と遺物

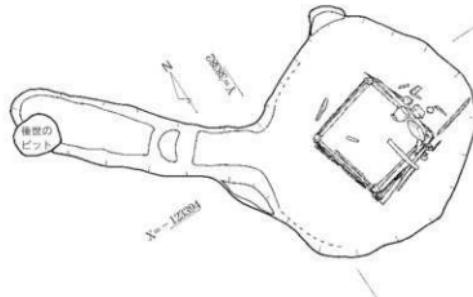
(1) 5号井戸跡(SF5)(第7図～

第13図)

【遺構】F11グリッド北西部第V層で検出された。検出当初、径2.2～2.3m程の平面円形の土坑であった。しかし、検出面から50cm程掘り下げると、円形土坑に接続する長さ約250cm・幅約50cmの溝状遺構が検出された。この溝状遺構の床面は、円形土坑の中心部に向かって階段状に下っていくことがわかった。円形土坑は井戸の掘形であり、溝状遺構はこの掘形掘削のための作業用界隈場であったと考えられる。

円形土坑(掘形)中心部付近の検出面から約50cm下からは、一辺約90cmの方形木組みが検出された(卷頭図版4-④、図版5-①)。調査当初、トイレ遺構の可能性も考え、寄生虫卵分析を行ったが寄生虫卵は通常部分と変わらない程度しか検出されなかった(詳細は第Ⅳ章～第2節「寄生虫卵分析」に記載)。さらに掘り下げていくと、方形木組みは井戸枠となり、井戸跡として完全に近い形で検出された。井戸枠は、四隅に径約12～13cm・上部が腐食しているが長さ約210～270cmの4本の隅柱を約90cm間隔で据え、隅柱間を幅81.2～99.7cm・厚さ4.0～5.7cmの横桟11本で井桁状に組み、幅約10～15cm・厚さ約1cmの薄い継板を被せていた(卷頭図版5-①)。さらに継板の外側には竹と幅4.1～4.4cm・長さ約42～70cm(先端欠損のため正確な値ではない)・厚さ1.0～1.4cmの幅狭板が数枚覆っていた(卷頭図版5-②)。

掘形は深くなるにつれ狭くなっていく逆円錐に近い形で、周りの基本層序の第VI層(にぶい黄褐色土)～第VII層(青灰色粘質土)に比べて異なる灰色粘質土が埋土である。井戸枠内の埋土もほぼ掘形埋土と等しい灰色粘質土である。井戸枠埋土中からは、掘り下げの結果、上部で土器片(第13図-32)、底部付近で青磁皿片(第13図-33)や木製品が出土した。木製品の多くは使途不明品も含めて井戸に関連すると考えられる。検出深さが3mを越え、さらに堆積土が脆弱で崩落の危険性があったため、発掘調査は下部まで行ったが、全体は模式図作成による記録のみ行った。遺構は、出土した遺物から考えて14～15世紀頃と考えられる。



第7図 5号井戸跡平面図(S=1/50)

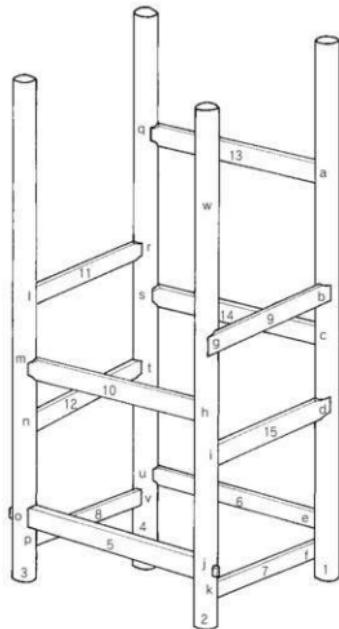
【遺物（第8図～第13図）】

〔1. 井戸枠構成木製品〕 大きく隅柱・横桟・井戸枠板（縦板・被覆縦板）から構成される。構成する井戸枠全てを図化することはできなかったが、一部図化を行った。

①隅柱・横桟（第8～11図：1～15） 1～4は隅柱である。いずれも先端が腐食のため欠損しているが、硬質の木材を使用しているようである。樹種同定の結果コウヤマキと判明した（第IV章第6節）。1～3は周辺部を用いているが、4は芯部を用いている。1と2で西面、2と3で北面、3と4で東面、1と4で南面を構成する。隅柱には5～6か所の膣穴または胴受けのめ込み穴をもつ。膣穴には、貫通するもの（右図：連結部e・f・j・k・o・p・u・v）・柱径の1/3程のところまで穴が穿たれたもの（右図：連結部a・h・i・q・r・s・t・w）の2種類が存在する。胴受けはめ込み穴は柱1/4程を扇形にカットしている（右図：c・d・g・l・m・n）が、1の胴受けはめ込み穴（連結部b）は、微調整のためか2段にカットしている。

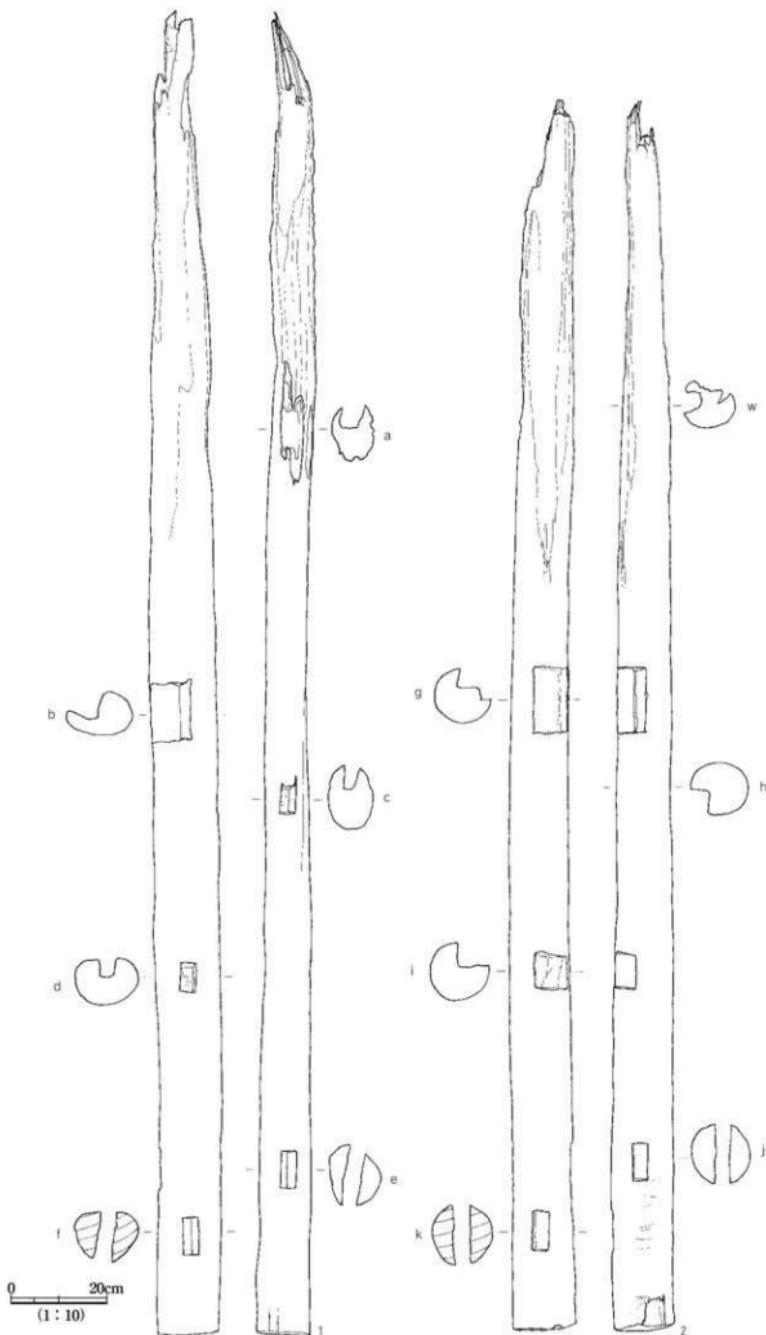
5～15は横桟である。隅柱同様樹種同定の結果コウヤマキと判明した（第IV章第6節）。表裏面には鋸跡と厚みを減ずるための工具痕が確認できる。鋸跡は大きなU字状に残り、鋸は歯道が外湾する大形のものと推測できる。厚みを減ずるための工具痕は、両端部付近を調整するために用いられたと考えられ、方形や半円形を呈する。方形の痕跡は盤、半円形は手斧などの道具が推測できる。横桟11点は、全て隅柱間を繋いだ状態で検出された。断面方形・平面方形・両端が細い（横桟A類：5～6）、断面半円形・平面方形・両端が細い（横桟B類：7～8）、断面方形・平面方形・両端が板幅と同じ（横桟C類：9）、断面半円形・平面が両端にむかって緩やかにすぼむ（横桟D類：10～15）のように大きく4類に分類した。A類とB類は平面部を枠の外側に向けて最下部の4か所（右図）を構成している。最下部の隅柱との4か所の連結部は他が胴受けや膣穴であることに対して穴が貫通する門状である。他は主にD類を用い、片方は膣穴、もう片方は胴受けで連結している。ところが、連結部b-g間だけにはC類を用いている。唯一のC類である9は他の横桟と異なり、両端部が細くなつておらず両方胴受け隅柱を連結している。他の場所に比べてこの連結部b-g間だけ異質であり、理由は不明だが、作製者に何らかの意図があったと感じることができる。

横桟は11本が残っていたが、2の先端の連結w部に膣穴痕跡があることから、少なくとも各面3本ずつの12本存在していたと考えられる。

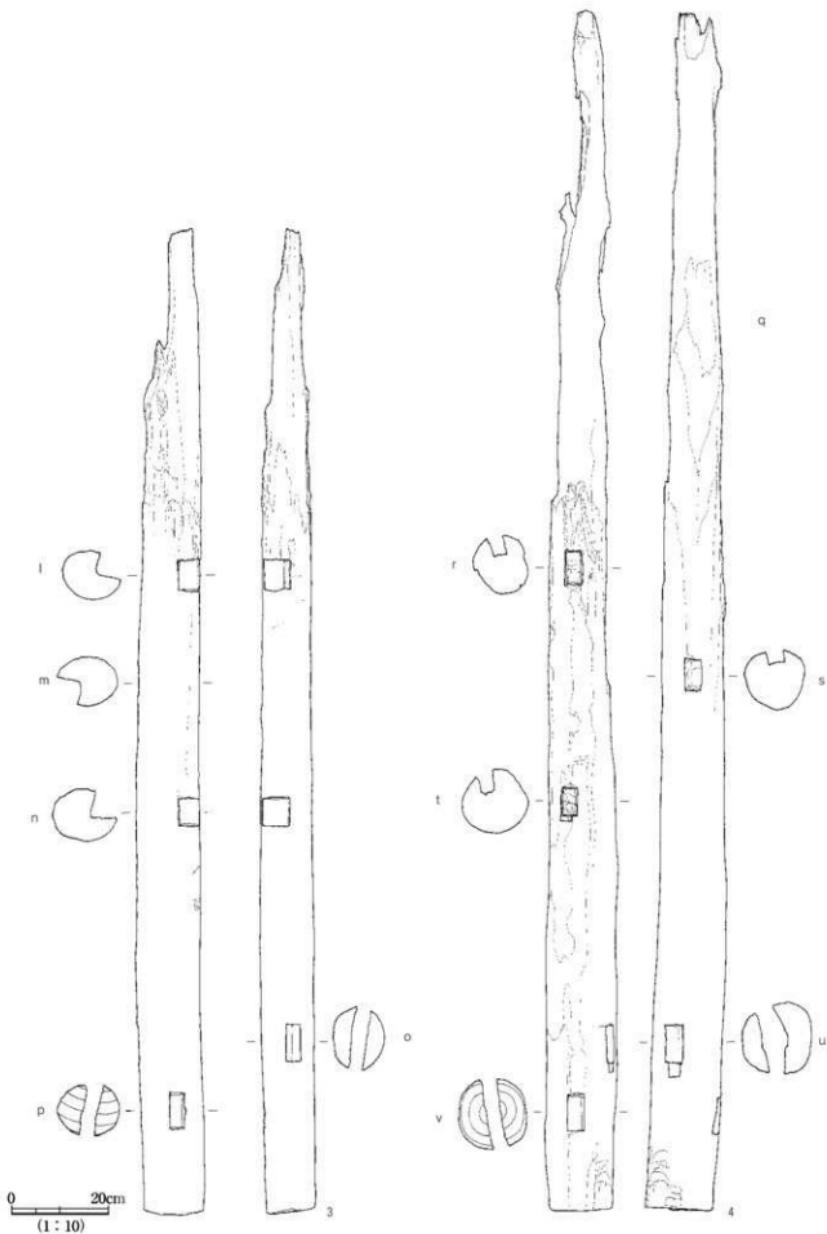


数字は遺物掲載番号
アルファベットは連結部の番号

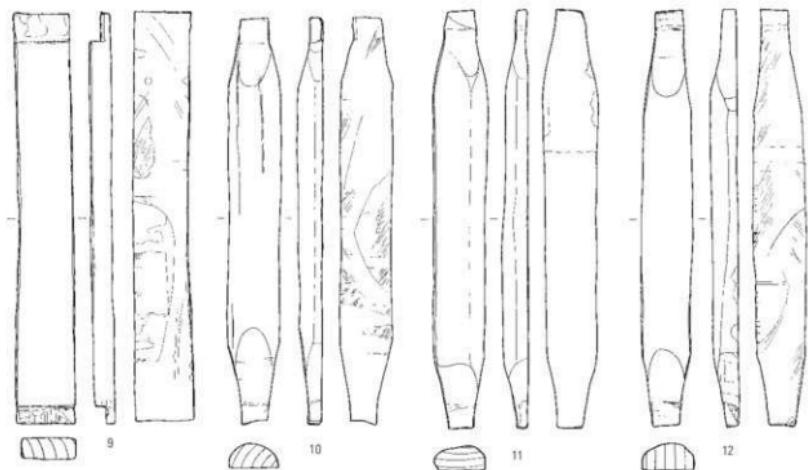
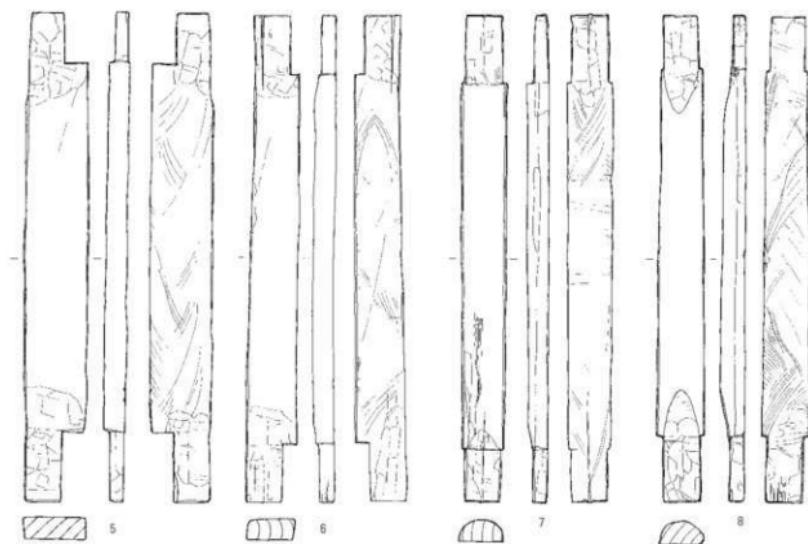
5号井戸跡復元図



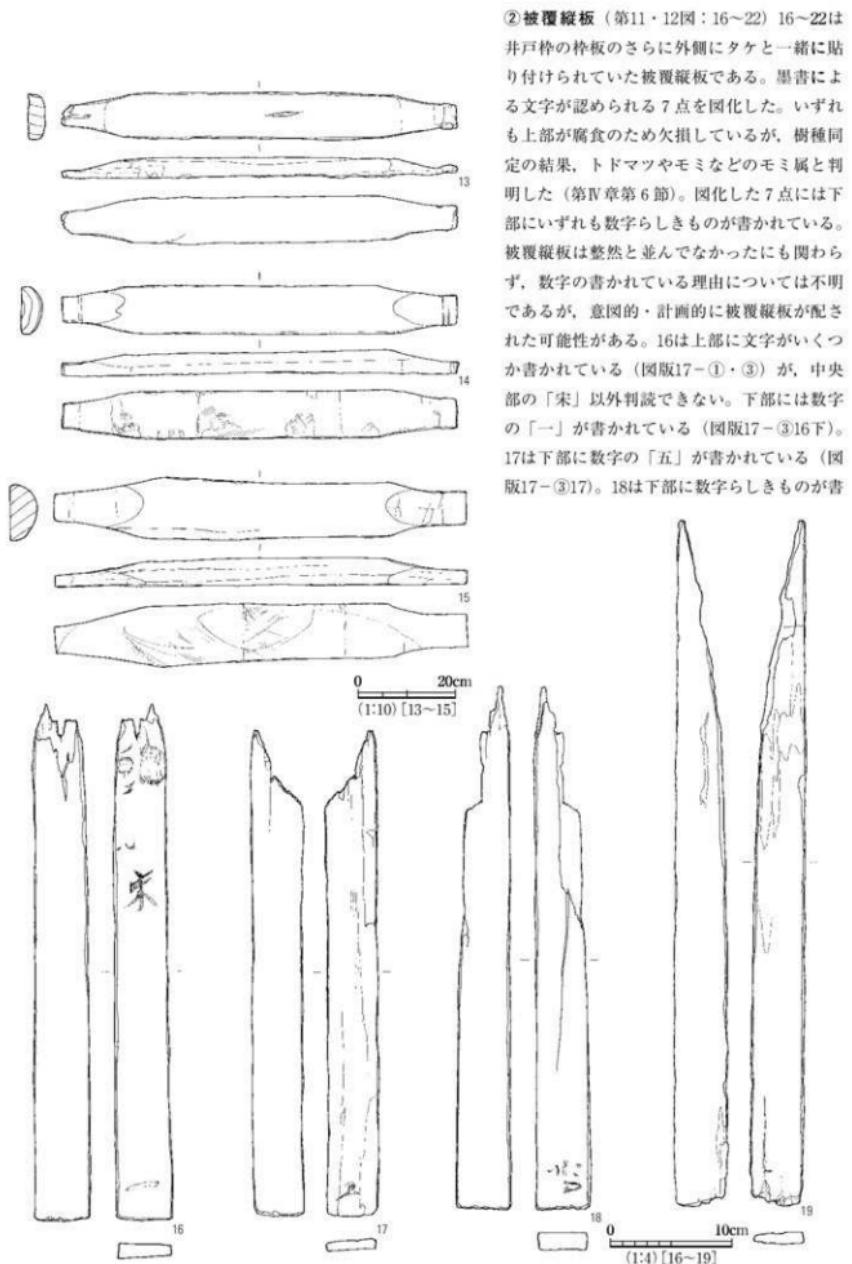
第8図 5号井戸跡出土木製品①(S=1/10)



第9図 5号井戸跡出土木製品②(S=1/10)

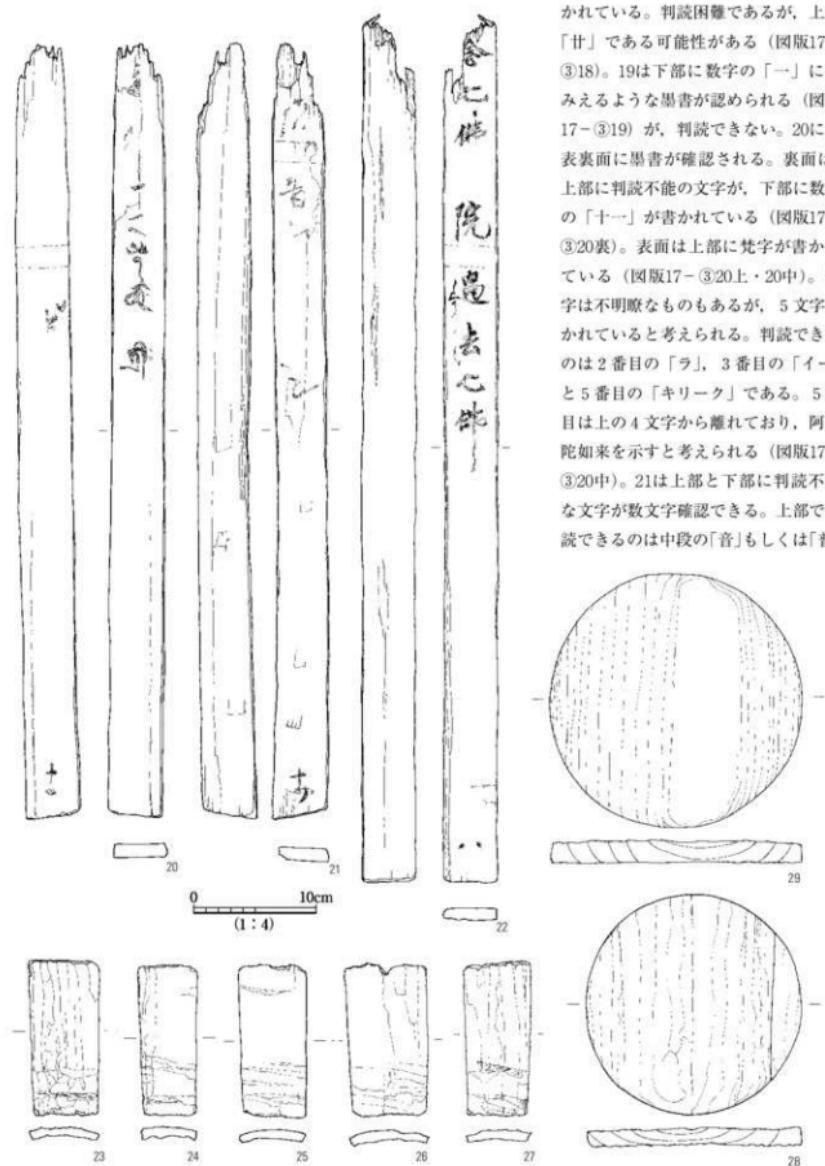


第10図 5号井戸跡出土木製品③(S=1/10)



第11図 5号井戸跡出土木製品④(S=1/10・1/4)

かれている。判読困難であるが、上は「什」である可能性がある（図版17-③18）。19は下部に数字の「一」にもみえるような墨書が認められる（図版17-③19）が、判読できない。20には表裏面に墨書が確認される。裏面は、上部に判読不能の文字が、下部に数字の「十一」が書かれている（図版17-③20裏）。表面は上部に梵字が書かれている（図版17-③20上・20中）。梵字は不明瞭なものもあるが、5文字書かれていると考えられる。判読できるのは2番目の「ラ」、3番目の「イー」と5番目の「キリーク」である。5番目は上の4文字から離れており、阿弥陀如来を示すと考えられる（図版17-③20中）。21は上部と下部に判読不能な文字が数文字確認できる。上部で判読できるのは中段の「音」もしくは「普」



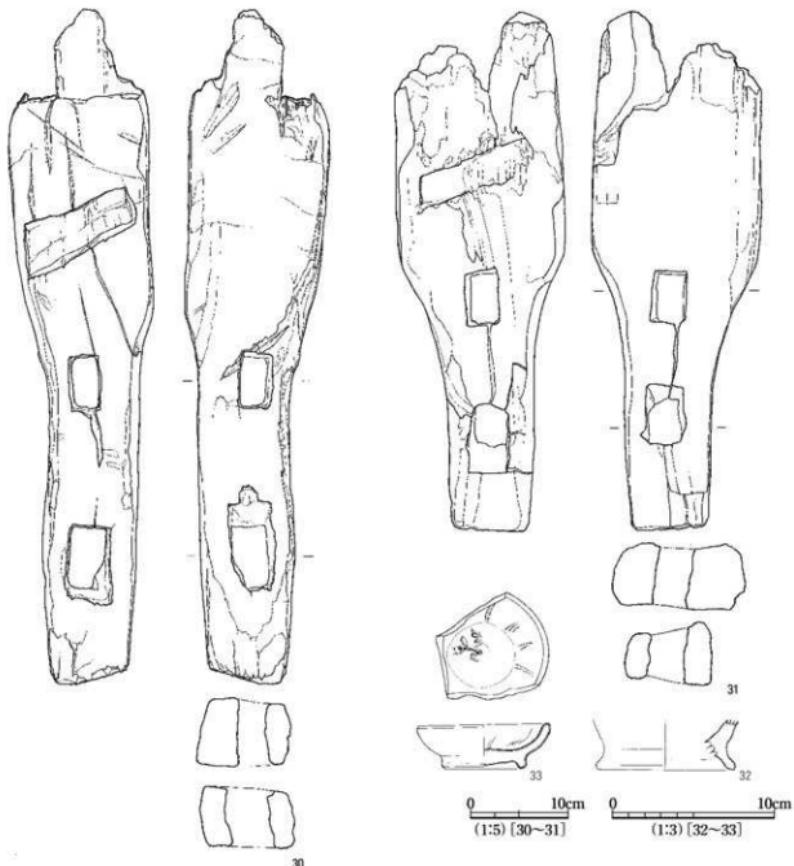
第12図 5号井戸跡出土木製品⑤(S=1/4)

だけである(図版17-③21上・21中)。下部には数字の「十四」が書かれている(図版17-③21下)。22は上部と下部に判読可能な文字が數字確認できる。上部は「…念七佛院過去七佛」と書かれている(図版17-③22)。「院」とは屋敷・寺院・僧坊などを指すことが多く、この井戸のあった場所がそうした建物の敷地内であった可能性がある。上方の「七佛」、下方の「過去七佛」とは、釈迦仏と釈迦仏出現以前の6人の仏(毘婆尸仏・尸棄仏・毘舍浮仏・俱留孫仏・俱那含牟尼仏・迦葉仏)の7人を指すと考えられる。下部には数字の「八」が書かれている。

[2. 井戸枠内出土遺物] ここでは井戸枠の埋土内から出土した遺物を一括して扱う(第12・13図:23~31)。

①釣瓶桶7点(第12図:23~29)

23~29は釣瓶桶と考えられる。結構の部分と考えられる。いずれも井戸枠内底部付近埋土中から出土した。23~27は側板である。出土は5点であるが、本来10枚前後であったと考えられる。いずれも同じような形状であり、平面形は上部幅5.6~6.6cm・下部幅5.1~6.0cm・長さ約12cmの逆台形を呈し、緩やかに曲がった厚さ0.8cm前後の板状である。外面に上から2cm、8.5cm、11cm程のところに簾の痕跡が認められ、わずかに簾が残っていた。樹種同定の結果、側板の部材はスギ、簾はタケと判明した(第IV章第6節)。28・29は底板である。2点とも板目を利用



第13図 5号井戸跡出土木製品⑥(S=1/8・1/3)

用しており、樹種同定の結果、部材はスギと判明した（第IV章第6節）。出土した2枚のうち、28は直径17.4cm・厚さ約1.2cmである。側板（23～27）とともに出土し、1つの結構を構成していたと考えられる。一方、29は別に単独で出土したので、別の結構底板の可能性がある。直径20.4cmである。28は2枚の板材を横で結合している。楔は樹種同定を行っていないが、肉眼で観察した結果、おそらくタケと考えられる。

②**不明木製品2点**（第13図：30～31）不明の大形木製品が2点出土した。2点とも同じような形状を呈している。大きさは、30は上部幅が約14.8cm・下部幅が約8.0cm・長さ約69.1cm・厚さ約7.0cm、31は上部幅が約17.2cm・下部幅が約13.0cm・長さ約52.9cm・厚さ約6.3cmである。いずれも上部に貫通しない斜方向の11×6cm程の脇穴、下部に貫通する約6～7cm×約3.5～4cm前後の長方形の脇穴2か所をもつ。木製品の用途について、断定はできないが、釣瓶の滑車枠の可能性がある。そう考えると、中位の脇穴が滑車の軸受部で、下部の貫通している脇穴と上部の貫通していない脇穴で枠を固定し、釣り下げていたと推測できる。しかし、実際2点を合わせてみると、貫通している2か所の脇穴はほぼ一致するのであるが、上部の貫通していない脇穴が同じ方向に斜行しており一致しない。違う滑車の同じ部分なのか、同じ滑車の同じ部分の取り替え品なのかは不明である。

③**土師器・陶磁器**（第13図：32～33）土師器と青磁皿が1点ずつ出土した。32は土師器の底部片である。脚状の高台を有するタイプで、高台が緩やかに外反する。第6節（2）で後出（p90）する土師器分類の椀I A類に入り、古代に時期比定できる。井戸枠内の埋土上部から出土しており、井戸構築年代とは異なると考えられる。33は龍泉窯系青磁皿である。内面見込部に花文と口縁部内部に継ぎ2条の花弁文をもつ。底部高台まで釉がかかり、高台内の大部分が無釉で、釉の境界が赤褐色に変色している。14世紀頃に時期比定される。

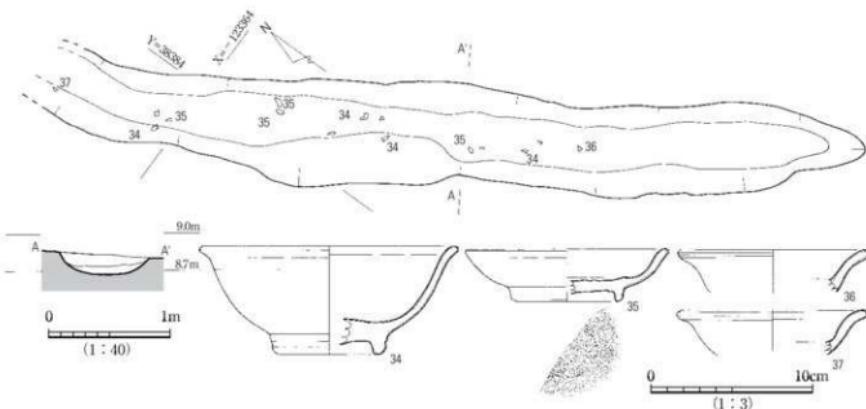
（2）6号井戸跡（SF6）

【遺構】F11グリッド東部第V層で検出された。5号井戸跡と約3m離れた近い場所に位置する。検出時、径約320cmの円形土坑と考えていたが、重機で半截の結果、5号井戸跡と同じような構造の井戸跡と確認された。掘り下げ作業中に崩落したため、詳細は不明であるが、掘形の深さ約300cmで、4本の隅柱と横桟をもつ一辺約85cmの方形井戸枠が確認された。ほぼ完全な形で検出された5号井戸跡と異なり、6号井戸跡は、4本の隅柱をもつものの、被覆縦板が1枚確認されただけで、横桟も1本確認されたのみであった（巻頭図版5-③）。この検出状況の違いは、底部付近でサンプリングした土の自然科学分析にもあらわれた。花粉分析において花粉はほとんど検出されず、他の井戸跡遺構から高い割合で検出される陸生珪藻が珪藻分析において検出されなかった（詳細は第IV章-第1節「花粉分析」・第3節「珪藻分析」に記載）。井戸枠壇面上部に生育していたと考えられる陸生珪藻や井戸口が開いていた場合に混入すると考えられる花粉が検出されなかつたということは、不完全な遺構検出状況と併せて考えると、井戸として機能していた可能性が低いことを示す。明確な理由付けはできないが、製作途中で廃棄され、使用されなかつたなどの可能性も考えられる。単に使用後の廃絶であれば、自然科学分析の結果が他の井戸跡遺構に近い数値を示すはずである。遺構の年代であるが、遺物などが検出できず不明であるが、5号井戸跡との構造の類似性から中世に比定したい。

（3）3号溝状遺構（SE3）（第14図）

【遺構】（第14図）】F8グリッド中央部から南西部にかけて検出された。北側が消滅しており、正確な長さが把握できないが、長さ約650cm・幅約60～85cm、検出深さ約20cmである。傾斜に対して直交することから、排水というよりも、むしろ下方に水や土砂が流入しない目的で作られたようである。遺物は青磁片のみが15点出土したが、接合すると4個体分であり、これらが30～70cm程の間隔でばらまかれたような状態で出土した。この出土状態は何らかの人為的意図を感じさせるものがある。出土した遺物から考えると14世紀頃に比定される。

【遺物（第14図-34～37）】34～37はいずれも龍泉窯系青磁である。34は碗である。緩やかに外反する口縁部で無文、底部は高台外面に凹線を1条、全面施釉後に高台内のみ円形に釉剥ぎを行っている。35～37は壺である。35は内面見込みが無釉で、草本文の印刻を施す。底部は脛付部を境に内側が無釉である。36・37は無文で口縁部が外反するタイプである。いずれも大宰府Ⅲ・Ⅳ類の範疇に入り、14世紀頃と考えられる。



第14図 3号溝状遺構図(S=1/40)及び出土遺物(S=1/3)

2. 中世～近世の遺構と遺物

ここで照会する遺構の多くは、遺構性質から考えておそらく近世に比定されるものが多いが、中世の可能性も否定できないので、「中世～近世」と幅をもたせて述べることとする。

【遺構】

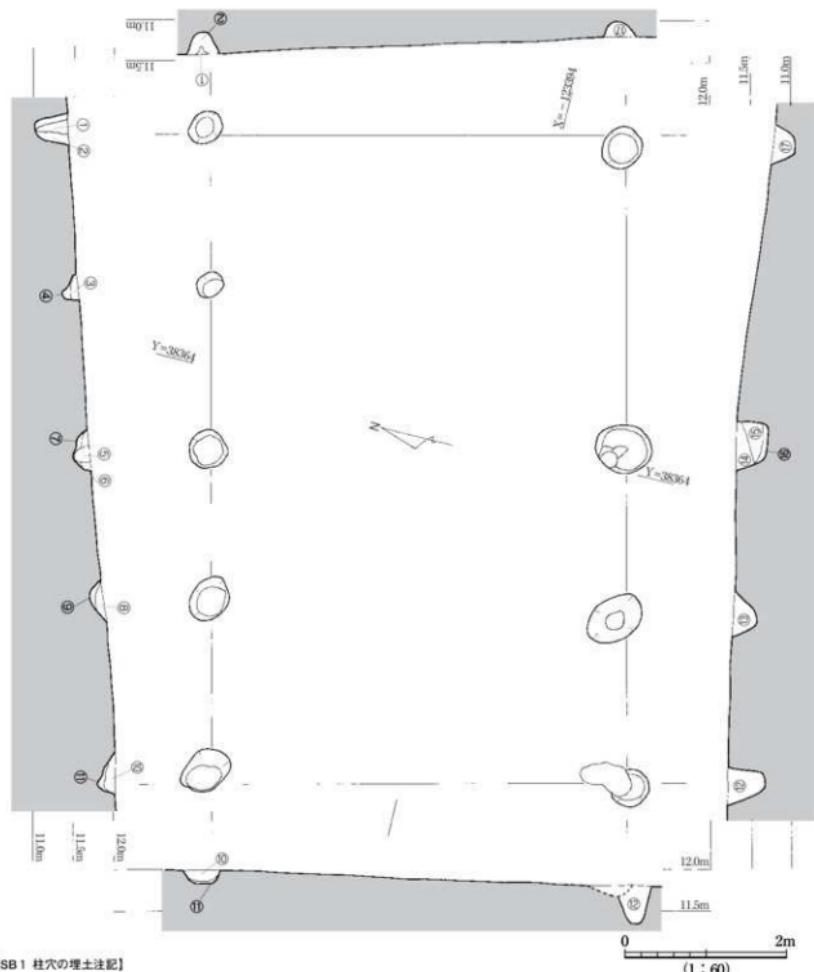
(1) 挖立柱建物跡（SB1～SB5）と柵列（柵列A～柵列C）（第6図・第15図～第19図）

A区では5棟の掘立柱建物跡が検出された。5棟のうちSB1～4の4棟は、重複することなく、近接するが一定の間隔をおいて近しい主軸で配置されていることから、同時期に存在していた可能性がある。また、SB1～4の周辺で直線的に柱穴の並ぶものが3か所確認された。これらは建物に付随する施設であり、性格として「柵」「塀」または「庇」の柱を建てるための柱穴痕と考えられる。これらのうちのどれかという断定はできないので、ここでは可能性の一つである「柵列」として表現統一する。

また、掘立柱建物跡の柱穴埋土には、ある一定のパターンがある。ここでは堆積土の性格をわかりやすく説明するため以下のように埋土をA類～D類に埋土を分類した。この分類表現はこの報告書をとおして行う。

分類	土色	土質
埋土A類	灰色～灰黄色系	土質は柔らかく、酸化による糸状橙色への変色（記述上：酸化変色）がある。覆土と似ており、遺構発現後の流入土と考えられる。
埋土B類	灰色～灰黄色系。もしくはオーリーブ黒～灰オーリーブ色系。	土質は柔らかく、埋土A類と似ているが、砂質があり酸化による変色（記述上：酸化変色）ではなく、粘土ブロックや炭化物を含む。中央部に存在することから、柱根部分に堆積した埋土と考えられる。
埋土C類	灰白色系	土質は柔らかく、酸化による糸状橙色への変色（記述上：酸化変色）がわずかにある。砂質がわずかにあり、ブロック状の土が混入する。埋土A・B・D類の中間的要素。柱穴の埋土か柱の根固めの土と考えられる。
埋土D類	灰白色系	粘質土。主に根固めなどに用いられた埋土や柱を据える前の流入土と考えられる。

第1表 掘立柱建物跡埋土分類表

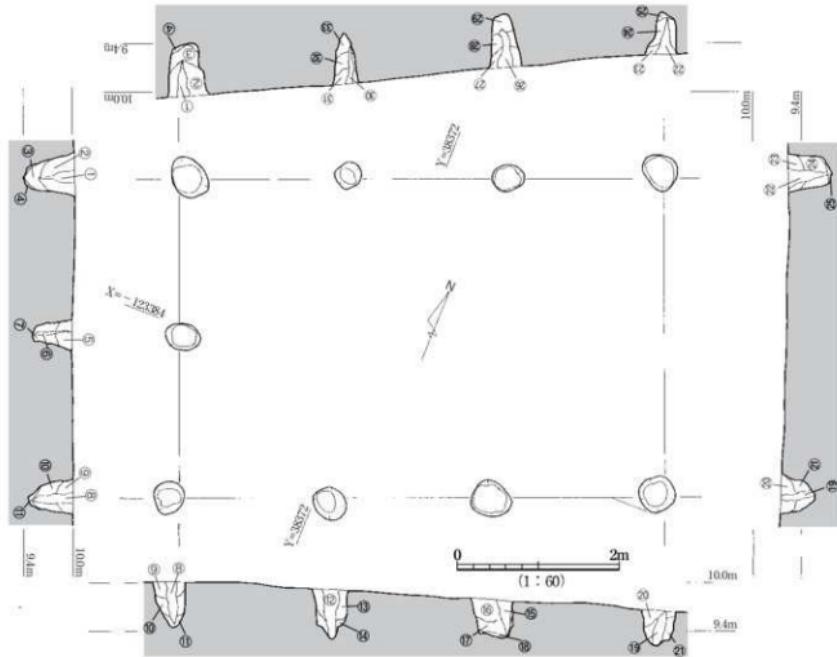


第15図 1号堀立柱建物跡(S=1/60)

1号堀立柱建物跡 (SB1) (第15図) は、本遺跡検出の堀立柱建物跡の中でも大型の部類である。身舎面積も 40.7m^2 と大形であるが、平均柱穴径が約55cmと大きく、他に造りを異にしている印象を受ける。傾斜に対して棟方向が直交する。規模は、梁行1間(515cm) × 衍行4間(790cm)で、おそらく17尺×26尺の規格である。柱穴

南列東部1か所は本来柱穴が存在してもよい場所であるが、確認できなかった。後世の削平のため未検出なのか、もともとそこには存在しなかったのか不明である。後世の削平著しい傾斜地に位置し、柱穴径の大きさに対し柱穴の深さが浅いことから、当時の遺構面は消失していると推測される。

2号堀立柱建物跡 (SB2) (第16図) は傾斜に対して棟方向が直交する。規模は、梁行1~2間(390cm)×桁行3間(600cm)で、13尺×20尺の規格と考えられる。梁行は東列が1間、西列が2間と異なる。柱穴は深さが50~60cmで、多くから柱痕が確認された。柱穴の堆積状況も類似している。SB3・4とは直交する関係があり、SB4とは約130cmの間隔で隣接する。

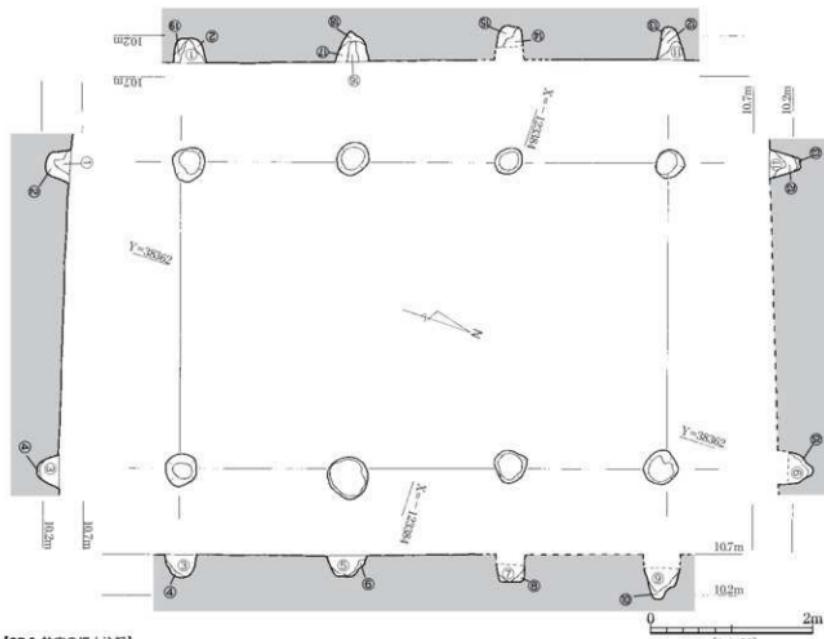


[SB2 柱穴の埋土注記]

- ①灰色土 (Hue : 10Y5/1) : 墓土B類。黄褐色ブロックを多く含み、②崩との境界が酸化変色している。
- ②暗灰土 (Hue : N3/1) : 墓土C類。
- ③灰色土 (Hue : N4/1) : 墓土C類。
- ④黒褐色土 (Hue : 10Y3/0/1) : 墓土D類。
- ⑤暗灰色土 (Hue : N3/1) : 墓土C類。
- ⑥灰色土 (Hue : 10Y4/1) : 墓土B類。木質が残っている。
- ⑦灰色土 (Hue : N4/1) : 墓土D類。
- ⑧灰色土 (Hue : 10Y5/1) : 墓土B類。⑨・⑩崩との境界が酸化変色している。
- ⑪灰色土 (Hue : N4/1) : 墓土A類。
- 暗緑灰色土 (Hue : 10BG4/1) : 墓土C類。
- 沙黒褐色土 (Hue : 10YR3/1) : 性質は墓土D類だが土色が異なる。
- ⑫灰色土 (Hue : 10YR5/1) : 墓土B類。⑬との境界が

- 酸化変色している。
- ⑭灰色土 (Hue : N5/1) : 墓土C類。
- ⑮灰褐色土 (Hue : N4/1) : 墓土D類。灰色ブロックを含む。
- ⑯灰色土 (Hue : N4/1) : 墓土B類。⑰との境界が酸化変色している。
- ⑰灰褐色土 (Hue : 5Y5/2) : 墓土C類。全体が酸化変色。
- ⑱灰色土 (Hue : N5/1) : 墓土C類。
- ⑲灰褐色土 (Hue : 7.5Y5/2) : 墓土D類。
- ⑳灰色土 (Hue : N6/1) : 墓土B類。
- ㉑灰色土 (Hue : 5Y4/1) : 墓土A類かB類。
- ㉒灰色土 (Hue : N4/1) : 墓土C類。
- ㉓暗灰色土 (Hue : 10YR5/1) : 墓土B類。
- ㉔暗褐色土 (Hue : 10YR2/2) : 墓土A類かB類と考えられるが、色調が黒く異質である。
- ㉕反灰色土 (Hue : N4/1) : 墓土C類。
- ㉖暗褐色土 (Hue : 10TR3/1) : 性質は墓土D類だが土色が異なる。
- ㉗暗灰黃色土 (Hue : 2.5Y5/2) : 墓土B類。境界が著しく酸化変色している。
- ㉘反色土 (Hue : N4/1) : 墓土C類。
- ㉙暗褐色土 (Hue : N5/1) : 墓土C類。
- ㉚暗褐色土 (Hue : 10YR3/1) : 性質は墓土D類だが土色が異なる。
- ㉛反色土 (Hue : N4/1) : 墓土B類。
- ㉜反色土 (Hue : N4/1) : 墓土C類。色調は㉖と類似するが、境界が酸化変色している。
- ㉝暗褐色土 (Hue : N3/1) : 墓土C類。
- ㉞暗褐色土 (Hue : 10YR3/1) : 性質は墓土D類だが土色が異なる。

第16図 2号堀立柱建物跡(S=1/60)



【SB3 柱穴の埋土注記】

- ①明黄褐色土 (Hue : 25Y 6/4) : 球粒土 C類
 ②暗黃色土 (Hue : 25Y 5/3) : 球粒土 C類

③明黃褐色土 (Hue : 25Y 7/6) : 球粒土 C類。プロック状の土の集合体。性質はボロボロしている。

④黒褐色土 (Hue : 10YR 3/1) : 性質は球粒土類だが土色が異なる。

⑤明黃褐色土 (Hue : 10YR 3/1) : 球粒土 C類

⑥黑褐色土 (Hue : 10YR 3/1) : 性質は球粒土類だが土色が異なる。

⑦明黃褐色土 (Hue : 25Y 7/4) : 球粒土 C類。③と同じ。

⑧黑褐色土 (Hue : 10YR 3/1) : 性質は球粒土類だが土色が異なる。

⑨明黃褐色土 (Hue : 25Y 7/6) : 球粒土 C類。③と同じ。

⑩黑褐色土 (Hue : 10YR 3/1) : 性質は球粒土類だが土色が異なる。

⑪唯黃色土 (Hue : 25Y 4/2) : 球粒土 C類

⑫暗褐色土 (Hue : 10YR 3/1) : 球粒土 C類

⑬明黃褐色土 (Hue : 25Y 7/6) : 球粒土 C類

⑭明黃褐色土 (Hue : 25Y 6/4) : 球粒土 C類。黒土と明黄色土ブロックの混在体

⑮黃灰土色 (Hue : 25Y 4/1) : 球粒土 C類か D類。

⑯明黃褐色土 (Hue : 25Y 6/1) : 球粒土 B類。

⑰明黃褐色土 (Hue : 25Y 7/6) : 球粒土 C類

⑲黃褐色土 (Hue : 25Y 5/1) : 球粒土類

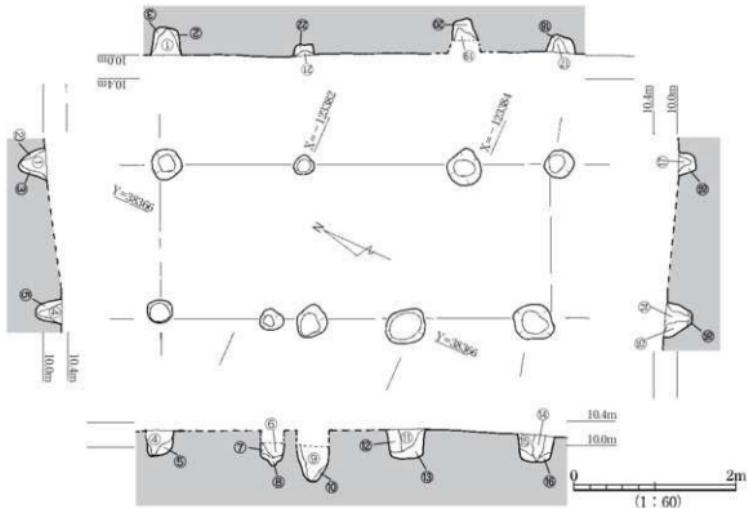
第17図 3号堀立柱建物跡(S=1/60)

3号掘立柱建物跡（SB 3）（第17図）は、SB 1と柵列Aを隔てて隣接する。規模は、SB 2と類似しており、梁行1間（370cm）×桁行3間（600cm）で、およそ12尺半×20尺の規格である。

4号掘立柱建物跡（SB4）（第18図）は、SB2とSB3の間に位置し、SB2と直交し、SB3とはほぼ並行する。規模は、梁行1間（185cm）×桁行3間（480cm）で、6尺×16尺の規格と考えられる。身舎面積8.9m²と小形である。柱穴間も等間隔でなく、柱穴径にばらつきがあり、他の掘立柱建物跡と比べて粗末な造りである。住居跡というより倉庫など小規模の建物跡と考えられる。

構列AはSB1とSB2～4の間を隔てるよう配されている。構列AはSB1と軸をほぼ同じくし、石列Aの南端部付近にむかっている。列は全長21m(約70尺)で、柱穴が少しずつ並びを変え、9m・8m・4mの3段で構成される。柱穴間は170～200cm程の間隔である。柱穴の多くからは10cm前後の礫が多数検出され、柱を固めていた根固め石と考えられる。

構列BはSB 2と石列B・C・Dとの間に位置する。鍾状に直角に折れ曲がる形状であり、石列Bとの間の東列の長さは3間の515cm(約17尺)、石列C・Dとの間の北列の長さは395cm(約13尺)の全長9.1m(約30尺)である。柱穴径は45~50cm前後と比較的大きい。SB 2とは軸を同じくすることから、SB 2に付随すると考えられる。



[SB4 柱穴の埋土注記]

- ①褐色色土 (Hue : 2.5Y 5/1) : 理土B類
- ②黒褐色土 (Hue : 2.5Y 3/1) : 理土D類。灰色土との混合
- ③黒褐色土 (Hue : 2.5Y 3/1) : 性質は理土D類だが土色が異なる
- ④黄褐色土 (Hue : 2.5Y 5/1) : 理土B類が中心だが、C類が混同している可能性がある。
- ⑤黒褐色土 (Hue : 2.5Y 3/1) : ④と同じ
- ⑥黒褐色土 (Hue : 5Y 4/1) : 理土B類に類似しているが若干異なる
- ⑦黒褐色土 (Hue : 2.5Y 3/1) : ⑥層に似ているが明黄

- 褐色色土ブロックを多く含む
- ⑧黒褐色土 (Hue : 2.5Y 3/1) : ⑨層に似ているが明黄
褐色色土ブロックを含まない
- ⑩黄褐色土 (Hue : 2.5Y 5/1) : 理土B類とC類の混合
- ⑪淡黄褐色土 (Hue : 5Y 6/4) : 理土D類
- ⑫灰白色土 (Hue : 10YR 7/1) : 理土B類、粘質強し
- ⑬黒褐色土 (Hue : 2.5Y 3/1) : 理土C類
- ⑭黒褐色土 (Hue : 2.5Y 3/2) : 理土C類とD類の混合
- ⑮灰褐色土 (Hue : 5Y 5/1) : 理土B類
- ⑯褐褐色土 (Hue : 10YR 5/1) : 理土C類。灰色と淡黄
- 褐色色土ブロックを多く含む
- ⑰黒褐色土 (Hue : 7.5Y 3/1) : 性質は理土D類だが土色が異なる
- ⑲黄褐色土 (Hue : 2.5Y 4/1) : 理土B類
- ⑳黒褐色土 (Hue : 10YR 5/1) : 理土C類
- ㉑褐色土 (Hue : N45/1) : 理土B類とC類の混合か
- ㉒黒褐色土 (Hue : 2.5Y 3/1) : 理土C類
- ㉓黒褐色土 (Hue : 10YR 3/1) : 理土C類。淡黄色ブロックを多く含む
- ㉔黒褐色土 (Hue : 10YR 3/1) : 理土C類とD類の混合か。㉕層と似ているが含有物が無い

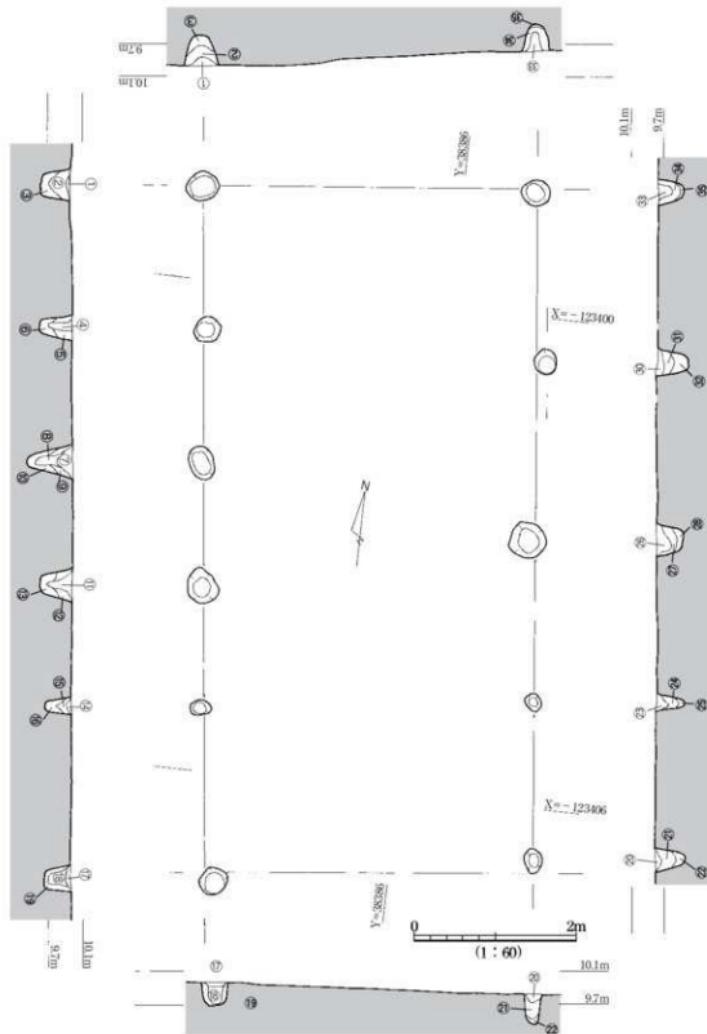
第18図 4号堀立柱建物跡(S=1/60)

遺構名	梁行×桁行	規模 (cm)	身舎面積	梁行柱間 (cm)	桁行柱間 (cm)	主軸	柱穴径 (cm)	備考
SB 1	1間×4間	515×790	40.7m ²	515	185~220	N-76° -E	35~70	南列は柱穴1つ欠
SB 2	1(2)間×3間	390×600	23.4m ²	195(390)	190~200	N-67° -E	33~51	梁行は東列1間・西列2間
SB 3	1間×3間	370×600	22.2m ²	370	190~205	N-18° -W	36~50	
SB 4	1間×3間	185×480	8.9m ²	180~195	120~195	N-24° -W	24~50	桁行の柱穴間が不均等
SB 5	1間×4(5)間	416×840	34.4m ²	400~410	150~215	N-7° -W	23~46	桁行は東列4間・西列5間

第2表 A区検出堀立柱建物跡一覧表

構列CはSB 2の北面に位置する。柱穴3個から構成され、全長340cmである。SB 2とは桁方向と軸を同じくし、約100cm離れている。SB 2の庇、または付随する構列と考えられる。

5号堀立柱建物跡(SB 5)(第19-21図)は、SB 1~4と少し離れた調査区南東隅部F12グリッド付近で検出された。2号溝状遺構(S E 2)と7号溝状遺構(S E 7)に囲まれている。規模は、梁行1間(410cm)×桁行4~5間(840cm)で、13尺半×28尺と考えられる。桁行は東列が4間、西列が5間と異なる。柱穴径は30cm前後とやや小さめであるが、柱穴の多くから柱痕が確認された。身舎面積は34.4m²とやや大形の建物跡である。



[SBS 5柱穴の埋土注記]

- | | |
|--|--|
| ① 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 A類か C類。酸化変色あり | ⑨ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 C類 |
| ② 黒褐色土 (Hue : 2.5Y3/1) : 埋土 C類 | ⑩ 黒褐色土 (Hue : 2.5Y3/1) : 埋土 D類 |
| ③ 雜灰黃色土 (Hue : 2.5Y4/2) : 埋土 D類 | ⑪ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 B類 |
| ④ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 B類 | ⑫ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 C類 |
| ⑤ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 B類 | ⑬ 雜灰黃色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 D類 |
| ⑥ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 C類 | ⑭ 雜灰黃色土 (Hue : 2.5Y-4/2) : 埋土 D類 |
| ⑦ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 C類 | ⑮ 明褐色土 (Hue : 7.5YR5/6) : 埋土 A類か C類。酸化変色あり |
| ⑧ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 C類 | ⑯ 黑褐色土 (Hue : 10YR3/1) : 埋土 C類 |
| ⑨ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 C類 | ⑰ 雜灰黃色土 (Hue : 2.5Y5/2) : 埋土 D類 |
| ⑩ 黑褐色土 (Hue : 2.5Y3/1) : 埋土 A類 | ⑱ 黑褐色土 (Hue : 2.5Y3/1) : 埋土 A類 |
| ⑪ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 B類 | ⑲ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 B類 |
| ⑫ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 B類 | ⑳ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 B類 |
| ⑬ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 C類 | ㉑ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y-4/1) : 埋土 B類 |
| ㉒ 雜灰黃色土 (Hue : 2.5Y5/2) : 埋土 D類 | ㉓ 雜灰黃色土 (Hue : 2.5Y5/1) : 埋土 B類 |
| ㉔ 黑褐色土 (Hue : 2.5Y3/1) : 埋土 A類 | ㉕ 雜灰黃色土 (Hue : 2.5Y3/1) : 埋土 D類 |
| ㉕ オリーブ黒色土 (Hue : 5Y3/1) : 埋土 B類 | ㉖ 雜灰黃色土 (Hue : 2.5Y-4/2) : 埋土 D類 |

第19図 5号堀立柱建物跡(S=1/60)

(2) 溝状遺構 (SE 1 ~ SE 2 · SE 7 ~ SE 10: 第20図~第22図・第3表)

溝状遺構はA区で6条検出された。

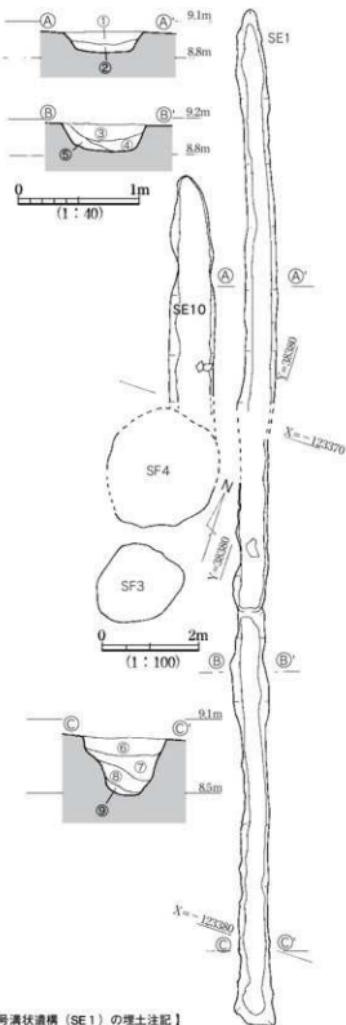
【遺構】 1号溝状遺構 (SE 1) (第20図)は、全長約21m・幅50~70cmである。検出された深さは南側が約15~30cm、北側が約45cmと北側が深い。北側は南側より1段深く掘られており、切り合い関係から北側の方が新しく、延長または掘り直しによるものと考えられる。遺構の横断面は箱形を呈しており、流路というよりも堀や境界溝として作られたと推測される。門跡と考えられる土坑2基 (SC 1 · 2) を結んだ線やSB 1 ~ 4、石列 A ~ Dなどと主軸が類似していることから、これらは一連の遺構群と考えられる。遺構中から古墳時代の須恵器片1点、古代の土師器片1点・中世の青磁片1点・近世の陶器片1点が出土した (第22図-38 · 39)。遺構の時期はおそらく18世紀以降に比定される。

2号溝状遺構 (SE 2) (第21図)は、調査区南東隅部、5号掘立柱建物跡 (SB 5) に東面し、7号溝状遺構 (SE 7) と直交気味に位置する。SB 5とは軸をほぼ同じくし、80~90cm程度離れている。南側が調査区域外で途切れているが全長1130cm以上、幅30~40cm、深さ5~10cmである。SB 5に付帯する溝と考えられる。

7号溝状遺構 (SE 7) (第21図)は、SE 2同様、調査区南東隅部で検出された。5号掘立柱建物跡 (SB 5) に北面し、2号溝状遺構 (SE 2) と直交気味に位置する。平面形は直線状ではなく、西側から東側にかけて窄まる形を呈する。排水用トレーニチでの破壊と、西側が調査区域外に延びており、正確な規模は不明であるが、検出長約680cm・幅30~130cm・深さ10~20cmである。SB 5に付帯する溝と考えられるが、5号井戸跡 (SF 5)との関連も考えられる。

8号溝状遺構 (SE 8) · 9号溝状遺構 (SE 9) (第22図)はE8グリッド北西部に位置する。丘状に盛り上がった部分と小段差で区画された遺構集中区を分離するような形で配されている。特にSE 9はSE 1 · 10と直交し、関連も考えられる。遺構は、一見、2又の溝状遺構と考えられたが、断面等を確認するとSE 9がSE 8を切っている形であり、時期差と考えられる。SE 8 · SE 9からは遺物がわずかに出土した。遺物が少なく断定は難しいが、遺構年代は、中世遺物を伴うSE 8が古く、近世遺物を伴うSE 9が新しいと考えられる。

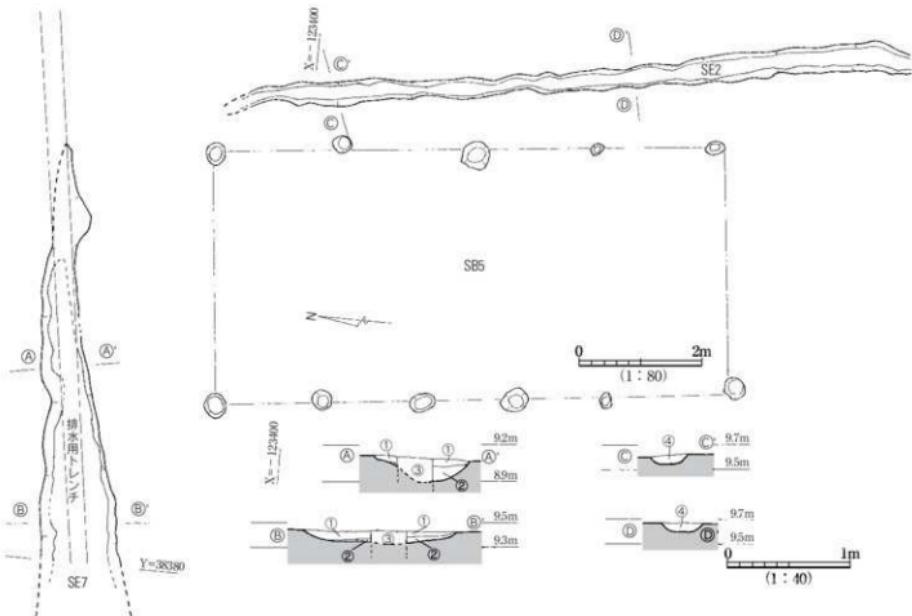
10号溝状遺構 (SE 10) (第20図)はE8グリッド南東部に位置する。検出長約520cm・幅約70~90cm・深さ15~25cmで、SE 1と平行し、4号井戸跡 (SF 4) にぶつかり消滅している。SF 4に関連する溝と考えられ、SE 1 · SF 4と同じ、または近い時期に比定される。



【1号溝状遺構 (SE 1) の埋土注記】

- ① 黄灰色土 (Hue : 2.5Y5/1) : 硬質で、粗粒の灰色砂質土を含む。
- ② 黄灰土 (Hue : 2.5Y6/1) : 軟質で、やや柔らかい。
- ③ 増灰黄色土 (Hue : 2.5Y4/2) : 軟質で粘性ややあり、粗粒の灰色砂質土を含む。
- ④ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y5/1) : やや硬質で、灰色粘質土を含む。
- ⑤ 黄灰土 (Hue : 2.5Y6/1) : 軟質で、灰色粘質土を含む。発化による赤化著しい。
- ⑥ 増灰黄色土 (Hue : 2.5Y6/4) : やや硬質で、粗粒の灰色砂質土を含む。
- ⑦ 黄灰色土 (Hue : 2.5Y5/1) : やや軟質で、粗粒の灰色砂質土を含む。
- ⑧ 増灰黄色土 (Hue : 2.5Y5/2) : やや硬質で、粗粒の灰色砂質土を含む。発化による赤化著しい。
- ⑨ 黄灰土 (Hue : 2.5Y6/1) : やや軟質で粘性あり。粗粒の灰色砂質土と灰色粘質土を含む。

第20図 1号 · 10号溝状遺構 (S=1/100 · 1/40)



【2号・7号溝状遺構(SE2・7)の埋土注記】

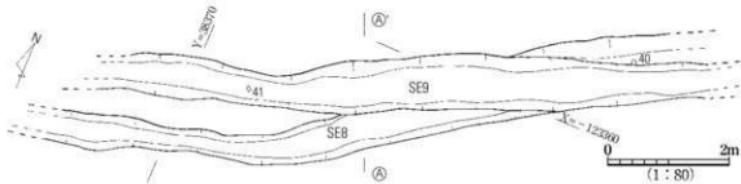
①黄灰色土(Hue: 2.5Y6/1): 粘性ややあり。粗粒の灰色砂質土を含む。

②暗灰黄色土(Hue: N6/): 粘性ややあり。粗粒の灰色砂質土を含む。

③トレンチ断面にて堆積土なし。

④黄灰色土(Hue: 2.5Y6/1): やや硬質で、粗粒の灰色砂質土を含む。

第21図 2号溝状遺構(S=1/80・1/40)



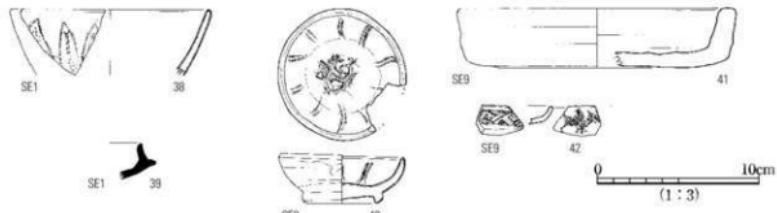
【8号・9号溝状遺構(SE8・9)の埋土注記】

①黄褐色土(Hue: 2.5Y5/4): 粘性があり、粗粒の灰色砂質土を含む。

②灰色粘質土(Hue: N4/): 粘性が強く、①同様粗粒の灰色砂質土を含む。

③にじむ黃色土(Hue: 2.5N6/4): 基本層序第V層と類似する。

④暗反黃色土(Hue: 2.5Y5/2): 基本層序第V層と類似するが、色調が暗く粘性もある。



第22図 8号・9号溝状遺構(S=1/80)及び出土遺物(S=1/3)

【遺物】SE 1・8・9から遺物が出土した(第22図-38~42)。

SE 1からは2点出土した(第22図-38~39)。39は須恵器坏身の口縁部片である。陶邑編年のTK217併行期あたりか。38は龍泉窯系青磁碗の口縁部から体部にかけてである。外面に開弁のない鎬蓮弁文を施す。14世紀後半から15世紀頃か。

SE 8からは1点、SE 9からは2点の計3点出土した(第22図-40~42)。大きな遺物ではなく、流れ込みの可能性も大いに考えられるが、遺物に時期差があり、遺構の時期差を想定できる。40はSE 8出土の龍泉窯系青磁皿ではほぼ完形に近い。文様・施釉状態から考えて、14世紀代に比定できる。42は磁器の小皿片である。内面口縁部に四方擇文、外面に松木の文様を施す。時期は18~19世紀頃と考えられる。41は瓦質陶器の盤か蓋である。

遺構名	検出長(cm)	検出幅(cm)	検出深(cm)	方位	備考
SE 1	2,100	50~70	15~45	N-21° -W	古代~近世の遺物が出土。
SE 2	1,130以上	30~40	5~10	N-9° -W	SB 5に平行。SE 7と直交気味。
SE 7	680以上	30~130	10~20	N-82° -E	西側は調査区域外に延びる。
SE 8	1,100	35~95	17	N-59° -E	SE 9によって一部削平。遺物1点。
SE 9	1,050	50~95	28	N-68° -E	SE 8を削平。遺物1点。
SE10	520	70~90	15~25	N-18° -W	SE 1と平行。SF 4と合併する。

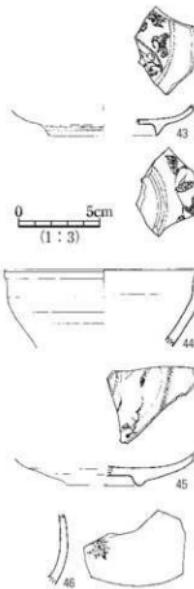
第3表 A区溝状遺構表

(3) 石列 (石列A~石列E: 第23図~第27図)

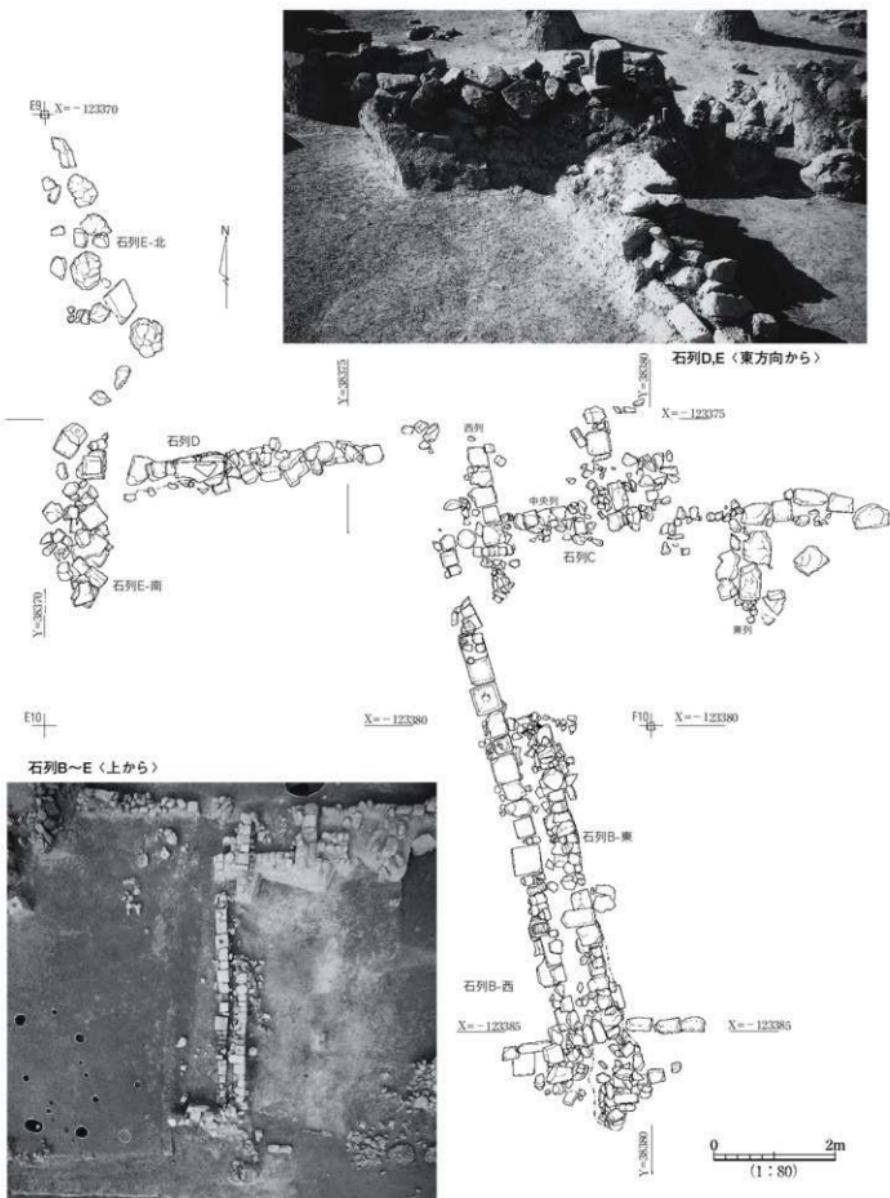
A区では中央部に石列が数か所確認された。各石列は複雑に繋がり合っており、一連の構造物とも考えられるが、列軸や構成要素など、各石列によって差違があることから、大きくA~Eの5か所に区切ることとする。

石列Aは、調査区南側E11グリッド南側で検出された(第6図)。石材は直径20~60cmの大形の岩のようなシルト塊を用いている。石列は東西に約12m・およそ105°北側に約4mに折れる形である。1号掘立柱建物跡(SB 1)と軸をほぼ同じくし、柵列Aと石列AでSB 1を囲うような配置である。石の並べ方は、前後2列で、前列に比べて後列の方が大きい石を用いている。積み方は、組み合わせるのではなく、石の長辺を軸に合わせて置いただけであり、1段積みである。5号井戸跡と6号井戸跡の上に築かれており、これらが造られた時期よりも新しいことがわかる。遺物は石列中から遺物が4点出土した。内訳は青花染付皿片(第23図-43)、瀬戸・美濃系天目茶碗片(第23図-44)、初期伊万里と考えられる陶磁器皿片(第23図-45)、肥前系と考えられる染付片(第23図-46)が出土しており、14~18世紀頃の幅広い年代を示す。このことから、後世の混入などの可能性もあるが、石列Aは18世紀以降に築かれた可能性が高い。

石列Bは、調査区中央部E9・E10グリッド東側で検出された(第24図・第25図)。大きく2列から構成され、2つは約30~40cmの間隔で並行している。石列は両方とも直方体や立方体に整形されたものや五輪塔・宝篋印塔などの石塔の破片を転用したものが多い。石材は、一部石列A同様シルト塊であるが、ほとんどが凝灰岩である。直方体や立方体に整形された石は、整形しているわりに大きさが不統一であり、石列構築のために整形したとは考えにくい。石塔類基礎石や基壇に用いられていた石塔類の石を転用したと考えられる。東側の石列(石列B東列)は、全長約11m・奥行き約40~100cmであるが、北側から約2.0mから約4.5mの幅約2.5



第23図 石列A出土遺物 (S=1/3)



第24図 石列検出状況図(S=1/80)

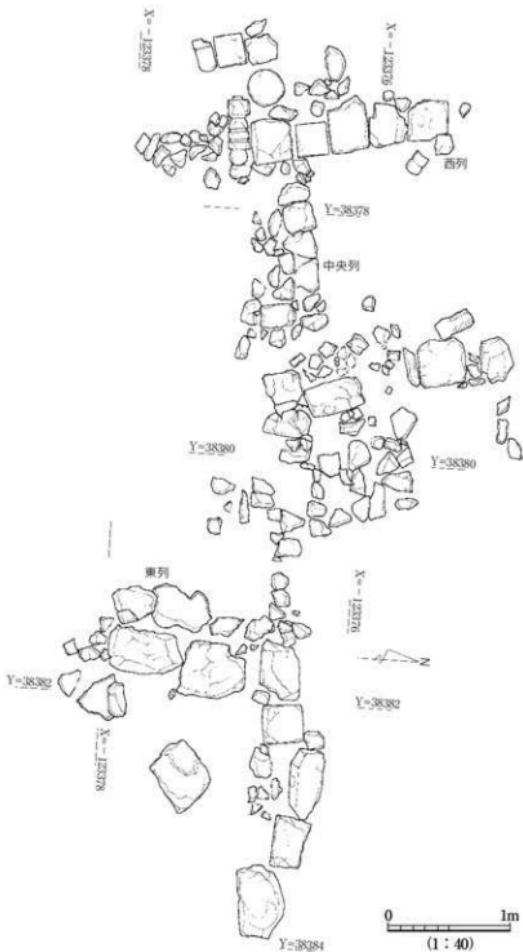


第25図 石列B検出状況及び土層堆積状況図(S=1/40)

mのところに石列が存在しない。高さは場所によって若干異なるがおよそ40cmで、2～3段石を積んでいる。石は、掘立柱建物群と反対方向の東方向に面を描えている。西側の石列（石列B西列）は、全長約9.0m・奥行き約50～100cmであるが、北側から約0.6mから約1.0mまでの幅約40cmところに石列が存在しない。高さは場所によって若干異なるがおよそ30～50cmで、1～2段石を積んでいる。石列はB東列とはほぼ同じ軸で、同様に東面を描えている。石列B東列とB西列は、並行している配置状況などから、当初排水溝ではないかと推測した。しかし、排水溝ならば描えた面を対面に配置する例が多いが、同じ東方向に面を描えていることから、東面を意識した積み方と考えることができる。石列B東列とB西列は、構造や配置などに共通点が多く、関連が強く想定される。しかし、東列基底面は西列基底面より高く、断面の土層堆積状況（第25図－上）を確認すると、西列が埋没した後に東列を築いているようである。よってこの2つの石列は、同時期ではないが近い時期に築かれたと推定できる。また、西列と東

列の南端部は、石列が乱れており、そこから東方向に開いた石列が伸びる（石列B南列）。この石列の軸は、現在の国土地標（第II系）の東西方向にはほぼ等しく、東列と西列の軸と直交するのではなく、約100°開く。南列の軸は、どちらかというと後述する石列Cと平行する。

石列Cは、調査区中央部E9グリッド東側で検出された（第24図・第26図）。東西南北の大きな1列（石列C中央列）と直交する小さな2列（石列C東列・石列C西列）から構成される。石列C中央列は、全長約7.0mの1段積みであり、西端が石列Bと交差する。使用石材の多くは、シルト塊であり、10cm小形のものから60cm以上の大型のものまである。一部整形された凝灰岩製のものがあり、一つは五輪塔の火輪部分である。西側は北面を描えているが、東側は無造作に一列に並べているようである。主軸も石列BやDほど直線的ではなく、歪んでおり、強い規格性は感じられない。石列C東列は中央列と直交する形で、全長約1.8m、東側に60cm以上のシルト塊を3個、西側に10～40cm程度のシルト塊を複数個並べている。石列C西列は中央列から北方向に直交するような形で全長約1.7m、南端は石列C中央列に入り込む形で石を並べている。構成石は、10～40cm程のシルト塊が主であるが、整形された凝灰岩と宝塔の相輪片が確認される。相輪片は本来、円柱状であったと思われるが、上部を水平に削っている。



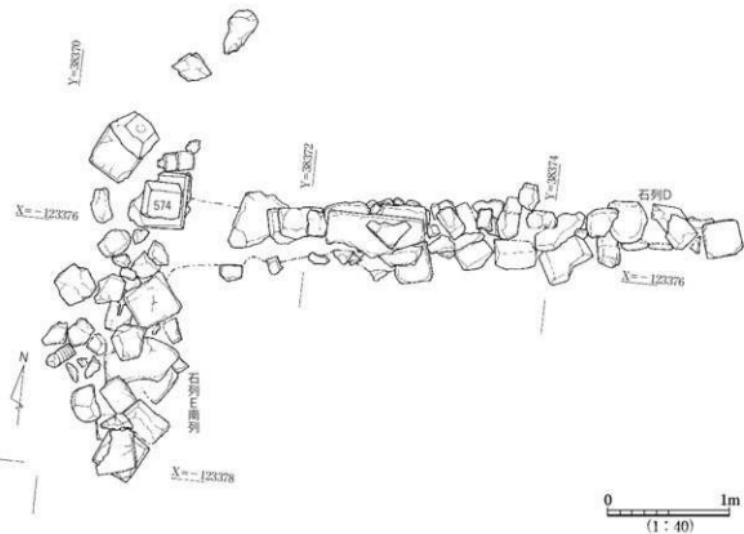
第26図 石列C検出状況図(S=1/40)

石列Dは、調査区北側E9グリッド中央部で検出された（第24図・第27図）。全長約4.1m・奥行50cm前後で、石列B南列同様、主軸が現在の国土座標（第II系）の東西方向にはほぼ等しい。石材は、ほとんどが凝灰岩で直方体や立方体に整形したものが多い。中には五輪塔の空輪片なども確認された。積み方は、板状の薄手の石を2～3段に積み、北面を揃えている。石列BやCの上面と石列Dの基底面は高さがほぼ同じであり、ある程度石列BやCが埋没した後、つまり時期的に遅れて構築されたと考えられる。

石列Eは、調査区北側E9グリッド西部で検出された（第24図・第27図）。調査前の段階で、上面が少し見えており、最近まで耕地の境界として用いられていたようである。検出長約15.5mであるが、南側（石列E南列：全長約6.0m）と北側（石列E北列：全長約8.0m）に分かれる。南列の主軸は、石列Dと直交し、現在の国土座標（第II系）の南北方向にはほぼ等しい。南列の使用石材は、10～30cmの小形シルト塊や直方体や立方体に整形された凝灰岩が多く、中には五輪塔の空風輪・火輪・地輪の破片なども確認された。石列の上に地蔵輪の龕部が確認された（第110図-574）が、これは後世に配されたと考えられる。北列は、石積みではなく、1m以上の大形シルト塊を並べたものである。主軸も南列と異なる。石列Eは、石列D同様、基底面が石列B・C列より高く、後の時代に構築されたと考えられる。

一つに繋がるような石列群は、各石列を個別に検討すると、時期や構築方法に差違が確認できる。石列構築材は、石塔片の転用品を多用するもの（石列B・D・E南列）、シルト塊を多用するもの（石列A・C・E北列）がある。積み方は、1段で並べるもの（石列A・C・E）、2～3段に積み上げるもの（石列B・D）がある。石列Bは、土層堆積状況確認によって、東列と西列が時期差をもって構築されたと推定できる。これらを総合的に考えると、石列群は、同時期に一齊に構築されたのではなく、必要に応じて増改築を行っていったと推測できる。また、掘立柱建物群（SB1～4）とは、①石列と掘立柱建物群は主軸が近く平面的に重複部分がない。②石列B・C・Dなどは、掘立柱建物群の反対側の石列面を揃えている。などから、偶然の位置関係でなければ、両者は関連構造物と考えられる。詳細な石列構築時期は不明であるが、18世紀以降と考えられる。

X=-123374
Y=38370



第27図 石列D・E検出状況図(S=1/40)

(4) 井戸跡 (SF1～SE4：第28図～第37図)

A区において井戸跡は6基確認されたが、うち2基(SF5・SF6)は中世に時期比定し、前掲している(p11～19)。ここでは、残り4基についての記述を行う。

1号井戸跡 (SF1)：(第28図～第30図)

【構造】D9グリッド南東隅部で検出された。検出面は第Ⅲ層。調査前は横に大きな木が生えており、一部木根が遺構に入り込んでいた。上部は石積であり、長辺30～60cm前後×短辺15～30cm前後×厚さ10～15cm前後の直方体の凝灰岩を5段前後、高さ約80cmで、平面六角形に組み合わせ積んでいる(写真右)。石積下は、長さ約195cm×幅13cm前後×厚さ3.5cmのスギ(樹種同定結果は第IV章第6節)の板材16枚を筒状に埋め、最大径73cm×深さ約195cmの結構としている。結構には数か所(確認したのは5か所)の竹を編んだ籠が確認された。籠間は20～30cm程度である。石積と結構をあわせた井戸枠は深さ約275cmとなる。掘形の土坑は、最大径223cm、井戸枠下約7cmまで掘られており、深さ約282cmである。掘形の埋土堆積状況は、水平にブロック状の粘質土が堆積しており、構築にはある程度埋めては水平に固める方法を採用していたと推測される。築造時期については、遺物から考えて江戸時代末期から明治時代にかけての19世紀後半頃と考えられる。

【遺物：第29図・第30図-47～63】出土した遺物は、井戸枠の構成石と木枠板、土師器2点・須恵器1点・磁器6点・陶器2点・錢貨1点・瓦1点である。土師器の1点と須恵器1点は他の遺物より明らかに古い時代であるので、混入品として扱い、別掲している(第85図-255、第86図-268)。

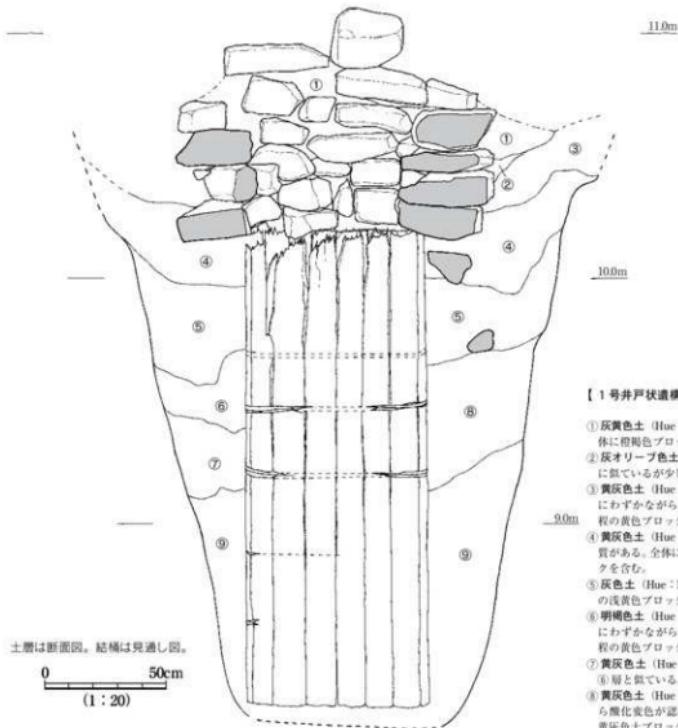
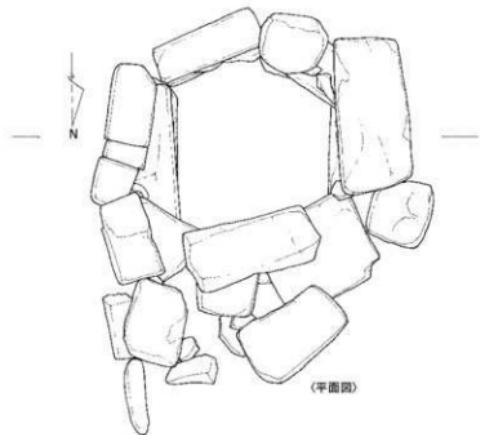
【木製品】47～52は井戸の木枠板である。本来、16枚で1本の結構を形成していたのであるが、そのうち墨書きのある6枚を図化した。1枚が長さ171～195cm、幅15～17cm、厚さ3.5cm。樹種同定(第IV章第6節)によると、マツ科モミ属である。ところどころ消失し、判読しにくいが、肉眼や赤外線スコープにより、47には「□□ 八大龍王宮 守護」、48には「□□□□□□□□□□□□伽羅龍王 和修吉龍王」、49には「□□又迦龍王阿那婆達多龍王摩那斯」、50には「□□□□□羅龍王等若干百千眷属」、51には「二己之 二月 大吉 日」、52には「當寺 十五世 寂水獻立」と墨書きされている(□□は判読不能)。岩波書店『広辞苑(第四版)』などによると、「八大龍王」は法華經に出てくる八竜神のことと、水の神や雨乞いの神ともされる。ここでは、井戸枠に記すことによって、井戸が枯れることなく豊かな水が得られることを祈念したのであろう。ここで、八大龍王の各龍王を判読不能箇所に当てはめると、「□□ 八大龍王宮 守護／羅陀龍王跋



1号井戸跡(上から)



1号井戸跡(北方向から)



第28図 1号井戸跡検出状況図(S=1/20)

八 大 龍 王 宮 守 護

大 神 宮 尊 譲

伽(羅) □

48

47

(婆)(達) (龍)(王) □ 那斯

48

千脊属

龍王等 若干百

50

千脊属

50

二巳之 二月 大吉 日

51

二月 大吉 日

52

當寺 十五世 寂水(敬立)

十七 畠水(敬立)

52

文字は肉眼で判読できるもののみ記載

□…文字はあるが肉眼で判読できないもの

()…文字が不明瞭なもの

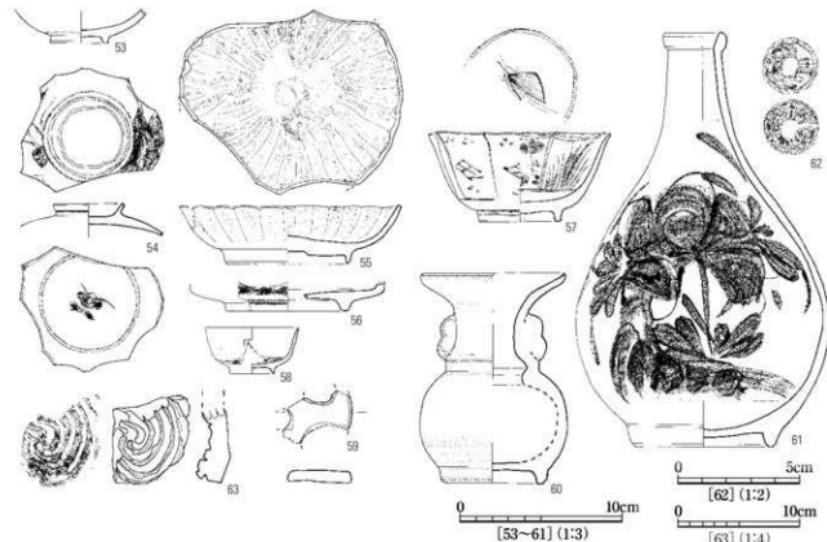
▲…楔形の跡がある場所

0 25cm
(1 : 10)

第29図 1号戸跡出土木製品(S=1/10)

雜陀龍王 婆伽羅龍王 和修吉龍王 德又迦龍王 阿那婆達多龍王 摩那斯龍王 優鉢羅龍王 等若干百千眷属／二己年二月大吉日／當寺「十五世 寂水獻立」となる。最末行に書かれている「當寺」という表現は、この地が寺院もしくは寺院関連遺構であったことを証明するもの一つとなろう。遺物に書かれているのであれば、移動による可能性が考えられるが、遺構に書かれているものならば、移動の可能性はより低くなると考えられる。また、建立者もしくは関連者と考えられる「十五世 寂水」はC区の「十四世喝山刀岳大和尚禪師」の無縫塔(p85)を建てた「十五世 寂水」と同一人物とみられ、無縫塔が「安政四年[1857年]」と記されており、この前後に1号井戸が築かれたと推定できる。また、51の「二己年 二月」から可能性をさぐると、明治二年(己年)の可能性が考えられる。

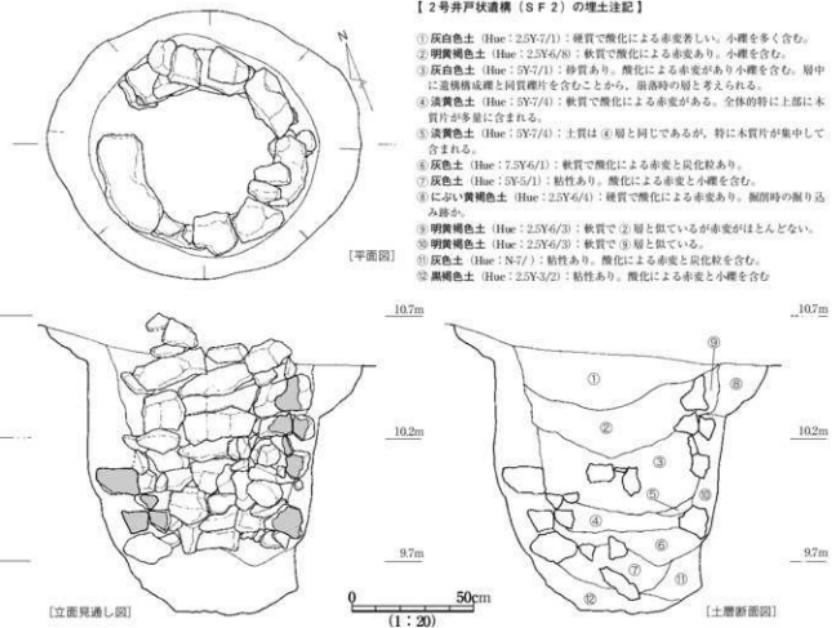
[陶磁器ほか] ほとんどが18世紀後半から19世紀にかけての範疇に入る。53は灰白色釉の丸碗である。産地不明。54は蓋付碗の蓋部であり頂部に椿花の文様がある。55は灰白色輪花皿である。底部は蛇の目形高台をもち、内面見込部には足付きハマの痕跡が確認される。56は肥前系磁器の蓋付鉢の底部付近である。おそらく重心の低い筒形であったと考えられる。57は内面見込み部に昆虫文をもつ肥前系磁器の八角鉢である。58は小壺で口唇部に口紅が確認された。60は仏花瓶である。明青灰でグラデーション調である。61は肥前系磁器の瓶(徳利?)である。長吉谷窯のものと類似する。62は銭貨である。「寛永通宝」である。63は瓦片である。渦巻状の線刻されており、飾瓦おそらく鬼瓦の一部と考えられる。SF4出土のものと類似する(第37図-73)。



第30図 1号井戸跡出土遺物(S=1/2・1/3・1/4)

2号井戸跡 (SF2)：(第31図)

【遺構】D9グリッド下南中央部で検出された。検出面は第Ⅲ層。掘形の土坑は長径1.3m×短径1.1mの平面プラン格円形で、検出面からの最深部までの深さは1.16mである。土坑の中央部に径約90cmの平面円形、深さ約90cmの筒状の石組が検出された。石組は主に長辺10~30cmの直方体に成形した泥岩を9~10段に積んでおり、上に行く程石が大きくなる。遺物は検出されなかった。時期比定については不明であるが、花粉分析や植物珪酸体分析などの結果、中世に比定されるSF5~6と異なり、SF1~4は同じような植生環境であった(第IV章第1・4節)ことによって、SF1・3・4と同じような時期に比定される可能性がある。



第31図 2号井戸跡検出状況図(S=1/20)

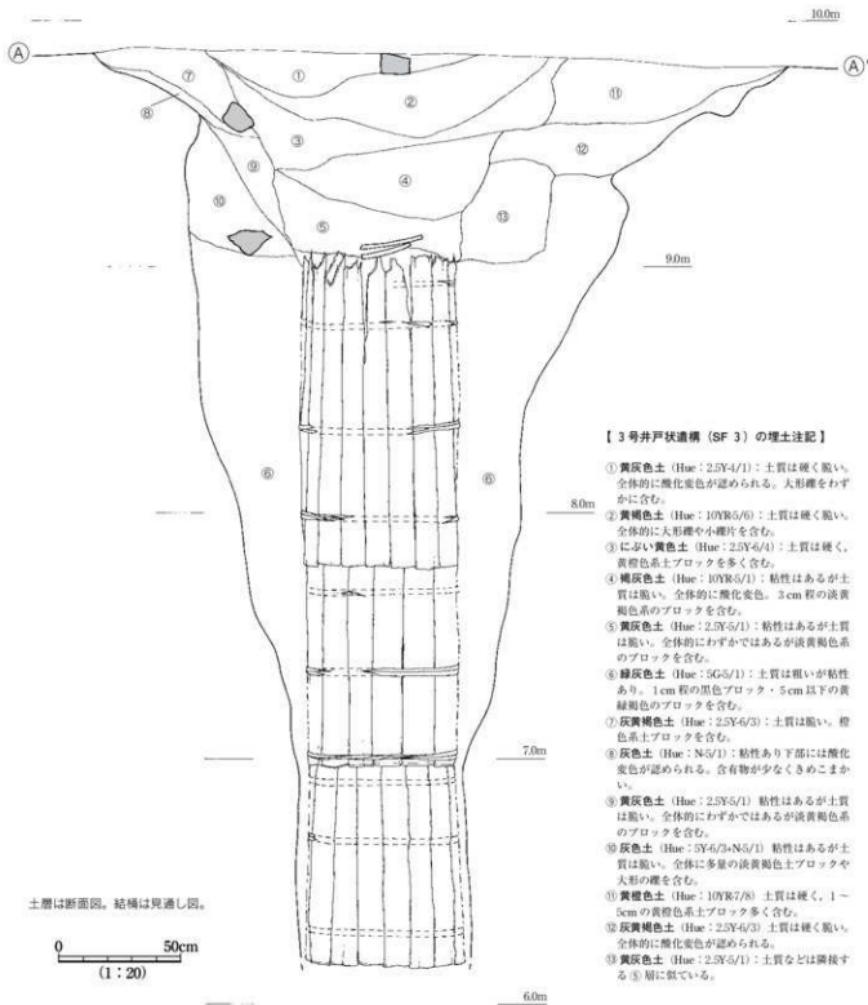
3号井戸跡 (SF 3) : (第32図～第34図)

【構造】E9グリッド東側で検出された。検出面は第Ⅲ層。掘形の土坑は2つあり、それぞれの平面プランは外側が長径2.92m×短径1.68mの不定規則形、内側が長径1.93m×短径1.71mの楕円形を呈する。最初、外側の土坑を掘削し、その後、内側の土坑を掘削したものと考えられる。内側の土坑を検出面から80cm程掘り下げたところ、土坑中央部から長さ約70cm×幅約15cm×厚さ1cmほどの板材2枚を「×」形に組んだものが確認され、さらにその下に直径約65cmの円形の木組みが確認された。さらに下を掘り進めると、木組みは3段組の結構となつた。結構の全長は2.94m、検出面からだと3.74mと4m近い深さとなる。3段組の各結構の長さは、上から1段目が1.28m・2段目が0.85m・3段目が0.85mである。各段の上端は外面、下端は内面を削り、組み合せやすく加工している。また、各段は、幅10cm前後の板材を16～18枚程度組み合

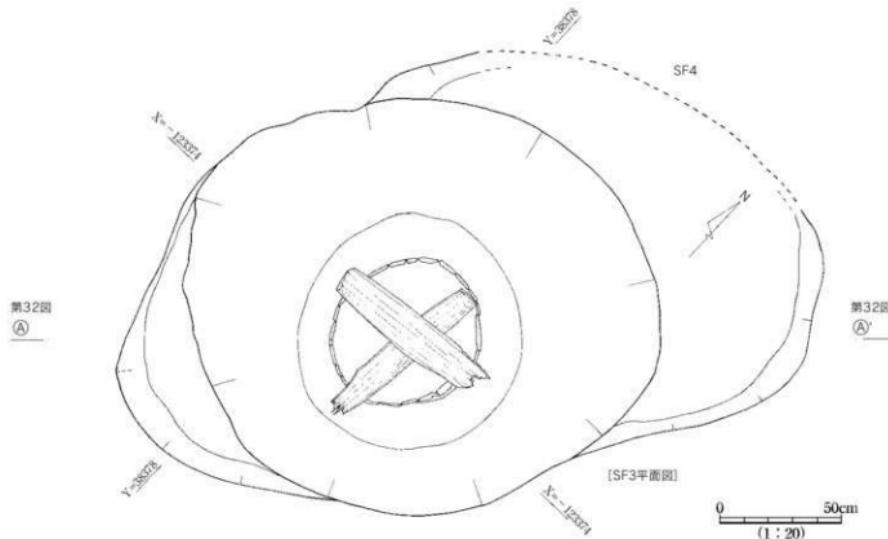


3号井戸跡

わせで円筒状とし、竹製の籠を3か所ずつ20~35cm間隔で施している。掘形土坑の埋土は、結構付近がほぼ単一層（第32図：土層堆積状況の⑥層）であり、一気に結構のまわりを埋めた可能性がある。検出面と結構間には何も検出されなかったが、本来もう一段あったものを廃絶時に除去したのかもしれません。その除去の為の作業痕跡が内側土坑の可能性がある。遺物は結構の他には石器と磁器が各1点ずつ出土している（第34図）。墓造年代を正確に判定することは難しいが、出土した遺物から18~19世紀頃の可能性がある。

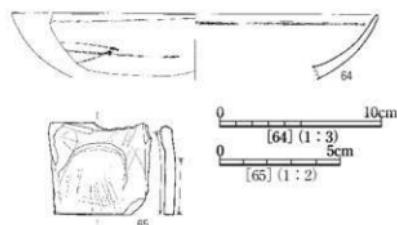


第32図 3号井戸跡検出状況図①(S=1/20)



第33図 3号井戸跡検出状況図②(S=1/20)

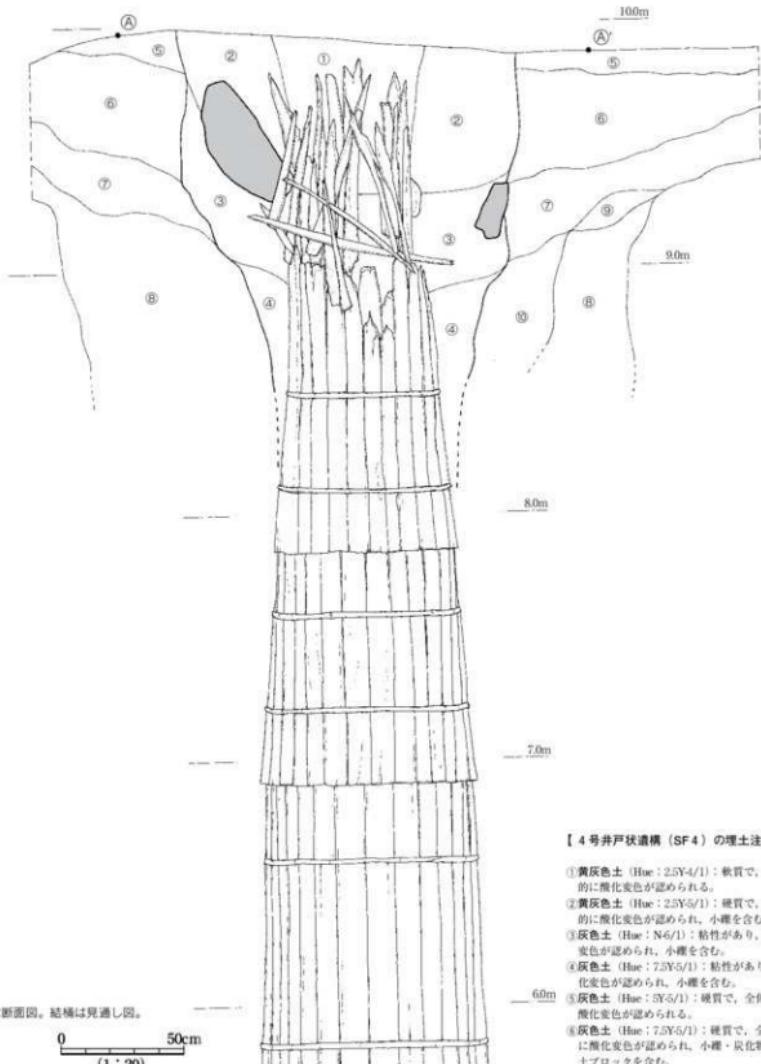
【遺物：第34図-64～65】出土した遺物は、磁器 1 点・砥石 1 点の計 2 点である。64は肥前系磁器の大形碗である。うがい碗と分類されることもある。波佐見産の可能性がある。64は 4 号井戸跡との破片が接合し、両者の時期的な近接ぶりがうかがえる。65は頁岩製の板状砥石である。表裏面に線状の擦痕が確認されるが、中でも表面のU字状のくぼみをもつ線状擦痕は異質である。



第34図 3号井戸跡出土遺物(S=1/2 · 1/3)

4号井戸跡（SF 4）：(第35図～第37図)

【構造】E9グリッド北東隅で検出された。検出面は第Ⅲ層。SF 3 と隣接し、互いの距離は約50cmである。掘形の土坑はSF 3 同様 2 つあり、外側が不明瞭であるが径 3 m 前後の平面円形で、内側が長径 1.47m × 短径 1.24m の平面橢円形である。掘形土坑検出面のすぐ下から縦に突き出した板材片が検出された。掘り下げるに、板材は平面円形となり、4段組の結構となった。結構の全長は 4.14m となる。4段組の結構の長さは、上から 1段目が破損しているがおよそ 0.8m・2段目が 1.25m・3段目が 1.05m・4段目が 1.30m である。各段の上端は外面、下端は内面を削り、組み合わせやすく加工している。また、各段は、幅 5 ~ 10cm 前後の板材を 25枚程度組み合わせて円形とし、竹製の籠を 2 ~ 3 か所ずつ 35cm 前後の間隔で施している。結構は、1段目の下端径が 0.57m・2段目の下端径が 0.75m・3段目の下端径が 0.88m・4段目の下端径が 0.93m と上に行くほど先細りして円錐状に近い形になる。外側の掘形土坑は、下部がほぼ單一層（第35図：土層堆積状況の⑧層）であり、一気に結構のまわりを埋めた可能性がある。また、内側の掘形土坑の上部、破損している結構の1段目付近から一辺 60cm 以上・厚み約 20cm の凝灰岩製方形板石が検出された。結構1段目の破損状況、大形板石の検出場所、内側掘形土坑の存在は、井戸の廃絶を連想させるものである。遺物は磁器 4 点・陶器 4 点・瓦 1 点・石器 2 点が出土した（第37図）。築造年代を正確に判定することは難しいが、SF 3 同様、出土した遺物から18~19世紀頃の可能性がある。

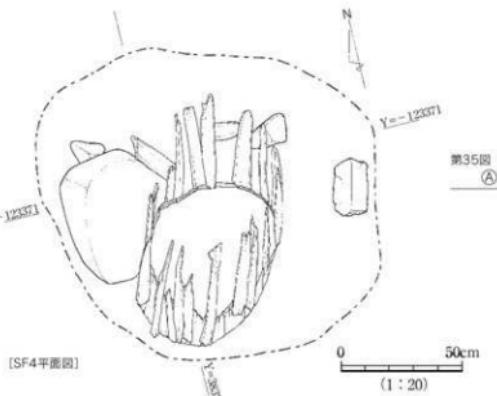


【4号井戸状構造(SF4)の埋土注記】

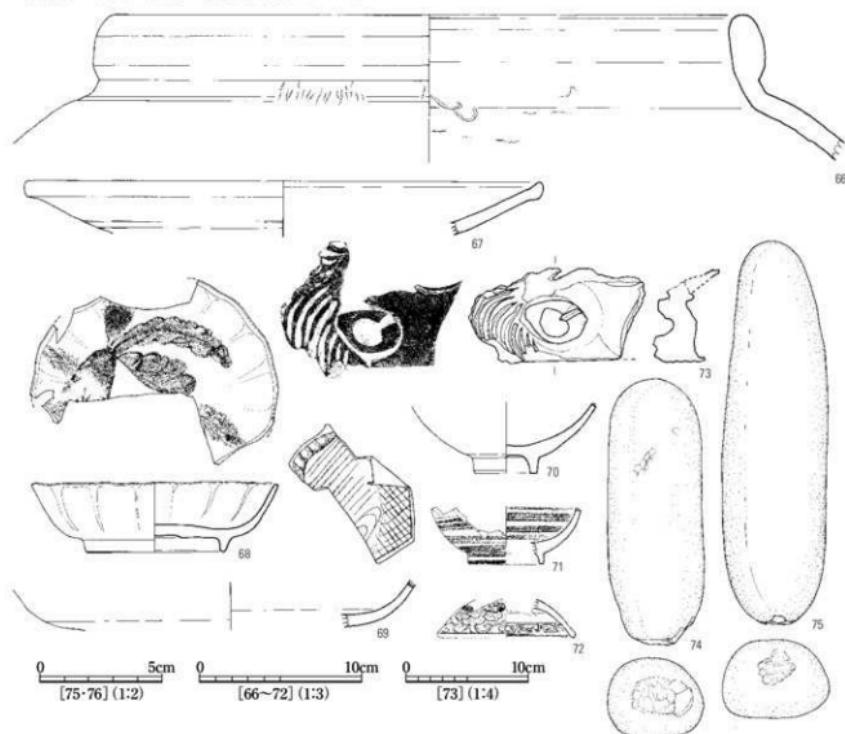
- ①黄灰色土 (Hue : 2.5Y4/1) : 硬質で、全体的に酸化変色が認められる。
- ②黄灰色土 (Hue : 2.5Y5/1) : 硬質で、全体的に酸化変色が認められ、小礫を含む。
- ③灰褐色土 (Hue : N6/1) : 粘性があり、酸化変色が認められ、小礫を含む。
- ④灰褐色土 (Hue : 2.5Y5/1) : 粘性があり、酸化変色が認められ、小礫を含む。
- ⑤灰褐色土 (Hue : 3Y5/1) : 硬質で、全体的に酸化変色が認められる。
- ⑥灰褐色土 (Hue : 7.5Y5/1) : 硬質で、全体的に酸化変色が認められ、小礫・炭化物・粘土ブロックを含む。
- ⑦灰褐色土 (Hue : 2.5Y6/1) : 硬質で、全体的に酸化変色が認められ、粘質土ブロックを含む。
- ⑧灰褐色土 (Hue : 7.5Y5/1) : 粘性があり、全体的に酸化変色が認められる。
- ⑨灰褐色土 (Hue : 5Y6/2) : 硬質で、酸化変色や小礫が含まれる。
- ⑩オリーブ灰褐色土 (Hue : 10Y6/2) : 粘性があり、褐色土ブロックが含まれる。

第35図 4号井戸跡検出状況図①(S=1/20)

【遺物：第37図-66～75】出土した遺物は、磁器4点・陶器4点・瓦1点・石器2点の計10点である。うち磁器の1点は破片であり、SF3出土の破片と接合する（第34図-64）。66は陶器で備前系の壺の口縁部である。15世紀頃に比定されるか。67は唐津産と考えられる大皿片である。釉調は濃い緑色であり、推定口径は31.4cmである。68は肥前系輪花皿片である。内面見込部に大根のような野菜の文様を施し、底部は蛇の目高台をもつ。18世紀後半以降と考えられる。69は肥前系皿片である。青磁調釉に格子文や水文を施す。18世紀後半頃の波佐見産の可能性がある。70・71は產地不明の陶器碗片である。70は貫入の多い浅黄色の釉を施し、71は褐灰色の胎土に白化粧土の刷毛目を施す。72は肥前系磁器蓋付鉢の蓋部である。外面に牡丹のような草木文、口縁部内面に雷文を施す。73は瓦片である。飾り瓦おそらく鬼瓦の一部であり、SF1出土瓦（第30図-63）と類似している。74・75は砂岩製敲石であり、下端部に敲打痕が認められる。



第36図 4号井戸跡検出状況図②(S=1/20)



第37図 4号井戸跡出土遺物(S=1/2・1/3・1/4)

(5) 池状遺構 (SZ1)：(第38図～第41図)

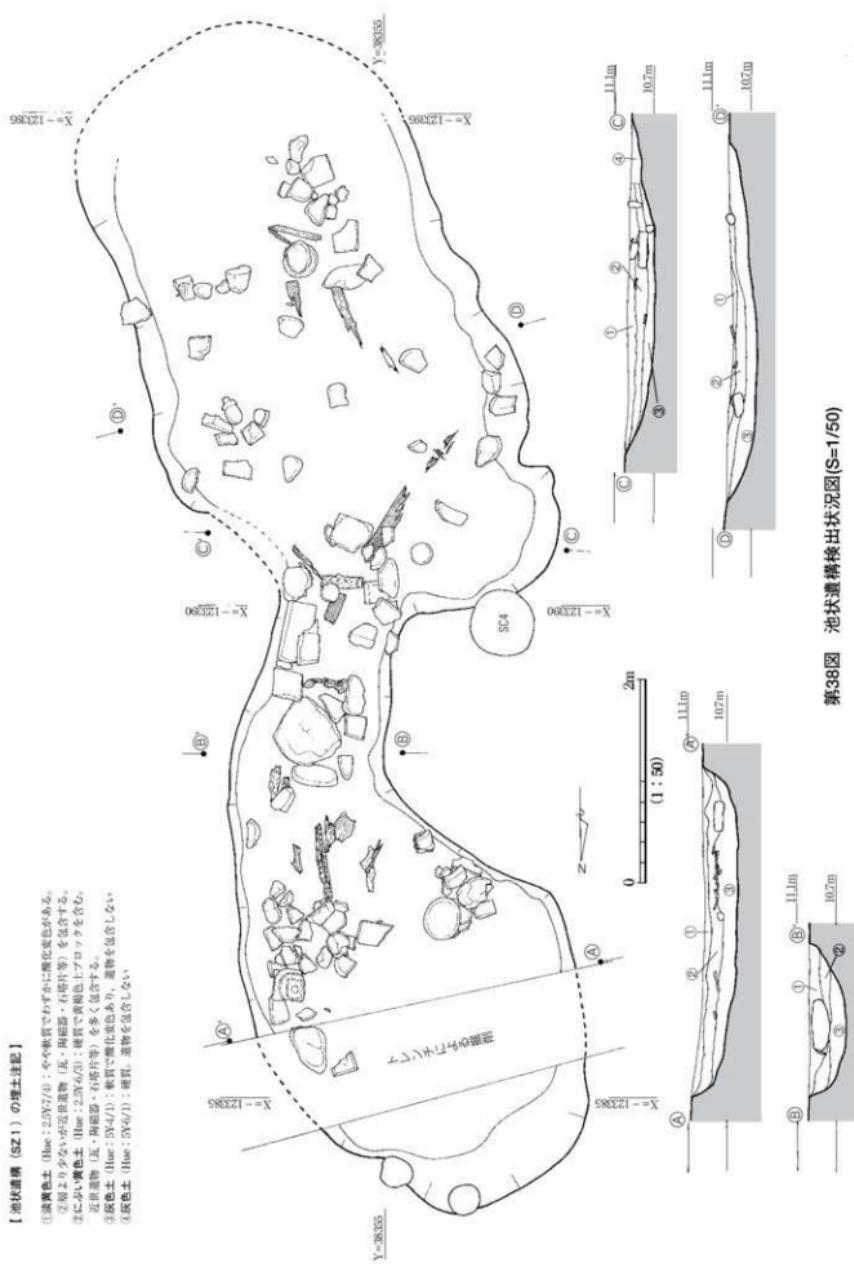
【遺構】池状遺構はC10・C11グリッドで検出された。平面瓢形で、一部消滅しているが全長12.3m・最大幅3.5m・最小幅1.25mである。検出深さは25～35cm、中心部に向かって緩やかに凹む。埋土は軟質で泥のようである。埋土は大きく3層に分かれしており、主に上層（第①層）下部から中層（第②層）にかけて遺物が多量に検出された。遺物は遺構全域に分布し、礫・石塔片・陶磁器・瓦・木製品など多用種にわたる。分布状況などから考えて、これらの遺物は廃棄されたものと推測される。遺構の時期については不明であるが、含まれる遺物が18～19世紀に帰属するものが多いことから、19世紀頃まで使用されていたと考えられる。遺構は埋土状況などから、湿润地または保水地と考え、他の遺構との関連などから「池」ではないかと推測した。しかし、断定する根拠を持ち得なかったので、珪藻分析などの自然化学分析を実施した（第IV章第3節）。珪藻分析の結果、多用種の珪藻が検出され、「水の流れ込みがあり水草が生育する水域から湿地、および湿润な陸域を伴う多用な環境が推定され、池状の水域およびその周辺の環境が示唆される。」との結論に至った（第IV章第3節：p148-135～36）。さらに細かく分析結果（第IV章第3節：図1）を見ると、底面（第Ⅲ層）には珪藻類が全く検出されず、埋土下部（第②層）と埋土上部（第①層）を比べた場合、下部には沼澤湿地着生の真・好流水性種、真・好止水水腫が多く、上部には陸生珪藻が多い結果が出ている。この上部と下部の堆積状況の変化は、この遺構が時期によって保水地から湿润地への変化を示唆するものである（第IV章第3節：p148-135～36）。これらのことと総合的に考えると、この遺構は、成立当初、池のような役割をもち、水を保有するものであったが、やがて水を保持せずに湿地となり、ゴミ捨て場のように多くの瓦・礫・石塔片・陶磁器・木製品などが廃棄されたと考えられる。

【遺物】：第39図～第41図-76～143, 587～588] 出土した遺物は、土師器1点・龍泉窯系青磁2点・白磁1点・磁器35点・陶器16点・瓦質土器2点・瓦14点・石器1点・木製品2点の計74点である。うち、土師器1点・龍泉窯系青磁2点・白磁1点は明らかに他の遺物と帰属年代が異なるので、遺構外出土遺物の項に掲載する（第86図-271、第88図-304・329、第89図-349）。

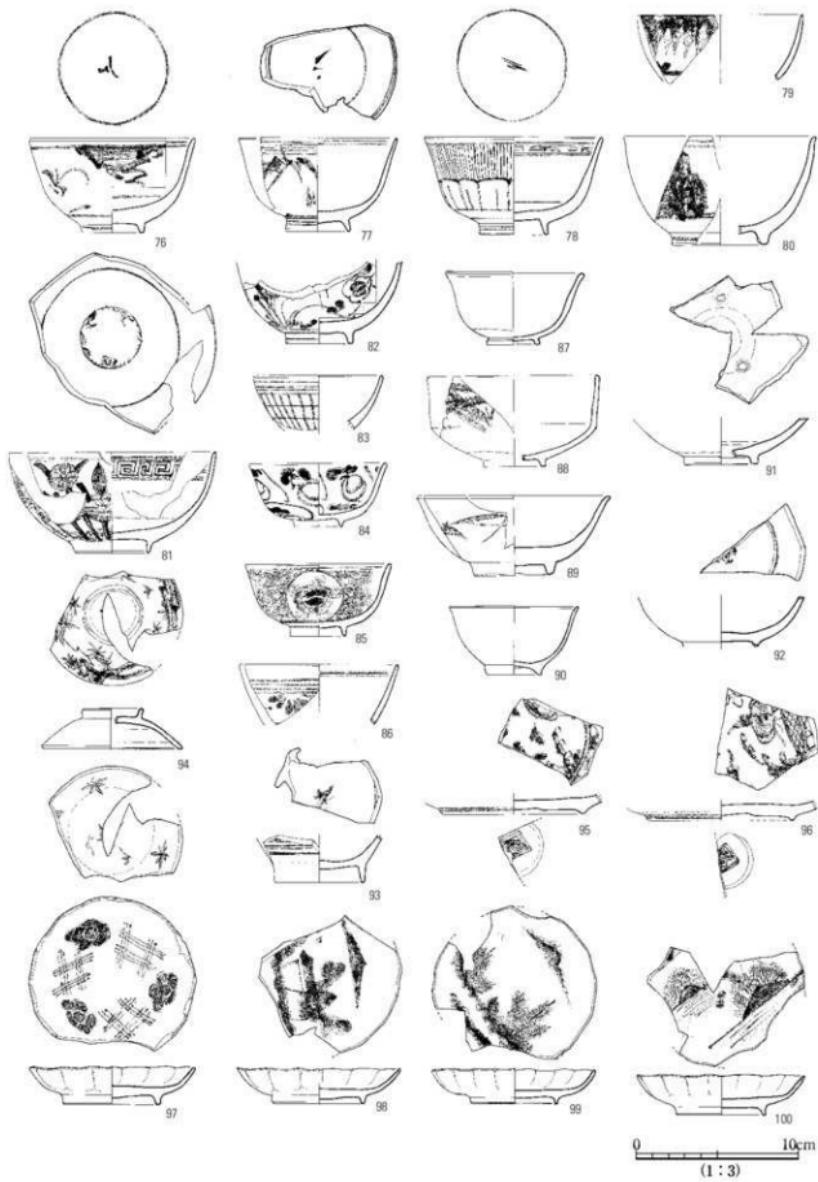
76～85・92は磁器の丸碗である。76～78は口縁部が内湾でなく、直線または端反気味に立ち上がるタイプの肥前系磁器碗である。78・81は口縁部内面に雷文帯をもつ。76～78・81は19世紀代に帰属すると考えられる。79は口縁部に口紅を施している。文様は上部雨降り文・下部は折枝らしき文様である。雨降り文は雨粒まで表現されているが、型紙押のようである。17世紀末～18世紀前半頃か。84は鮮やかなコバルト色の宝文の染付をもつ瀬戸・美濃系の磁器小碗である。19世紀前半頃と考えられる。85は小碗片で、主に赤色の色絵である。窓絵があり、1つは亀か花、もう1つは蝶か虫の文様が描かれている。86・93は広東系の口縁部と底部である。18世紀後半頃～19世紀初頭頃か。90は白磁調の端反碗で、器壁が2mm前後と薄い。清朝磁器の影響を受けた徳化窯の可能性がある。同じく薄手の口縁部片がSZ1から出土している。90と合わせると1個体より口縁部径が大きくなることと、接合しないことから同一規格の別個体である可能性がある。87・88・91は陶器碗片である。いずれも底部を断面角形に鋭く削っており、唐津産と考えられる。87は小丸碗である。88は丸碗で、腰部で大きく屈曲する器形をもつ。91は内面見込部に胎土目積み痕が残る。92は内面見込部に五弁花、外面青磁釉を施す青磁染付碗片である。18世紀後半頃の波佐見系の可能性がある。94は碗の蓋部と考えられる。内外面に染付と赤絵による紅葉文様が描かれる。95～103は磁器皿片である。95・96は蛇ノ目四形高台をもつ平底皿で、外面見込部中央に二重方形枠で囲まれた「福」が描かれている。18世紀代と考えられる。97～100は輪花皿で、口縁部に口紅を施す。19世紀代と考えられる。97～99は口径・底径・器高等法量が類似している。101・102は蛇ノ目四形高台をもつ輪花皿である。101は口唇部に口紅を施し口径が五寸近くある。102は無文の白磁調で、内面見込部にハマの痕跡が確認できる。103は蛇ノ目四形高台をもつ輪花皿であるが、外側面に唐草文を、内面は金魚と水草のような文様を、無釉の内面見込部に金魚の文様を施している。105は小皿で内外面に明黄褐色施釉、内面見込部に龍文らしき文様、底部にハリ支えと考えられる痕跡がある。琅平焼の可能性がある。113は紅皿である。外面に蜻唐草の型押しを施している。115は黒色釉のかかった仏花瓶である。19世紀代薩摩苗代川系と考えられる。116は德利壺である。SZ2出土の口縁部から頭部にかけての部分と類似しており、同一個体の可能性がある。118は陶器の火入れである。破損しているが前面に窓のように開いている部分が存在する。また、底部には「□□堂」（□は判読不能）との印刻が確認される。判読できないが、「濟味堂」

【池状遺構 (S2-1) の埋土注記】

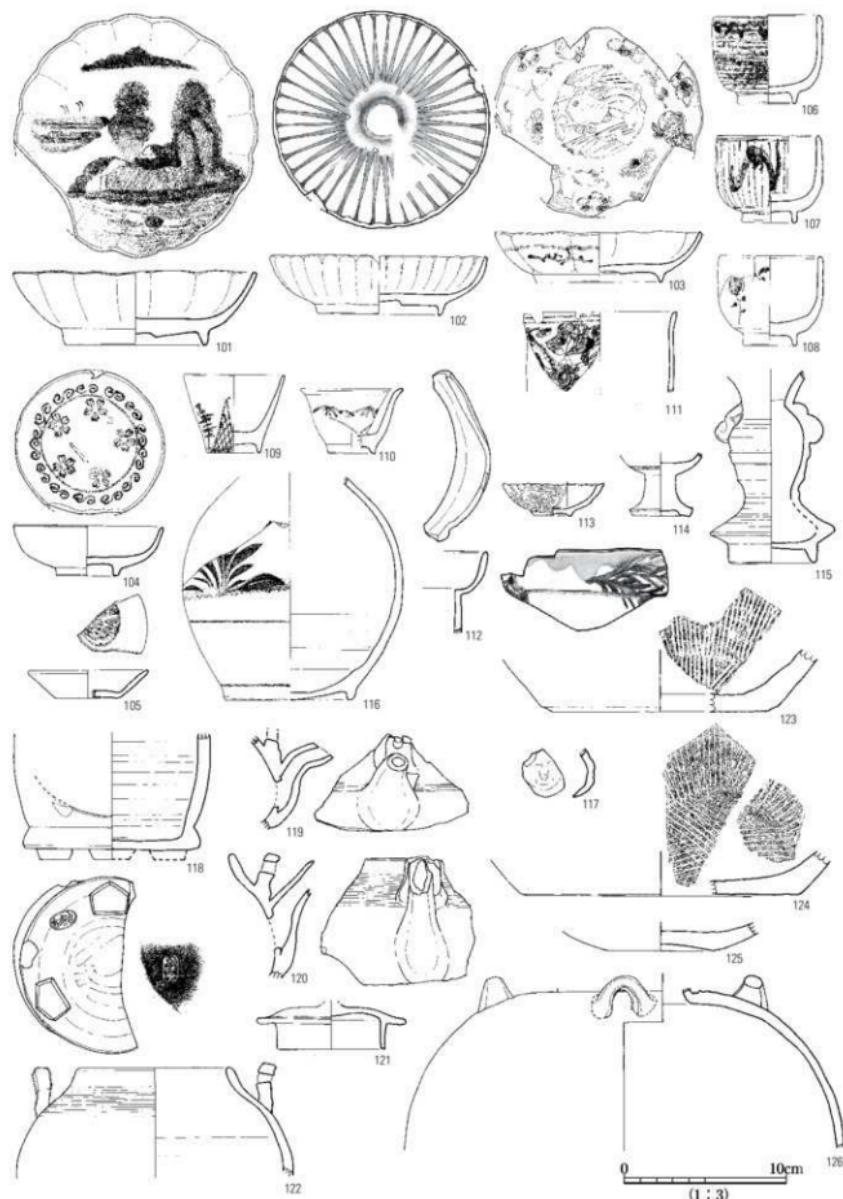
- (1) 淡黄色土 (Hue : 2.5Y7/4) : 砂質でわずかに酸化色がある。
- (2) 略より少ない近世遺物 (瓦・埴輪・石塔等) を含む。
- (3) に少く、褐色土 (Hue : 5Y6/3) : 壱貫と褐色のブロックを含む。
- (4) 近世遺物 (瓦・埴輪・石塔等) を多く含む。
- (5) 褐色土 (Hue : 5Y4/1) : 壱貫で酸化色あり、遺物を含しない。
- (6) 黄色土 (Hue : 5Y4/2) : 壱貫、遺物を含さない。



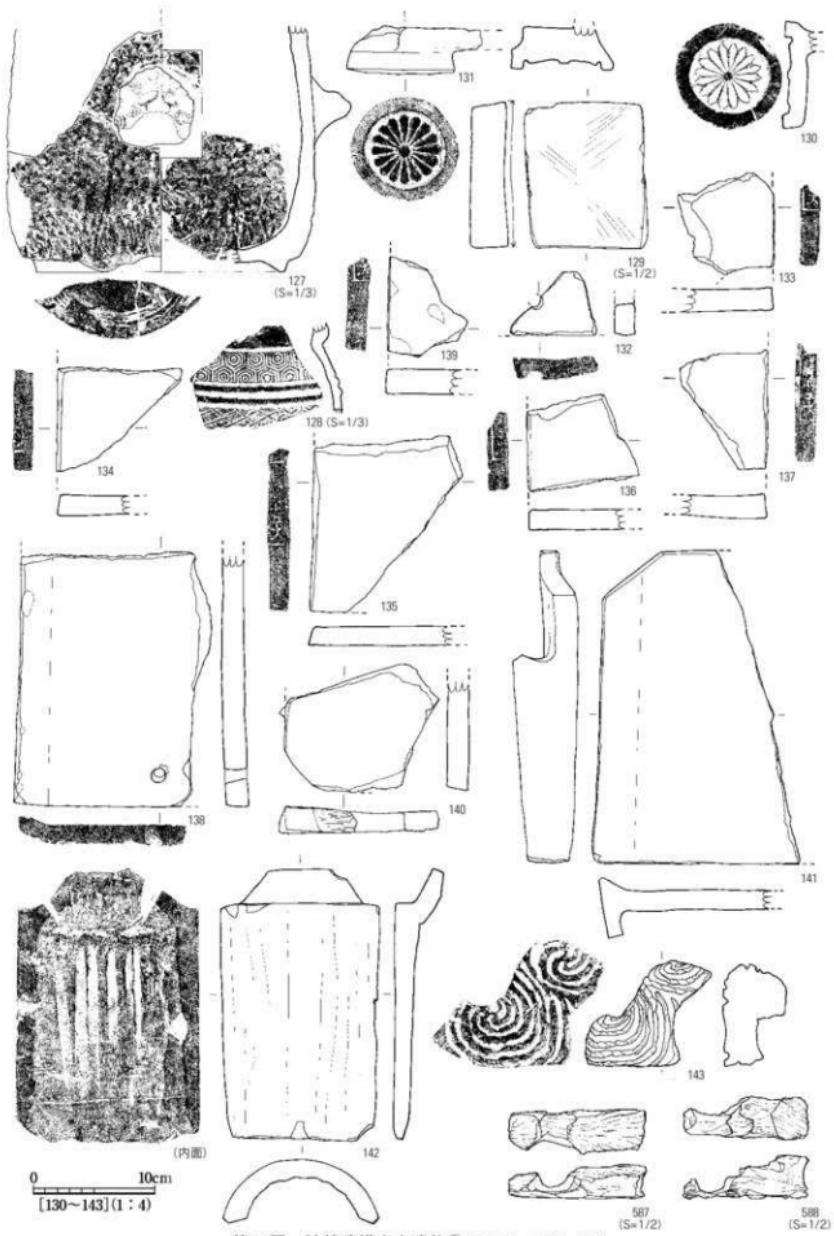
第38図 池状遺構検出状況図 (S=1/50)



第39図 池状遺構出土遺物① (S=1/3)



第40図 池状遺構出土遺物②(S=1/3)

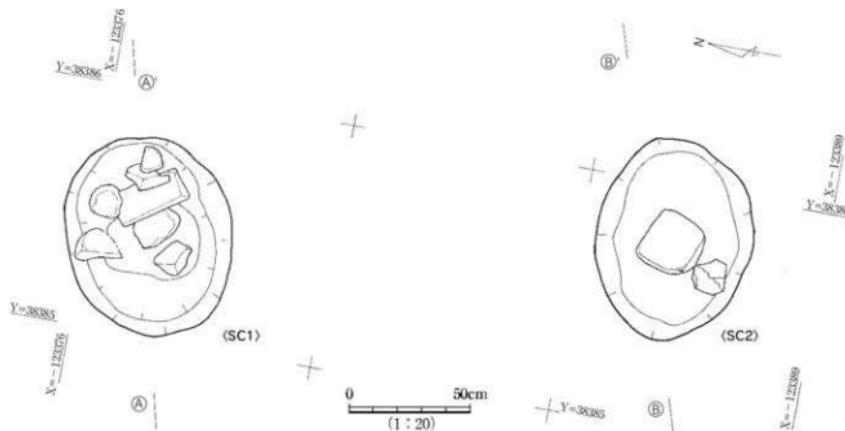


第41図 池状遺構出土遺物③(S=1/2・1/3・1/4)

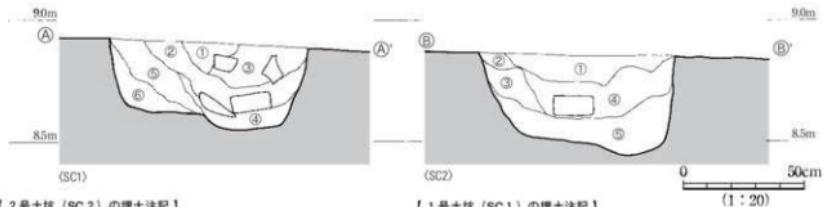
とも読めなくもない。119～122・125は土瓶片である。119・120は注口部付近、121は蓋、125は底部である。119～121・125は薩摩系と考えられる。123・124は擂鉢の底部付近である。産地は特定できない。126は掲輪の四耳壺である。産地は不明であるが、東南アジア系の可能性もある。127・128は瓦質土器である・127は表面が鮫皮のような凹凸をもつ鉢である。胴上半部に獅子頭らしき突起物が存在する。これと同一個体と考えられる口縁部片が包含層から出土している（第105図-527）。128は頸部から胴部にかけて膨らむ鉢であり、火鉢と考えられる。頸部付近には亀甲状の胴部付近には格子状の文様を施す。129は陶石製砥石であり、長さ5.9cm・幅4.8cm・厚さ1.2cmの板状であり、凹んだ表面に細かい擦痕が放射状に確認される。130～143は瓦である。130・131は軒瓦である。130は瓦当部のみであり、陰刻の菊花文を施す。131は陽刻の菊花文を施す。132～140は平瓦である。132～139には印刻が施している。132・138は同じ印刻であるが判別できない。133～137・139は「城ヶ崎小平次」またはその一部である。この遺跡からおよそ3km北東に「城ヶ崎町」があり、そこで瓦を生産していたと考えられる。また、132と138には釘穴が確認できる。140は平瓦であるが、圓面の左下部が直角でなく斜めに整形している。141は袖瓦である。142は丸瓦である。裏面全体には布目痕跡が確認され、その上から先丸状工具で縱方向に搔き取りを行っている。143は線刻で同心円を表現した飾瓦である。おそらく鬼瓦の一部分である。587・588は木製品である。性格については不明である。

(6) 土坑 (SC1～SC7)：(第42図～第45図)

土坑は全部で7基検出された。各土坑の性格については不明であるが、1号・2号のみ用途の想定ができる。
1号土坑 (SC1:旧6号) (第42図-左) と **2号土坑 (SC2:旧7号)** (第42図-右) はF9グリッド南部に位置する。SC1は長径81cm×短径67cmの平面楕円形である。深さは東側が約35cm、西側が約28cmと東側が深い。土坑中央部から東側にかけて15～30cmの扁平礫が7個散乱した形で検出された。しかし中でも大形の2個は水平に据えているようである。SC2は長径82cm×短径65cmの平面楕円形である。深さは東側がやや深く、東側が約41cm、浅い西側が約34cmである。土坑中央部に15～25cmの扁平礫が検出された。中でも大形の礫は水平に据えられているようである。SC1とSC2を比べた場合、規模や形状をはじめ、大形礫の据え方まで酷似する。さらに据えられた礫の高さは、双方標高8.7m程で等しい。土坑に据えられた礫は、柱などの礎石と考えられ、総合的に考えると、この2つの土坑は柱を据える2個1対の土坑と考えられる。2個1対で柱を据える構造物といえば門の可能性があり、この2つの土坑は門柱穴跡と考えられる。両土坑間は約220cmである。



第42図 1号・2号土坑検出状況図(S=1/20)



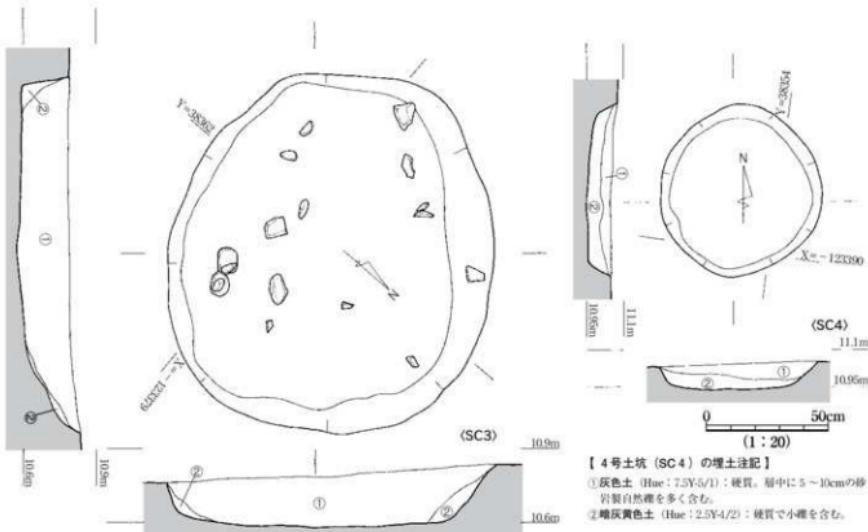
【2号土坑(SC2)の埋土注記】

- ①灰褐色土 (Hue: 2.5Y7/1) : 粘性があり橙色土粒をわずかに含む。全体が酸化変色している。
- ②黄褐色土 (Hue: 2.5Y5/1) : 土質は脆く、橙色土粒をわずかに含む。
- ③褐灰色土 (Hue: 10YR6/1) : 腐質で全体が酸化変色している。
- ④オリーブ灰褐色土 (Hue: 3Y5/2) : やや軟質で橙色土粒をわずかに含む。
- ⑤褐灰色土 (Hue: 10YR4/1) : 全体に橙色土粒を含む。
- ⑥褐褐色土 (Hue: 2.5Y3/1) : 粘性はあるが、土質は脆い。
- ⑦黄褐色土 (Hue: 2.5Y5/1) : ③層と類似するが、土粒の大きさが小さい。
- ⑧褐褐色土 (Hue: 10YR4/1) : やや軟質で含有物がない。

第43図 1号・2号土坑断面図(S=1/20)

3号土坑 (SC3:旧1号) (第44図-左) はD9グリッド南西部に位置する。長径145cm×短径133cmの平面椭円形で、深さ約20cmで底面が平坦な箱形の断面をもつ。土坑内に10cm前後の泥岩礫が10数個散乱していた。

4号土坑 (SC4:旧3号) (第44図-右) はC10グリッド南中央部に位置する。池状遺構 (SZ1) の縁辺部を切る形で検出された。直径約70cmの平面円形で、深さ約10cmで底面が平坦な箱形の断面をもつ。遺物などは出土しなかった。検出状態からSZ1より新しい時代、近世～近代の可能性がある。



【3号土坑(SC3)の埋土注記】

- ①暗灰褐色土 (Hue: 2.5Y4/2) : 軟質。炭化物・赤褐色粘質土・黄褐色土ブロックを含む。
- ②灰色土 (Hue: 5Y5/1) : 軟質。炭化物多し。

【4号土坑(SC4)の埋土注記】

- ①灰色土 (Hue: 2.5Y5/1) : 硬質。層中に5～10cmの砂岩質自然塊を多く含む。
- ②暗灰褐色土 (Hue: 2.5Y4/2) : 軟質で小塊を含む。

第44図 3号・4号土坑検出状況図(S=1/20)

5号土坑（SC 5：旧9号）（第45図）はE11グリッド北中央部に位置する。長径97cm×短径86cmの平面楕円形で、深さは140cm以上である。堆積状況から自然に埋没していたと考えられる。井戸跡の可能性もあるが、遺物や井戸枠などの構造物等は検出されなかった。

6号土坑（SC 6：旧無号）（第6図）はD11からE11グリッドにかけての中央部に位置する。一部試掘坑で削平され不明であるが、長径約470cm×短径約370cmの平面不定形で、深さは200cm以上である。検出面の東側付近に木製品が多く検出され、下部に井戸枠があると想定して掘り下げを行ったが、井戸枠は検出されなかった。井戸跡の可能性もあるが、断定できない。

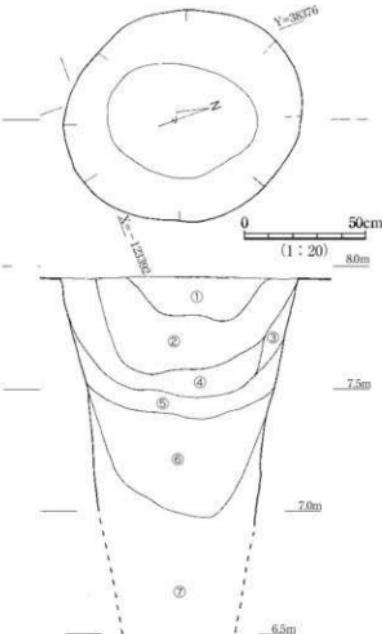
7号土坑（SC 7：旧無号）（第6図）はD11グリッド南東隅部に位置する。径260～280cmの平面円形で、深さは200cm以上である。遺構の性格は、井戸跡の可能性もあるが、遺物や井戸枠などの構造物等は検出されず、不明である。

（7）遺物集中区（SZ 2～SZ 8：第6図・第46図～第50図）

全部で7か所確認された。いずれも中世～近世の遺物を含むので、近世以降の遺構であるが、場合によっては耕作などで掘り出された遺物を近世～現代にひとまとめにした可能性もある。

【遺構】SZ 2～SZ 5（第6図・第46図）はF10グリッド中央部に位置する。これらは互いに近接し、4m四方の中に位置しているので、同じ遺構の可能性がある。SZ 2～SZ 5の平面形の大きさは、SZ 2が長径約120cmの不定形、SZ 3が径約65cmの円形、SZ 4が長径約150cm×短径約90cmの楕円形、SZ 5が長径約180cm×短径約100cmの不定楕円形である。

SZ 6（第6図）はF9グリッド北側中央部1号溝状遺構（SE 1）東側に位置する。最大長約350cm・最大幅約330cmの不定形で、深さはほとんど無く面上に遺物が密集する。中世の遺物も含まれるが、18世紀代の遺物が多く含まれることから18世紀以降に形成されたと考えられる。SZ 7（第6図）はF8グリッド南東部に位置する。14世紀頃に時期比定される3号溝状遺構（SE 3）の埋土の上、最大長約400cm・最大幅約100cmの帶状に遺物が密集する。出土遺物のいくつかが18世紀頃に時期比定されることから、SZ 7とSE 3には時期的な開きがある。SZ 8（第6図）はG8グリッド西辺部に位置する。長さ約730cm・幅約40～50cmの帶状に遺物が集中する。遺物は、中世の遺物も含まれるが、19世紀代の遺物が多く含まれることから19世紀以降に形成されたと考えられる。帶状になった遺構は1号溝状遺構（SE 1）と主軸をほぼ同じくしており、SE 1を含む掘立柱建物群などとの関連も考えられる。



【5号土坑（SC 5）の埋土注記】

- ①灰白色土（Hue : 5Y 7/2）：砂質で酸化による変色が認められる。
 - ②黃色土（Hue : 5Y 8/6）：軟質で酸化変色あり。
 - ③淡黃色土（Hue : 7.5Y 8/3）：粘性・酸化変色があり灰色粘質土ブロックを含む。
 - ④黃色土（Hue : 5Y 7/6）：粘性・酸化変色あり。
 - ⑤明オリーブ灰黄色土（Hue : 5GY 7/1）：粘性・小繊維を含む。
 - ⑥オリーブ灰黄色土（Hue : 5GY 4/1）：粘性が強い。
 - ⑦オリーブ灰黄色土（Hue : 10Y 6/2）：粘性が強い。
- 以下は重複で削削したが、周辺の層との区別がつかず不明。

第45図 5号土坑検出状況図(S=1/20)

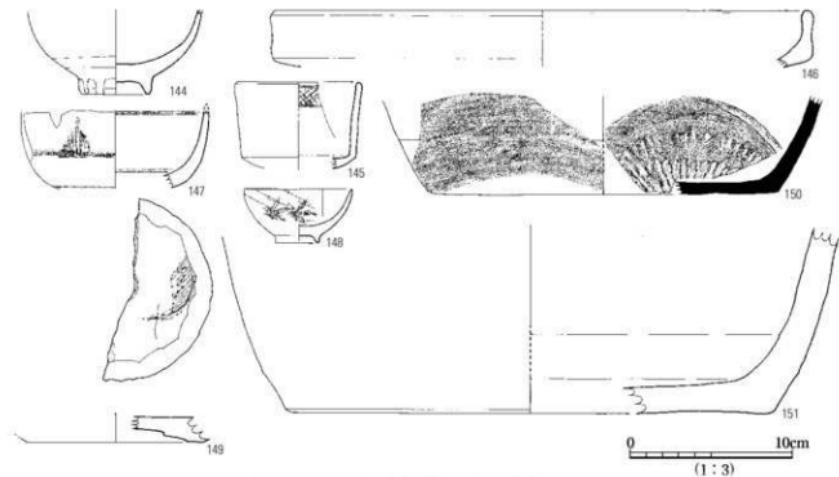
【遺物：第46図～第50図－144～179】遺物は時代特徴がわかるようなものを一部ピックアップして図化している。

SZ 2は144の1点である（第46図）。144は陶器の丸碗である。内側に灰オーリーブ色、外側に暗オーリーブ色の釉を掛け分けている。高台は露胎で、底部はやや兜巾底気味であり、17世紀前半の唐津内野山系と考えられる。

SZ 3は3点図化したが、うち1点は中世の青花染付皿であり別掲している（第90図－355）。ここでの掲載は、145～146の2点である（第46図）。145は青磁染付の筒形湯呑碗である。18世紀後半～19世紀初頭の頃か。146は土師質の焙烙である。产地が不明であり正確な事は不明であるが、関西系焙烙の編年などを参考にすれば、類似した形態は18世紀後半～19世紀前半頃に位置づけられていることが多い。146はSZ 3とSZ 4から出土した破片が接合した。

SZ 4は147～148の2点である（第46図）。147は肥前系磁器碗である。148は内面無釉で外面に紅葉と流水の文様を施した小杯である。いずれも18～19世紀頃と考えられる。

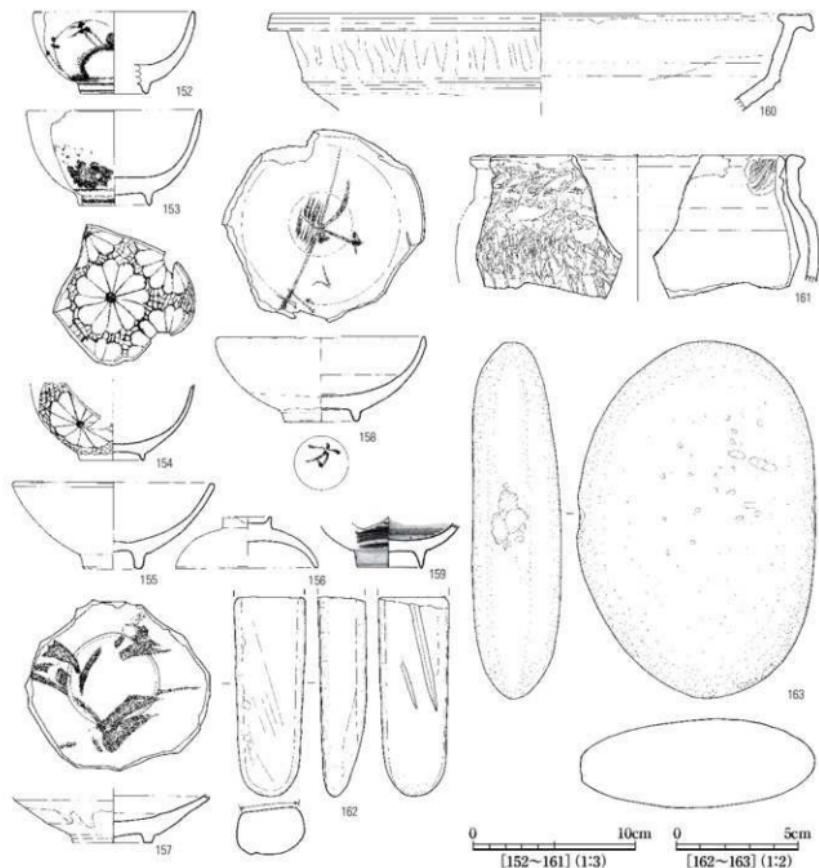
SZ 5は4点図化したが、うち1点は中世の土師器皿であり別掲している（第92図－373）。ここでの掲載は、149～151の3点である（第46図）。149は蛇目凹形高台の底部をもつ肥前系磁器皿である。18世紀～19世紀代と考えられる。150と151は甕の底部である。時期は不明であるが中世の可能性がある。胎土等から考えると、150は常滑、151は備前の可能性がある。



第46図 2～5号遺物集中区出土遺物(S=1/3)

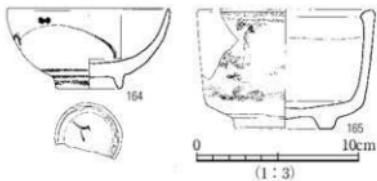
SZ 6は15点図化したが、うち3点は中世の陶磁器であり別掲している（第88図－310・338・第93図－383）。ここで掲載は、152～163の12点である（第47図）。152～154は18世紀代の肥前系磁器丸碗である。152・153は「くらわんか碗」の一種である。153はコンニャク印判による施文である。154は内外面に菊散らし文を施している。155は内外面がにぶい黄色釉の陶器碗である。貫入が多く、細かいひび割れが確認できる。底部は貫付部のみが露胎である。产地は不明である。156は蓋付碗蓋部であり、摘頂部以外内外面に無文白色釉を施している。時期・产地は不明である。157は唐津系陶器皿である。外面褐色釉を、内面見込部に鉄絵を施す。外面下半部は無釉で、底部は兜巾底であり、17世紀前半頃と考えられる。158は唐津産京焼風陶器碗である。見込部に水と水草の文様を描く。高台内に墨書きで「方」の字が書かれている。17世紀後半頃に時期比定される。159は陶器碗片である。内外面白土刷毛塗りを施しており、内面は渦巻き状である。产地・時期は不明である。160は唐津系陶器鉢である。白土刷毛塗りの上から銅緑釉をかけたいわゆる二彩唐津の系統である。17世紀代に時期比定できる。161は唐津系陶

器の水指である。横方向に白土刷毛塗りした後に、白土及び緑色釉を打ち刷毛目装飾を施している。17世紀後半～18世紀前半頃と考えられる。162・163は石器である。162は砂岩製砥石である。163は砂岩製敲石と考えられるが、扁平な楕円形の両側邊中央部のみが敲打痕らしき凹みが確認され、石錘の可能性がある。



第47図 6号遺物集中区出土遺物(S=1/3・1/2)

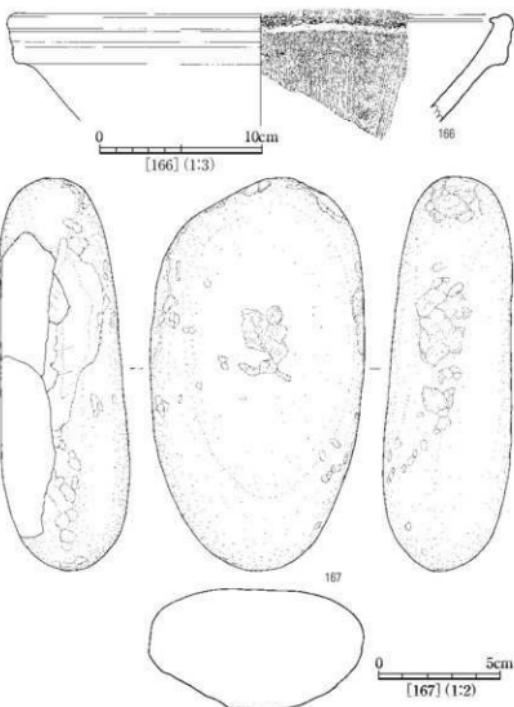
SZ 7 は164～167の4点である（第48図・第49図）。164は肥前系磁器丸碗、いわゆる「くらわんか碗」である。高台内に多量の砂粒が付着していること、置付部が無釉であることから、砂目積みで焼成された後に置付部を掻き取ったとも考えられる。



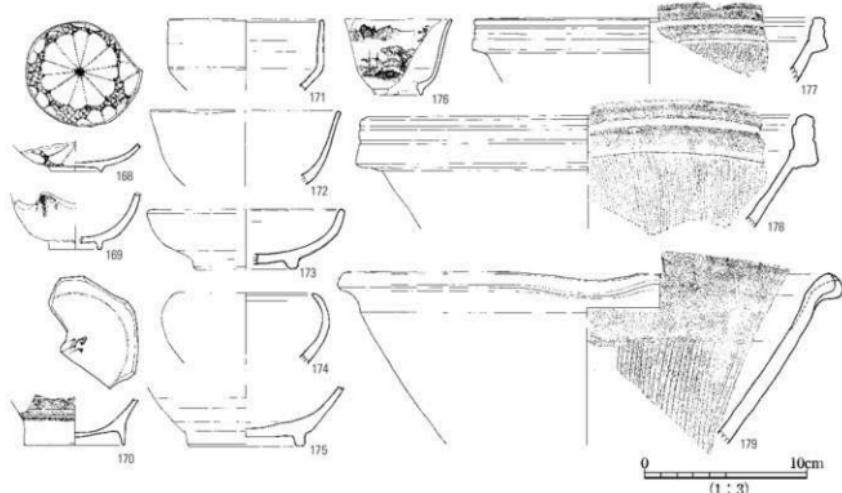
第48図 7号遺物集中区出土遺物①(S=1/3)

165は唐津系陶胎染付の火入れである。外面に透明釉をかけ、染付の草木文を施す。内面は口縁部付近まで施釉しており、口縁部以下は無釉である。底部は高台外側から露胎であり、兜底で疊付部は平坦に削り取られている。17世紀後半頃と考えられる。166は陶器の擂鉢である。口縁部に緑帯を有し、模描によって12条単位の擂目をもつ。产地は堺・明石系、時期は19世紀代と考えられる。167は砂岩製敲石である。両側辺中央部、上下端部、正面中央部に敲打痕が確認される。時期は不明である。

SZ 8は14点図化したが、うち2点は中世の陶磁器であり別掲している（第89図-341・第90図-356）。ここでの掲載は、168～179の12点である（第50図）。168は肥前系磁器の小丸碗であり、内外面に菊散らし文を施す。18世紀～19世紀頃か。169は唐津産京風焼陶器小丸碗と考えられる。この遺物には口縁部には無いが、同一または同型と考えられる破片は端反形であり、同じようなプロポーションが想定される。底部は露胎で、疊付部及び



第49図 7号遺物集中区出土遺物②(S=1/3 · 1/4)



第50図 8号遺物集中区出土遺物(S=1/3)

高台内は平坦に削り取られている。時期は17世紀後半頃か。170は肥前系磁器碗底部で広東碗形である。18世紀末葉～19世紀代と考えられる。171は陶器碗である。胴下部で大きく屈曲する形態で唐津産の可能性がある。172はわずかに外反する碗で、外面に青磁調の施釉がある。173は内外面に青磁が施釉している皿である。中国産青磁のようであるが、おそらく肥前産である。高台内が一面赤褐色であるが、鉄錆が塗布された可能性がある。肥前産とすれば17世紀頃か。174は器種が不明であるが、白磁調の合子か香炉の可能性がある。175は产地不明の陶器片である。外面に施釉しているが、内面は無釉である。碗か鉢と考えられるが、内面は黒色に変色していることから火入れの可能性もある。176は小壺である。薄手で外反する口縁部をもち、外面に山水風景文を施す。177～179は播鉢の口縁部である。177・178は口縁部内面に、177は不明瞭であるが、178には明瞭な1条の縁帯を有することから19世紀代の堺・明石産と考えられる。179も播鉢であるが、内外面施釉され、播目の上端を丁寧になで描えている。18世紀後半頃の唐津産の可能性がある。

(8) 柱穴痕跡 (SH1:第6図)

A区からは、掘立柱建物跡の柱穴を含む多くの柱穴痕跡が確認された。本遺跡の柱穴埋土は粘性が強く、柱穴から木質残存が多く確認された。中でもSH1は、D11グリッド東側、1号掘立柱建物跡 (SB 1) 西側で確認され、長径約140cm・短径約40cmの平面長楕円形の土坑中央部に径約30cmの円柱形木片が確認された。木片は樹種同定の結果、ブナ科シイ属と同定され、スダジイかツブラジイと推定できる（同定結果は第IV章第5節：p158）。SH1と対になるような遺構は確認されず、用途不明である。遺物は木製品以外確認されなかった。

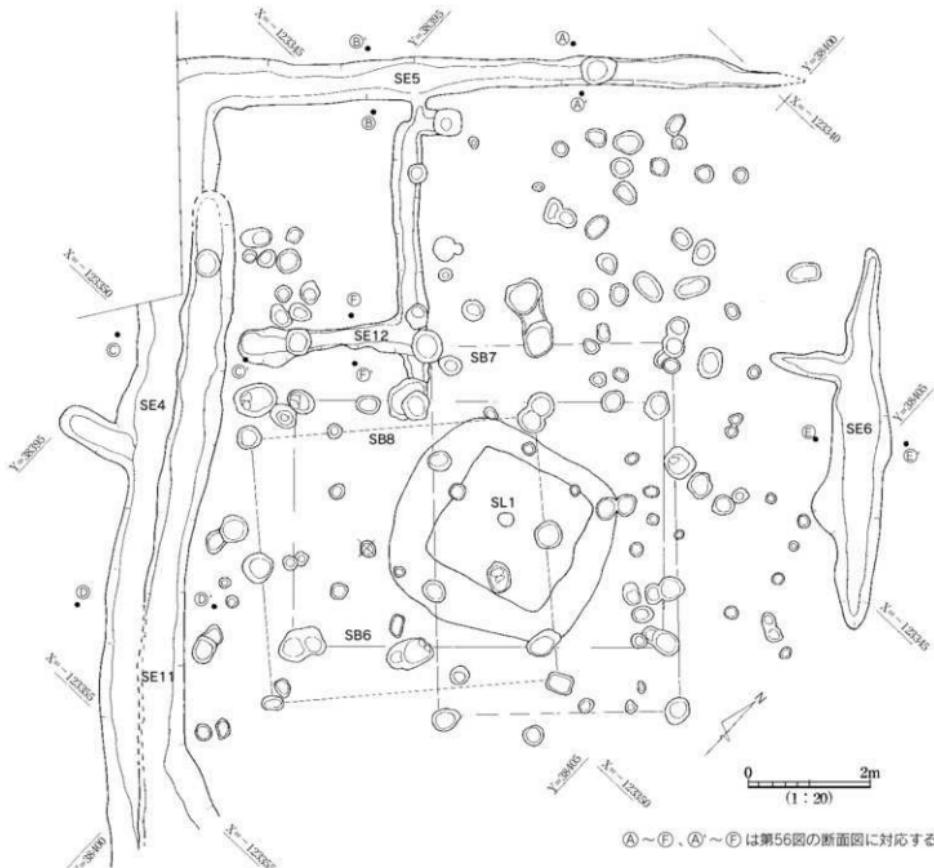
3. A区のまとめ

A区の遺構としては、掘立柱建物跡5棟 (SB 1～5)、掘立柱建物跡に伴うと考えられる柵列3か所（柵列A～C）と石列（石列A～E）、井戸跡6基 (SF 1～6)、溝状遺構7条 (SE 1～3, 7～10)、門跡と考えられる配石土坑2基 (SC 1～2)、池状遺構 (SZ 1)、遺物集中区7か所 (SZ 2～8)、土坑5基 (SC 3～7)、ビット多数 (SH 1ほか) が検出された。遺物は、主に包含層中から、縄文時代と考えられる石器、弥生土器片、古墳時代～古代の須恵器、古代の土師器（布痕土器を含む）、中世の陶磁器、近世の陶磁器・瓦・木製品・石塔片など、多岐にわたる時代に属するものが出土した（包含層及び遺構以外の遺物については「第6節 遺構外出土の遺物」に記述）。そのうち、井戸跡2基 (SF 5～6)、溝状遺構1条 (SE 3) は、構造や共伴遺物の関係などにより、中世後半（およそ14～15世紀頃）に比定されるが、多くは近世に比定されると考えられる。

特に、区中央部付近の一群、掘立柱建物跡4棟 (SB 1～4)、柵列A～C、石列A～E、溝状遺構4条 (SE 1, 8～10)、井戸跡4基 (SF 1～4)、門跡と考えられる配石土坑2基 (SC 1～2)、池状遺構1基 (SZ 1) などは、近世後半頃計画的に寺院や寺院関連施設等の建物群として計画的に配された可能性がある。ただし、これらは一度に構築されたのではなく、改築や修築を繰り返した結果と考えられる。例えば、石列Bの土層断面において、西列の基底面と東列の基底面は高さが異なる上、西列が一度埋もれたところに新たに東列を築いているようである（第25図右上）。また、建物群の継続期間であるが、廃絶期についてはある程度の推測ができる。廃絶期は、SF 1の構築時代が井戸枠に書かれた墨書等から江戸時代末期から明治時代初頭の19世紀後半と推定できること(p33)、出土遺物が20世紀代のものは殆どなく下限が19世紀代のものであること、SZ 1の埋土中から19世紀代の遺物が出土していること、などから19世紀代、遅くとも20世紀の初頭頃と考えられる。また、開始期は、明確には不明であるが、遺物が17世紀代から増加する傾向にあるので、17世紀代の可能性がある。ただし、開始期の構造物がそのまま継続していたわけではなく、おそらく複数回の建て替えがあったと推測される。SB 1～4が検出された付近で多数のビット群が検出されたことや、廃絶された時期の少し前に井戸跡 (SF 1) が築かれたことなどがそうした建て替えを示すのではないかと考えられる。

第4節 B区の調査（第51図～第57図）

B区は調査区の北側に位置する。南東方向に約80cm緩やかに下るが、起伏は少なく平坦な地形である。調査前は水田や畑地であったため、第Ⅱ層～第Ⅳ層の大部分が削平により失われていた。そこで、調査は第Ⅳ面上面の検出作業から着手した。調査の結果、古代の周溝状遺構1基、中世～近世の掘立柱建物跡3棟・溝状遺構4条・ピット多数、近世の溝状遺構1条、それに伴う土師器・陶磁器などの遺物が検出された。



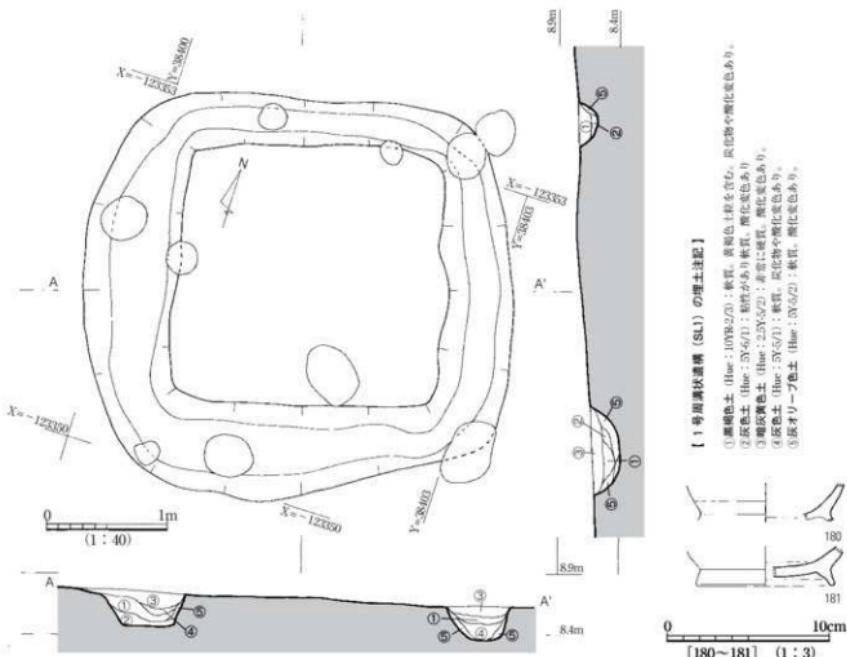
第51図 B区遺構検出状況図(S=1/80)

1. 古代の遺構と遺物

(1) 周溝状遺構 (SL1) (第52図)

【遺構】H 6 グリッド南西隅部第V層で検出された。一边約3.5mの隅丸方形を呈し、幅約35~75cm（平均約55cm）・深さ15~30cmの周溝がめぐる。主軸はN·13°·Wであり、傾斜から約45°振れた状態である。周溝底部付近の堆積物を採取し、フローテーション作業によって洗浄したところ、イネなどが検出された。状況から考えて、周溝に直接伴うものかどうか不明であるが、当時の植生を探ることのできる一つの資料となった。詳しくは第IV章第7節「フローテーション」に記している（p166~168）。遺構は中世～近世の掘立柱建物跡（SB 6~8）やピットに切られており、これらより古い時代であることは確実である。出土した遺物から考えて、9世紀後半～10世紀前半頃と推測できる。

【遺物（第52図-180~181）】周溝部から土師器片が全部で5点出土した。風化著しく細片のため、図化したのは2点（第52図-180~181）である。2点ともに土師器の碗の底部片で、高台をもつ。180は風化しているが、内黒の黒色土器であり、わずかに内湾気味の高台をもち、高台内面をナデで丁寧に仕上げている。181は小形で外反する高台をもつタイプである。



第52図 1号周溝状遺構検出状況図 (S=1/40) 及び出土遺物(S=1/3)

2. 中世～近世の遺構と遺物

(1) 堀立柱建物跡 (SB 6～SB 8 : 第53図～第55図・第4表)

B区では3棟の堀立柱建物跡が検出された。3棟はいずれも重複しており、同時期に存在していたとは考えられないが、主軸が平行もししくは直角に等しいことから、比較的近接する時期の建て直しである可能性がある。また、これら3棟は後述するが、いずれも4～6号溝状遺構(SE 4～6)の区画内に存在する。

6号堀立柱建物跡 (SB 6 : 第53図)は傾斜に対して棟方向が平行する。規模は、梁行1間(390cm)×桁行3間(600cm)で、13尺×20尺の規格である。建物跡の主軸が区画溝と切り合うことなく平行または直行することから、区画溝と同時に建てられた可能性がある。

7号堀立柱建物跡 (SB 7 : 第54図)は傾斜に対して棟方向が直行する。規模は、梁行1間(395cm)×



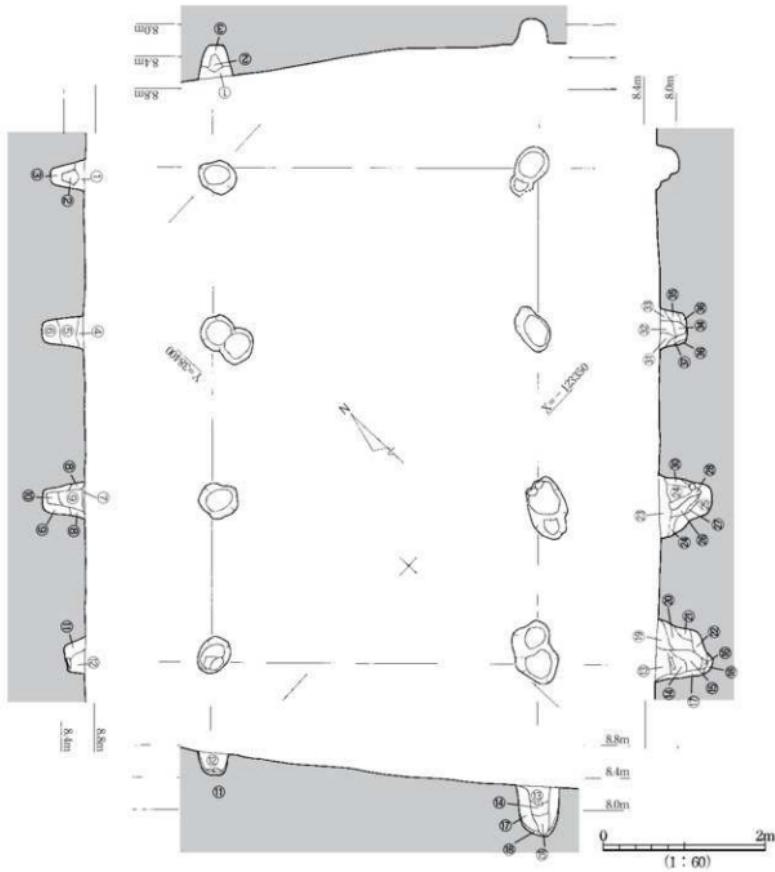
B区 検出状況

桁行3間(600cm)で、SB 6同様13尺×20尺の規格である。建物跡の主軸が区画溝と平行または直行するが、構成する柱穴がSE12を掘削していることから、区画溝より少し後に建てられた可能性がある。

8号堀立柱建物跡 (SB 8 : 第55図)は、身舎形が方形に近く、梁行に対して桁行が30cm程長い平面形態である。規模は、梁行1間(465cm)×桁行2間(435cm)で、およそ15尺半×14尺半の規格である。主軸は区画溝の主軸とわずかに異なることや、構成する柱穴がSB 6の柱穴を掘削していることから、区画溝やSB 6などより新しい時代に建てられた可能性がある。

遺構名	梁行×桁行	規模(cm)	身舎面積	梁間(cm)	桁行(cm)	主軸	柱穴径(cm)	備考
SB 6	1間×3間	390×600	23.4m ²	390～400	195～210	N-47° -E	40～53	
SB 7	1間×3間	395×605	23.9m ²	390～400	190～210	N-43° -W	39～52	SE12を掘削。
SB 8	1間×2間	465×435	20.2m ²	465～470	195～240	N-42° -E	34～50	SE 6の柱穴を掘削。

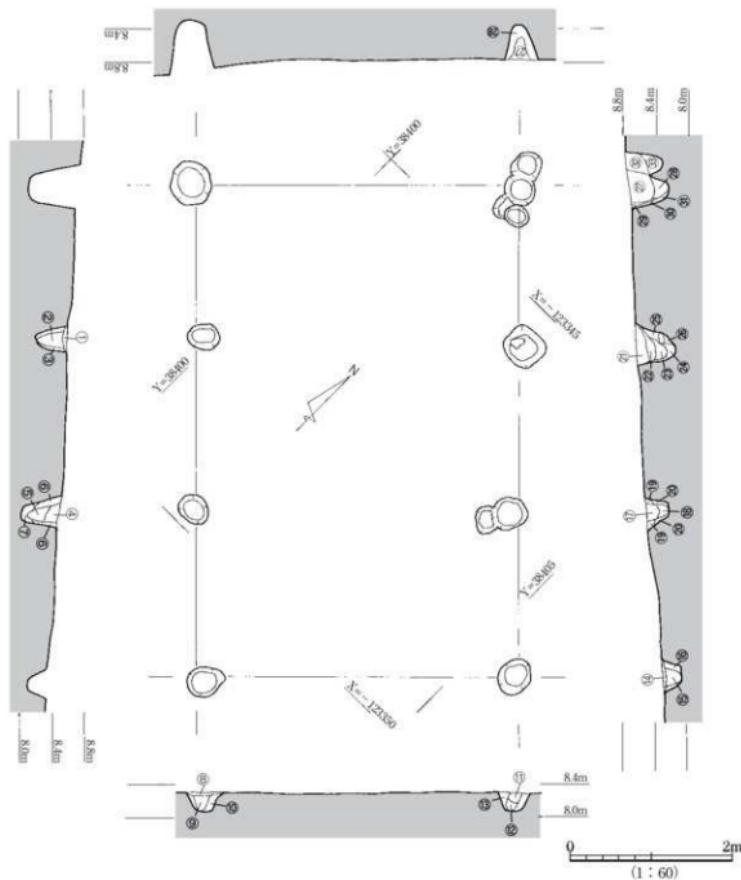
第4表 B区検出堀立柱建物跡一覧表



[SB6] 柱穴の埋土注記

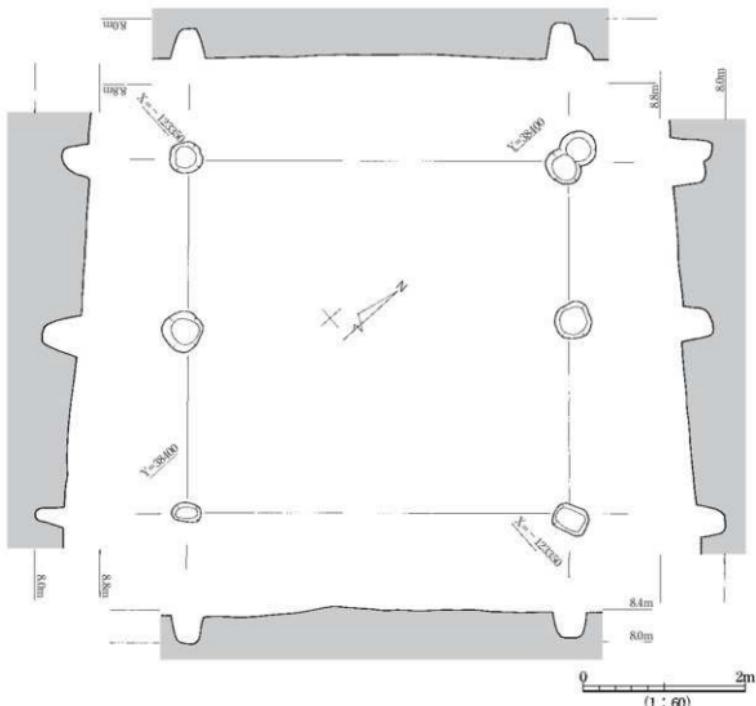
○灰色土 (Hue : 5Y5/1) : 理土A類/②灰色土 (Hue : 5Y5/1) : 理土B類/③灰白色土 (Hue : N7) : 理土D類/④灰黃色土 (Hue : 2.5Y7/2) : 理土A類/⑤灰土 (Hue : 5Y3/1) : 理土B類/⑥灰土 (Hue : 5Y5/1) : 理土D類/⑦灰黃色土 (Hue : 2.5Y7/2) : 理土A類/⑧灰白色土 (Hue : 2.5Y7/1) : 理土C類/⑨灰黃色土 (Hue : 5Y5/1) : 理土D類/⑩灰土 (Hue : 5Y5/1) : 理土B類。⑩層との境界に著しい酸化変色が見られる。⑪灰白色土 (Hue : 7.5Y7/1) : 理土C類/⑫灰土 (Hue : 7.5Y4/1) : 理土B類/⑬灰土 (Hue : 7.5Y4/1) : 理土B類。炭化物・褐色土ブロック混入。⑭オリーブ黒色土 (Hue : 5Y3/1) : 理土B類/⑮灰オリーブ色土 (Hue : 5Y5/2) : 理土B類/⑯オリーブ黒色土 (Hue : 5Y3/2) : 理土D類/⑰黄灰黑色土 (Hue : 2.5Y4/1) : 理土C類/⑲灰土 (Hue : 5Y4/1) : 理土D類。酸化による橙色への変色が認められる。⑳灰白色土 (Hue : N7) : 理土D類。黄褐色ブロック、一部酸化による橙色への変色が認められる。㉑灰黑色土 (Hue : 7.5Y6/1) : 理土B類/㉒淡黄色土 (Hue : 5Y8/3) : 混植以外の理土/㉓淡灰色土 (Hue : 10YR4/1) : 理土B類/㉔灰土 (Hue : 5Y5/1) : 理土A類/㉕灰白色土 (Hue : N7) : 理土D類/㉖灰土 (Hue : 7.5Y4/1) : 理土B類/㉗灰白色土 (Hue : N5/1) : 理土C類。炭化物を含む。㉘灰土 (Hue : 7.5Y4/1) : 理土B類/㉙灰土 (Hue : N5/1) : 理土C類。炭化物を含む。㉚灰土 (Hue : 5Y5/1) : 理土C類。黄褐色土ブロックを含む。㉛と同じ性質土。㉜灰白色土 (Hue : 5Y5/1) : 理土B類。淡黄色土ブロック・炭化物を含む。㉝灰白色土 (Hue : 5Y5/1) : 理土C類。黄褐色土ブロックを含む。㉞と同じ性質土。㉟灰白色土 (Hue : 5Y5/1) : 理土D類。酸化による橙色への変色が認められる。㉟灰黃色土 (Hue : 2.5Y5/2) : 理土D類/㉟灰土 (Hue : N4/1) : 理土D類。酸化による橙色への変色が認められる。㉟灰黃色土 (Hue : 2.5Y6/1) : 理土C類。

第53図 6号掘立柱建物跡(S=1/60)



【SB7 柱穴の埋土注記】

第54図 7号掘立柱建物跡(S=1/60)



第55図 8号掘立柱建物跡(S=1/60)

(2) 溝状遺構 (SE 4～SE 6・SE11～SE12：第51図・第56図・第5表)

溝状遺構はB区で5条検出された。

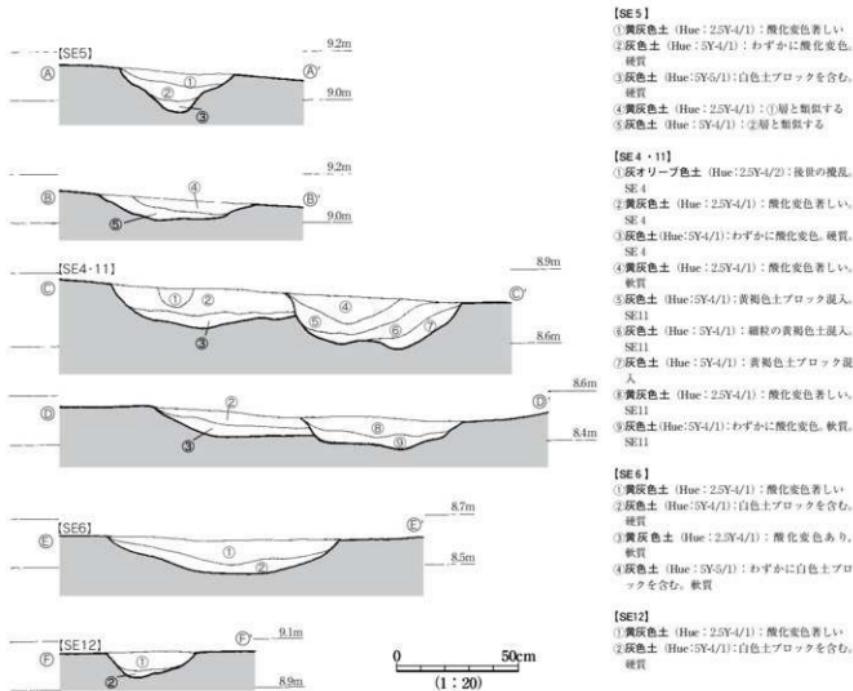
4号～6号溝状遺構 (SE 4～6) は、6号～8号掘立柱建物跡 (SB 6～SB 8) を囲うように配置されている。掘立柱建物跡と溝状遺構は軸をほぼ同じくすることから、同時期に設計された区画溝と考えられる。SE 4とSE 6は平行しており、遺構間は約10mである。SE 5はSE 4・SE 6と直交するように位置する。SE 4とSE 5は繋がっており、SE 5とSE 6は、検出面の問題で上部が削平された可能性もあるが、繋がっていない。SE 4～SE 6で囲まれた区画は、南東側が調査区外であるが、検出面積10m×12mで120m²以上ある。

11号溝状遺構 (SE11) はSE 4と重なるように位置する。SE 4を掘削しているので、SE 4より新しい時期と考えられるが、主軸や規模から考えると時期にそれほど開きはないようと思われる。遺物は近世の陶磁器が出土（第57図-188～189）し、近世に時期比定される。

12号溝状遺構 (SE12) はSE 5とSE 4を結ぶように逆L字状に伸びた溝状遺構である。SE 4・5・12で2.7m×3.6mの長方形で囲まれた区画を形成する。SE 4～6と同じ軸であることから、区画内の小区画としての役割が考えられる。SB 7の柱穴が重なり、SB 7より古い時期であることがわかる。

遺構名	検出長(cm)	検出幅(cm)	検出深(cm)	方位	備考
SE 4	1,300	65以上	10~16	N-40° -W	中世~近世の遺物が出土。
SE 5	1,000	25~80	10~17	N-44° -E	
SE 6	620	30~90	14	N-41° -W	
SE11	650(350+300)	35~50	10	N-42° -W N-42° -E	遺L字状。SB7の注穴との重複(SB7より新しい時期)
SE12	1,080	50~70	13~20	N-38° -W	SE8より新しい時期。近世の遺物が出土

第5表 B区溝状遺構表

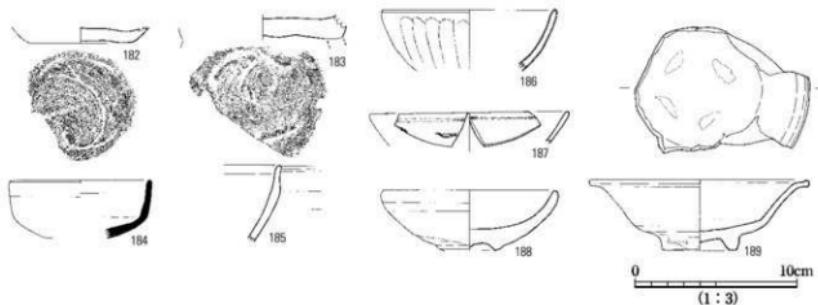


第56図 4~6号・11~12号溝状遺構断面図(S=1/20)

【遺物】 SE 4 と SE12から遺物が出土した。

SE 4 からは土師器皿の破片が 2 点出土した (第57図-182~183)。2 点とも口縁部付近が欠損しているが、回転系切りによる底部切り離しを行っている。中世の遺物である。

SE12からは13点が出土し、そのうち 6 点の図化を行った (第57図-184~189)。184は須恵器の壺身である。口径8.4cmと小形で器壁は薄い。7世紀代頃と考えられる。185は瀬戸・美濃系の天目茶碗の口縁部付近である。14世紀頃と考えられる。186は龍泉窯系青磁碗である。外面に細線状の連弁文があることから15世紀後半以降頃と考えられる。187は青花染付碗の口縁部である。口縁部内外面に界線をもち、外面には葉のような文様が確認できる。15~16世紀頃と考えられる。188・189は唐津系陶器であり、内外面に灰色釉を施している。188は皿であり、高台内兜山底をもつ。189は碗であり、見込部に 4 個の砂目跡が確認できる。17世紀前半頃の内野山窯系か。



第57図 4号・12号溝状遺構出土遺物(S=1/3)

B区のまとめ

B区からは、古代の周溝状遺構1基、中世～近世の掘立柱建物跡3棟・溝状遺構4条・ピット多数、近世の溝状遺構1条、それに伴う土師器・陶磁器などの遺物が検出された。

古代に属するのは周溝状遺構1基(SL1)のみで、他に遺構や遺物が集中する場所が確認されなかったことから、単独で存在していたと考えられる。ただ、同じ時期の遺物がA区中央部付近で比較的集中して出土している(後出包含層出土遺物の項で記載)ことから、このA区の遺物集中区と関連することも想定される。

溝状遺構に囲まれた掘立柱建物跡は、ほぼ同一場所に3回の建て直しがあったと推測される。溝状遺構と掘立柱建物群がセット関係にあるかは直接説明する証拠はないが、検出位置から判断して可能性は高いと考えられる。同一遺構群と考えた上で、これらの遺構群の時期を推測してみる。一番古い時期は、出土遺物が細片であり正確な時期特定できないが、4号溝状遺構(SE4)出土の回転系切り離しによる土師器をもつ時期で、中世後半～近世初期段階になると推測できる。また、新しい時期は11号溝状遺構(SE11)出土遺物の下限の17世紀前半頃と推定できる。このことは、18～19世紀の遺物が多いA区やC区と異なり、B区で18～19世紀代の包含層出土遺物が少ないことも裏付けの一つとなる。

第5節 C区の調査(第58図～第83図)

C区は、調査区の南西隅部に位置し、石列に区画された遺構群外側の一段高い場所に存在する。本来、後背部の緩斜面であった場所を掘削し、水平に近い状態に造成したものと考えられる。この区は、昭和期まで使用されていた御堂跡1軒と石塔群2か所から構成される。

1. 御堂跡(第58図)

周辺住民の話によれば、御堂は昭和58年不審火によって焼失するまで「曾井地蔵」の地蔵堂として存在していたという。調査前には御堂が倒壊した形で存在していた。昭和17年の『日向ノ金石文』によれば、「地蔵堂跡」と記載されていることから、昭和17年以降に建てられた御堂であると考えられる。御堂を撤去した後に1×2間の柱束痕跡(6個のうち4個がコンクリート製、2個が石)が確認された。



第58図 C区遺構検出状況図(S=1/250)

2. 石塔群（A・B）（第58図・第59図）

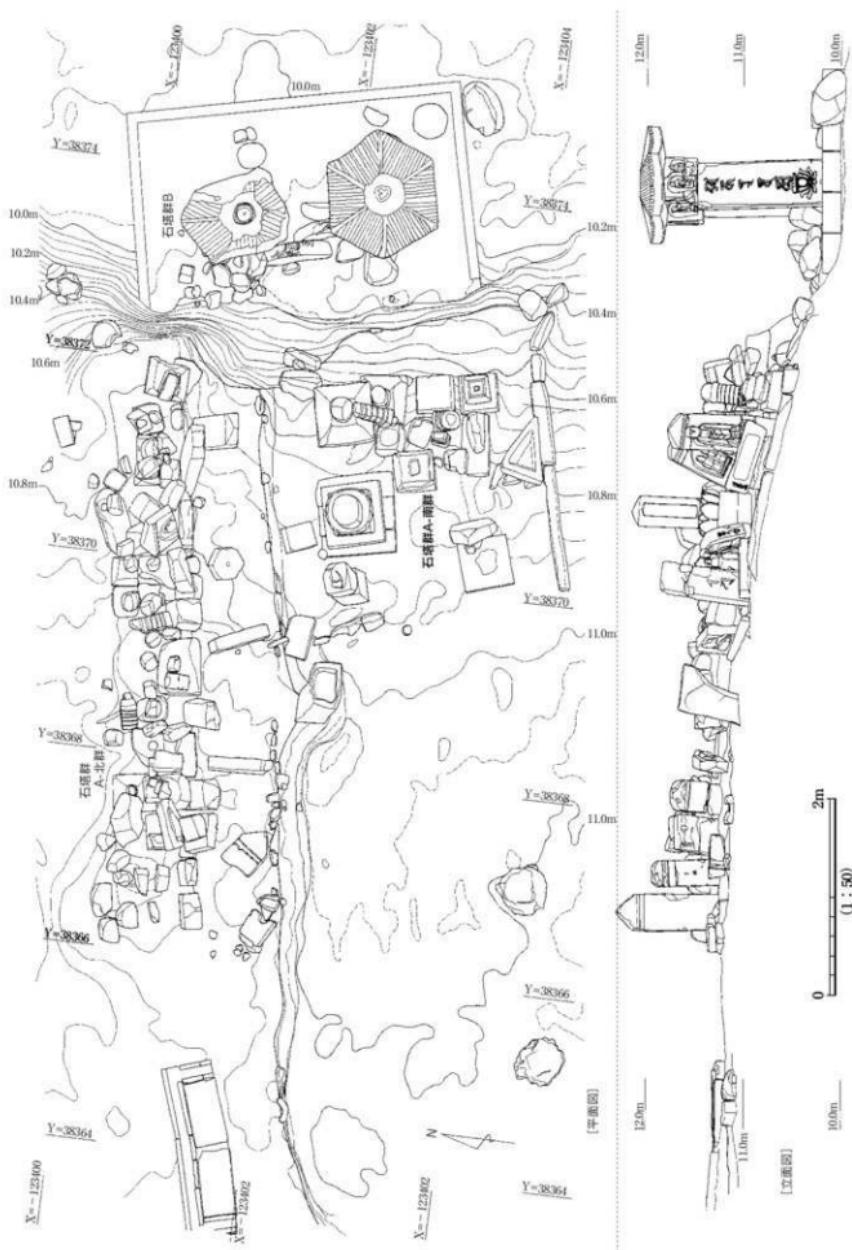
石塔群は、調査区画内の1群〈石塔群A〉と六地蔵輪を含む調査区画外の1群〈石塔群B〉に分けられる。

石塔群Aは、御堂跡の主軸と列軸を並行させており、小段差を境界として直線的に並べた北側〈A-北群〉と方形形状に集めた南側〈A-南群〉に細分される。石塔群Aで検出された石塔片は合計78点（うち国化したものは58点）である。内訳は無縫塔1・経碑1・手水鉢3・六地蔵輪片1・地蔵尊片1・画像板碑片10（7個体分）・板碑4・宝塔片44（宝篋印塔笠部1・相輪9・五輪塔空風輪10・相輪もしくは五輪塔空風輪1・五輪塔火輪13・五輪塔水輪3・塔身部4・五輪塔地輪3）・不明石塔片1・不明石碑1・不明8である。石塔片のいくつかには墨書きもしくは印刻にて年号が記しているものがあり、列記すると天文6年〔1537年〕、慶長年間〔1596～1614年〕、天保年間〔1830～1843年〕、安政4年〔1857年〕、明次（明治の誤りか）2年〔1869年〕、明治33年〔1900年〕である。記年銘や石塔形式から考えると、石塔群Aの大部分は16世紀から19世紀にかけての時期に比定できる。また、石塔群の形成時期は、石塔群に残る画像板碑や地蔵尊の顔の多くが潰されていることから、これらは明治初期の廃仏毀釈後に再配列されたと考えられる。『日向地誌』では、恒久村中の寺院（瑞雲寺・福長院・如寶寺・極楽寺・護国寺）は、いずれも明治5年〔1872年〕廃仏毀釈によって廃されたと記載されている。

石塔群Bは、コンクリート製ブロックに囲まれた六地蔵輪2基〔北輪・南輪〕を中心とする石塔群である。六地蔵輪の他、六地蔵輪後部に石塔片数点が散乱している。詳細な数は把握できなかったが、板碑1・相輪片2・空風輪1・地輪もしくは宝塔基部1・六地蔵輪の中台片2などが確認された（第59図）。昭和17年の『日向ノ金石文』によれば、「竿石（塔身部のこと）は地中埋没…、臺（台）石ハ傍ラノ田畔ニ在リ…、笠石モ放棄半バ埋没…」と記載されていることから、昭和初期にはバラバラになり放置されていたと推測される。聞き取りの結果、昭和中期頃に現在の位置に移転建立したと地元住民の証言を得られた。後部の石塔片はその頃かそれ以後に集積された可能性がある。



C区石塔群(番号は報告書掲載番号)



第59図 石塔群検出状況図 [平面・立面] (S=1/50)

(1) 六地蔵幢：おそらく北幢と南幢の龕部が入れ替わっている。

【六地蔵幢：北幢【第60図・第61図-190】】総高約205cm、宝珠部・笠部・龕部・幢身部・台座部から構成される。本来の構成要素からは中台部が欠けている。笠部は風化などにより劣化しており、全体の様子が把握できない。龕部はおそらく南幢のものと入れ替わっており、他の部位に比べて残存状況が良い。龕部は六角柱で、高さ約43cmである。6面各面には、舟形光背状に掘り窪め、1体ずつ蓮華座にのった地蔵が彫られている。頭部を中心に破壊されており、詳しい地蔵の種類が確定されないが、輪をもつ地蔵、鏡をもつ地蔵、錫杖をもつ地蔵などが確認できる。幢身部は幅約36cm、高さ約107cmの角柱状で、4面にはいずれも5文字の梵字が彫られている。東面は本来南面の「キヤー・カ・ラ・バ・ア」が、西面は本来北面の「キャク・カク・ラク・バク・アク」、南面は本来西面の「ケン・カン・ラン・バン・アン」が、北面は本来東面の「キヤ・カ・ラ・バ・ア」が彫られており、本来あるべき方向より90°回転している。また各面の梵字の下には、天蓋・環珞・蓮実が彫られている。北面（本来の東面）の右側には不明瞭ではあるが、文字が彫られており、「永正十八年」の記述が確認できる。



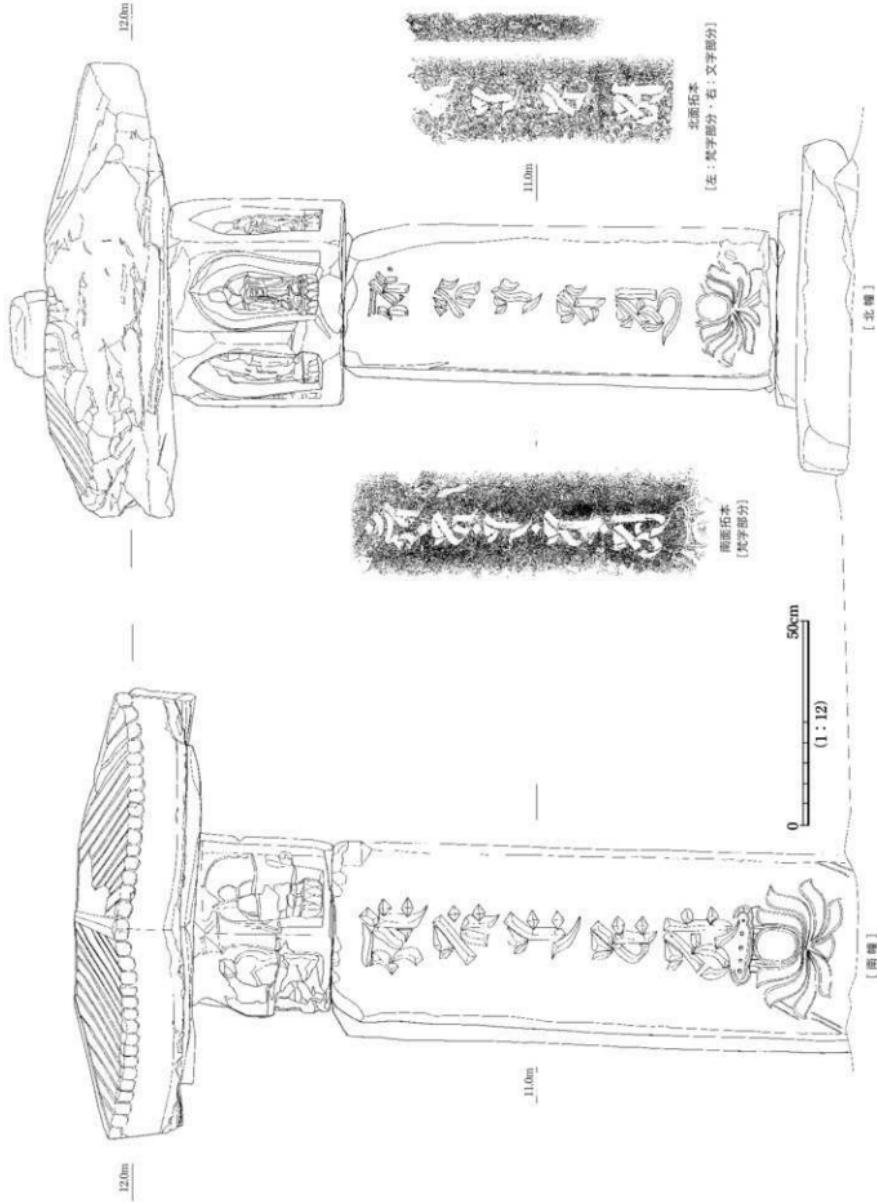
六地蔵幢：北幢

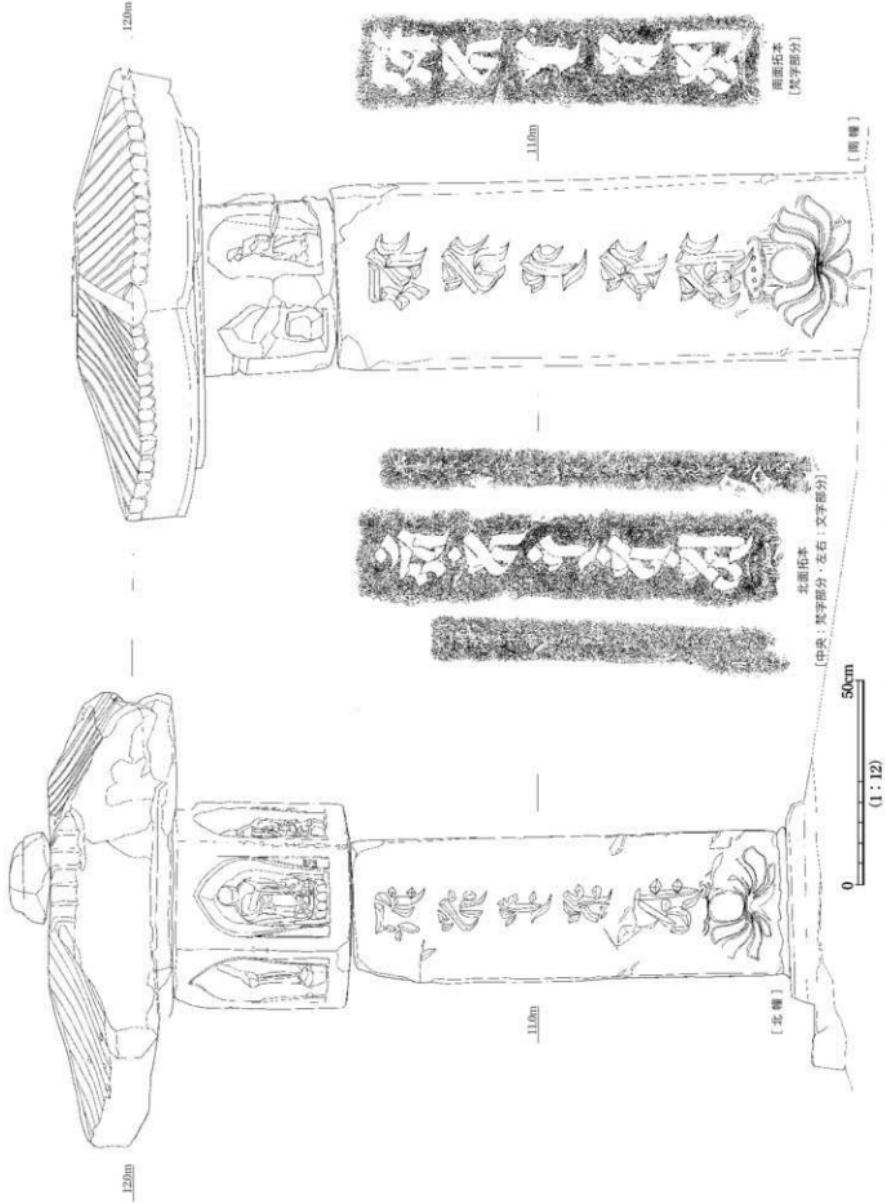
【六地蔵幢：南幢【第60図・第61図-191】】総高約197cm、宝珠部・笠部・龕部・幢身部・台座部から構成される。本来の構成要素からは中台部が欠けている。笠部は六角形で、幅約110cm、内外面・軒先に明瞭に桟木の表現が施されている。笠部の上に宝珠がのっていたと推定され、接続する脇穴が確認されている。龕部は、六角柱で高さ約35cm、他の部位に比べて残存状況が悪く、中央に大きな亀裂が入っている。北幢と同様、6面各面は、舟形光背状に掘り窪め、1体ずつ蓮華座にのった地蔵が彫られている。頭部を中心に破壊されており、詳しい地蔵の種類が確定されないが、輪をもつ地蔵、鏡をもつ地蔵、錫杖をもつ地蔵、印を結ぶ地蔵などが確認できる。4面にはいずれも5文字の梵字が彫られている。東面は本来北面の「キャク・カク・ラク・バク・アク」が、西面は本来南面の「キヤー・カ・ラ・バ・ア」が、南面は本来東面の「キヤ・カ・ラ・バ・ア」が、北面は本来西面の「ケン・カン・ラン・バン・アン」が彫られており、本来あるべき方向より90°回転している。また各面の梵字の下には、天蓋・環珞・蓮実が彫られている。北面（本来の西面）の右側には「奉造立六地蔵一宇曾井城加貴賤□志自利□他平等□之相瑜」とあり、左側には「一仏種子六十六部雲（當？）州幸為三得順 永正十八年辛巳 三月廿一日」と彫られている。



六地蔵幢：南幢

第60図 六地蔵龕立面図①〔東面〕(S=1/12)





第61図 六地蔵舎立面図② [西面] (S=1/12)

【六地蔵幢竿部 [第62図-192]】総高約112cm、一辺約30cmの凝灰岩製角柱で、4面中3面に刻字が施されている。調査時には上1／3程が折れた状態だった。正面と考えられる面には大きく東面に多く見られる梵字の「キヤ・カ・ラ・バ・ア」が中央部に、下方には「天文六年丁酉/傳前廣承公知藏禪師/二月二十七日」が刻字されている。また右面上部には釈迦如来を示す「アク」を一字、左面上部には宝勝如来を示す「タラーク」を一字刻んでいる。釈迦如来や宝勝如来は五輪法界の五如来であり、釈迦如来は北を、宝勝如来は南を示す。「キヤ・カ・ラ・バ・ア」の面を東に向けると、実際の方角と一致する。裏面は風化著しく、文字が施されていたのかは不明である。

(2) 画像板碑

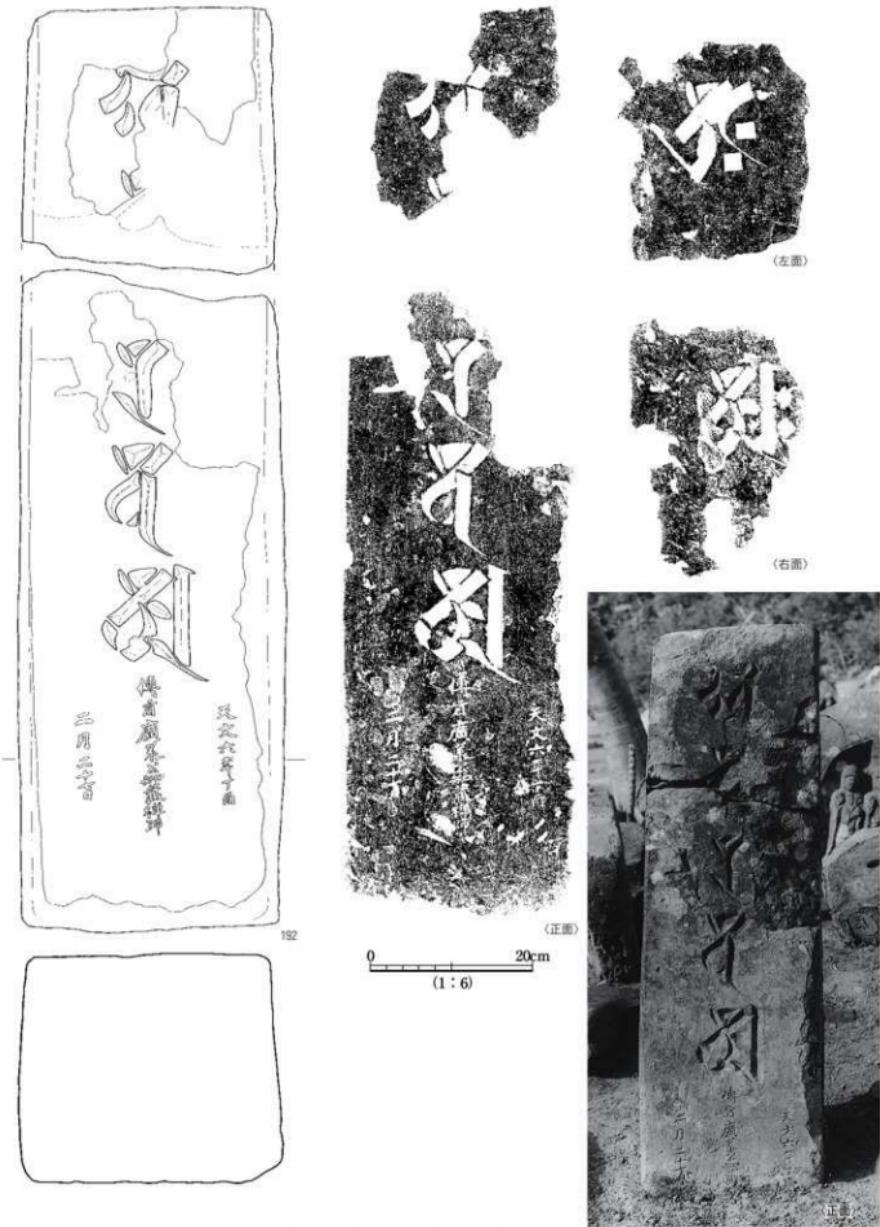
【画像板碑1 [第63図-193]】頂部三角形に2本頂上線をもつ。額部分には墨書による「咄」の字がある。画像は主に上半部で、2体の立像が彫られている。額部分は潰されているが、向かって左側は左手に珠を持った立像である。向かって右側は来迎印（上品下生印）の印相を結んでおり阿弥陀如来と考えられる。立像の下には環珞・蓮花座をもつ。碑の両側邊には墨書による文字が確認され、左側には「逆修蘭窓壽□現世安穩後生善處」「菊月吉（？）…」が、右側には「欽奉造…一字□梁山元棟禪定門□諸佛果菩提者也」「平時慶□」と読むことができる。内容から生前供養塔である逆修塔であることがわかる。造られた時期は、「平時慶□」の不明部分が「うかんむり」「まだれ」などから推測され、「慶安年間（1648～1652年）」か「慶應年間（1865～1868年）」と考えられる。

【画像板碑2 [第64図-194]】上半は石塔群Aから、下半は石塔群から少し離れた場所から出土した。頂部三角形を呈する。頂上線をもたない。上半部に舟形光背状に彫りこまれた部分に2体の立像が彫られている。画像板碑1と同様、向かって左側が左手に珠を持った立像で、向かって右側が来迎印を結ぶ阿弥陀如来と考えられる。2体とも額の鼻の周辺と手の一部が欠損している。立像の下には環珞・蓮花座をもつ。碑の両側には墨書が認められるが、殆ど判読できず、わずかに右下部の「…證佛果…」が確認できる。また、蓮花座下にも「天□…／七月…」が確認できる。「天」の付く鎌倉以降の年号は「天文年間（1532～1555年）」「天正年間（1573～1592年）」「天明（1781～1789年）」「天保年間（1830～1844年）」の4つである。

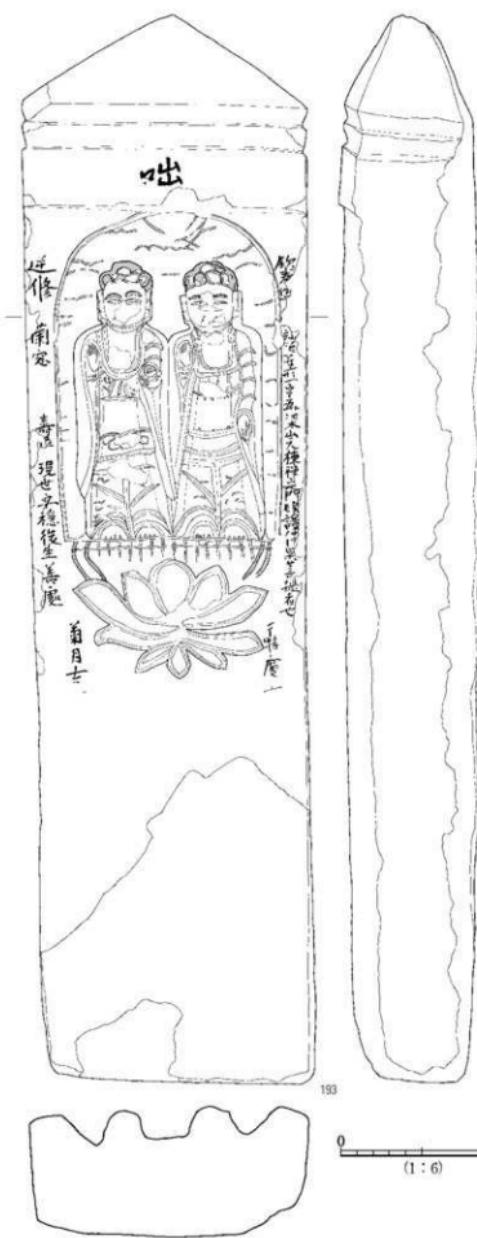
【画像板碑3 [第65図-195]】2つに切断された形で、2つとも石塔群Aから出土した。頂部三角形に2本頂上線をもつ。画像は主に上半から中段にかけて舟形光背状の窪みの中に3体の座像が彫られている。座像の下には環珞・蓮花座をもつ。座像は3体とも額の部分を中心で欠損しているが、上段の1体は腹部周辺で阿弥陀定印を結んでおり阿弥陀如来と推定される。下段の2体は、左右とも欠損しているが左手に蓮の花のような棒状物を持っている。2体は觀世音菩薩と勢至菩薩と考えられ、3体で阿弥陀三尊を構成していると考えられる。墨書や刻字は確認されなかった。

【画像板碑4 [第66図-196]】3つに切断された形で、いずれも石塔群A内から出土した。欠損しているが、頂部は三角形でなく平坦である。頂上線もないが、かわりに幅7.5cmの帯状部が突出しており額部となる。画像は主に上段から中段にかけて、舟形光背状の窪みの中に2体の立像が彫られている。舟形窪みの上には墨書による天蓋を、立像の下には環珞・蓮花座をもつ。2体とも額を中心とする上半身が欠損している。右像は右手に棒状物（錫杖か蓮華等が連想される）をもち、左手に宝珠らしきものを持っていることから地蔵菩薩と考えられる。左像は頭に冠をかぶり、左手に杓子状のもの（蓮華とともに）を持っており、右手は胸元まであげる施無畏印を結んでいる。弥勒菩薩の可能性がある。両脇に墨書が確認できるが、判読できるものはなく、わずかに右側に蓮華が確認できるのみである。

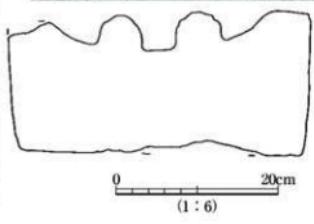
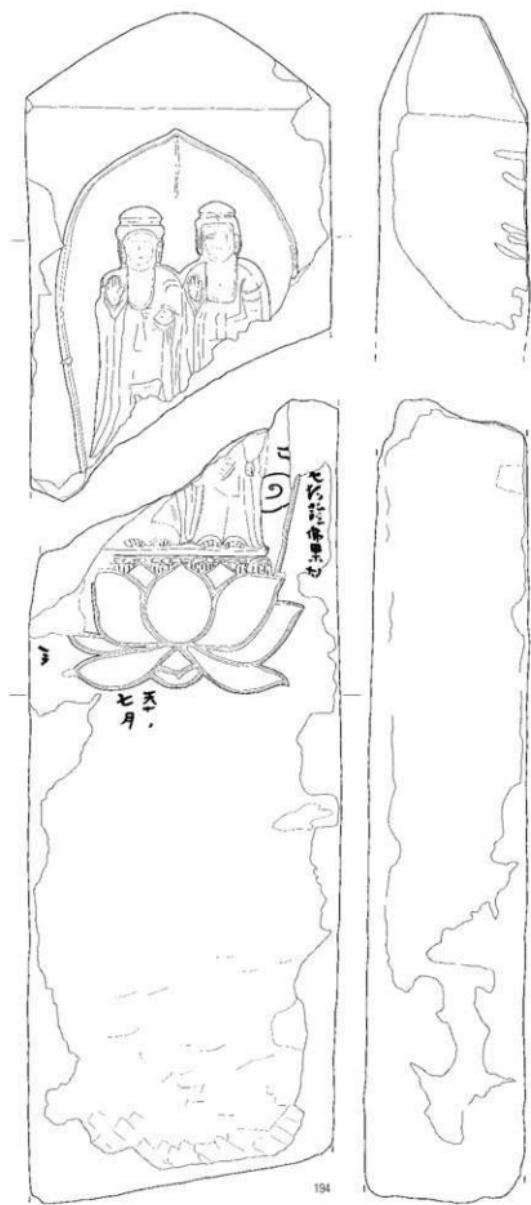
【画像板碑5 [第67図-197]】下部が欠損しており、上部のみの板碑である。頂部三角形に2本頂上線をもつ。その下の額部には「咄」の墨書が確認できる。画像は舟形光背状の窪みの中に1体の立像が彫られている。立像は額や手が欠損しているが、胸元に掌をあげる施無畏印と膝上で掌を上向きにする与願印を結び、頭部は螺髪であることから釈迦如来と考えられる。両脇部に墨書が確認されるが、剥落著しく判読不能である。



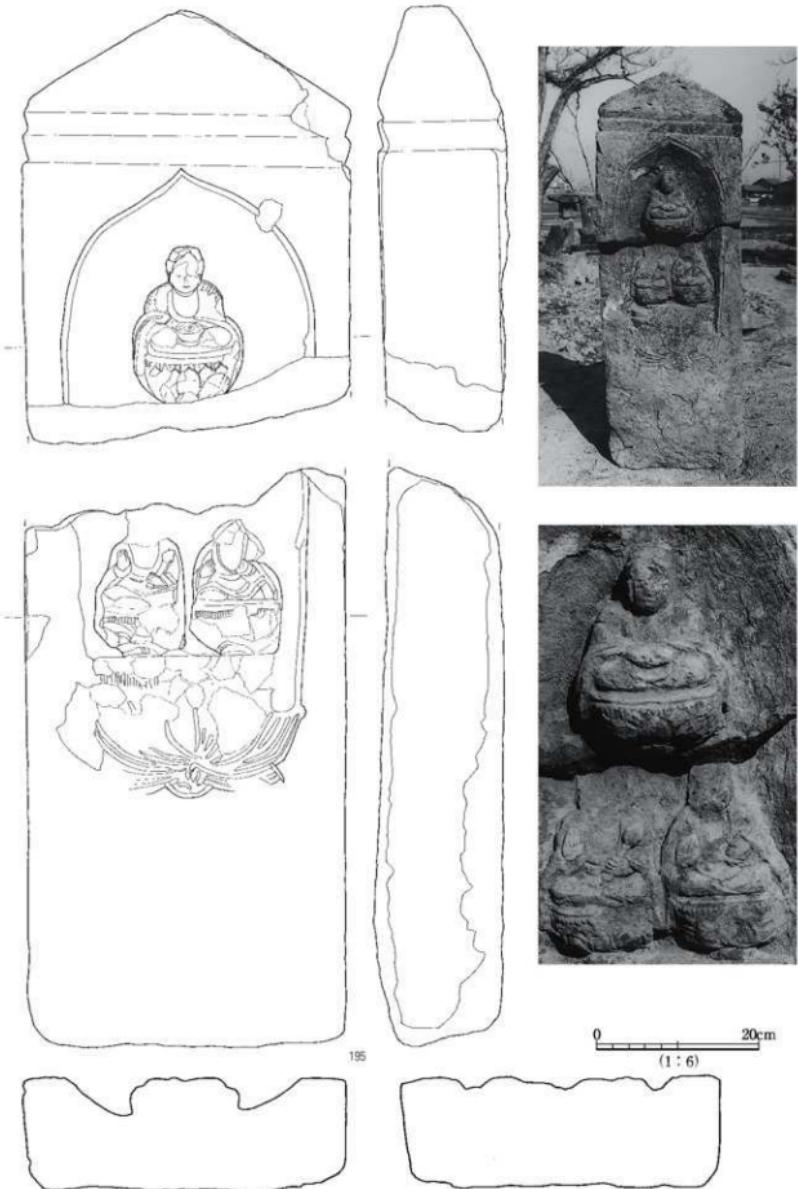
第62図 石塔群出土石塔① [六地蔵塔] (S=1/6)



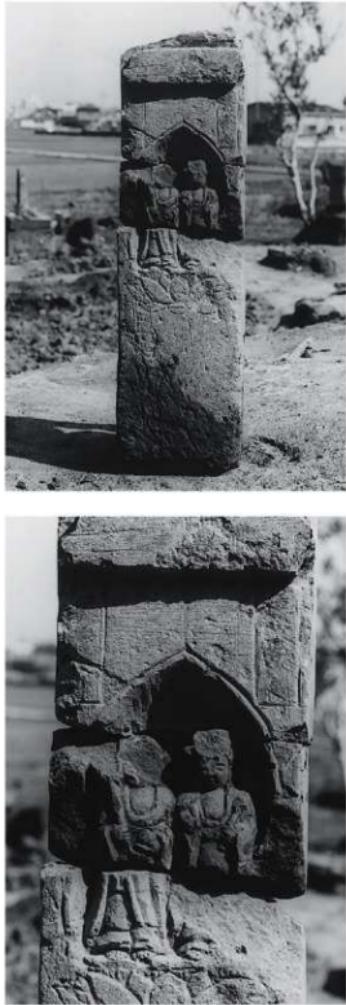
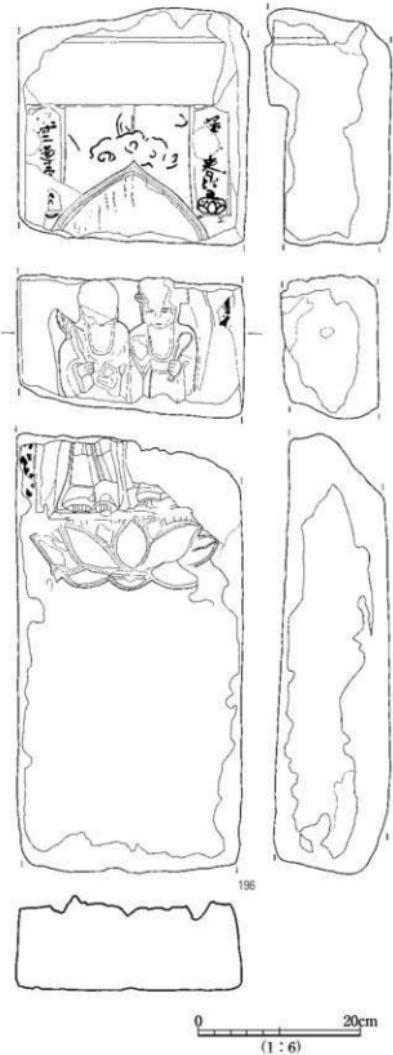
第63図 石塔群出土石塔② [画像板碑1] (S=1/6)



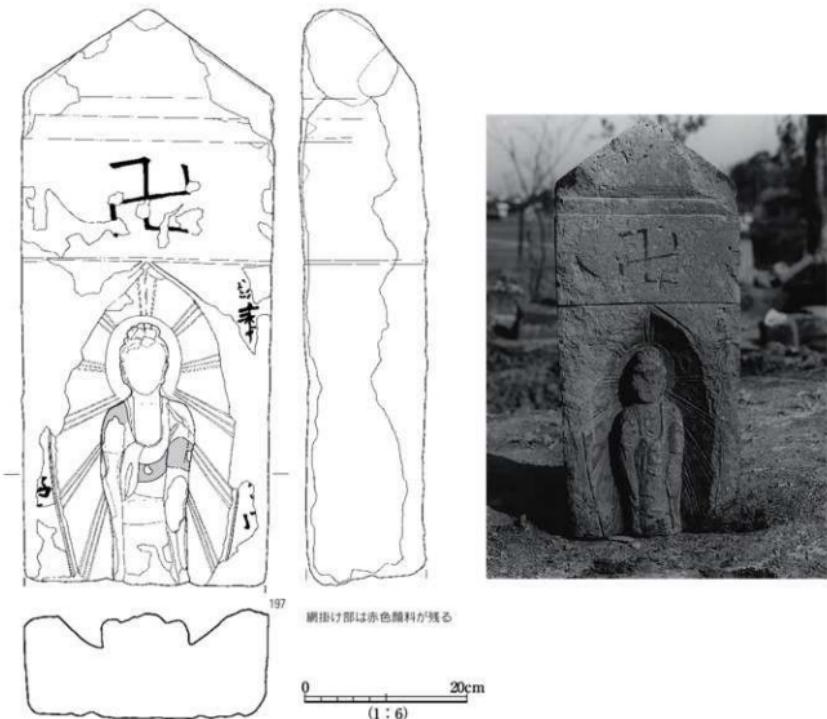
第64図 石塔群出土石塔③ [画像板碑2] (S=1/6)



第65図 石塔群出土石塔④ [画像板碑3] (S=1/6)



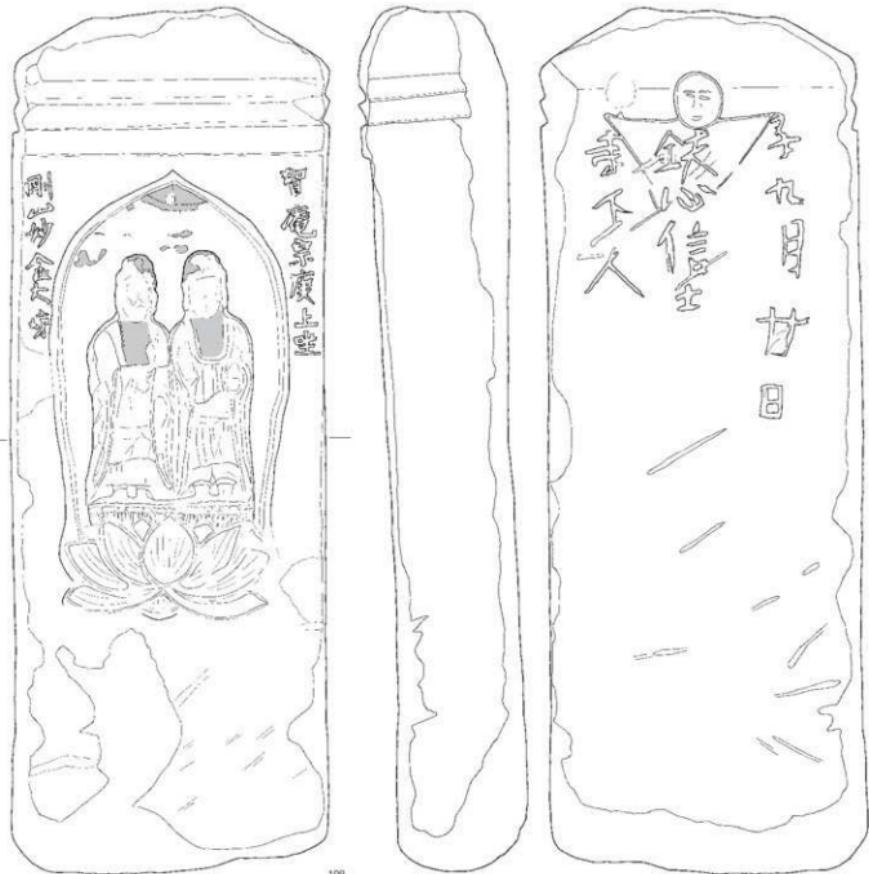
第66図 石塔群出土石塔⑤ [画像板碑4] (S=1/6)



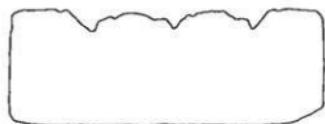
第67図 石塔群出土石塔⑥【画像板碑5】(S=1/6)

【画像板碑6【第68図・第69図-198】】完形で出土した。頂部は三角形らしき形であるが、頂部が丸くなっている。頂上線は2本であるが、その下に帯状の額部をもつ。画像は主に上半から中段にかけて、舟形光背状の窪みの中に2体の立像が彫られている。立像の下には環珞・蓮華座をもつ。2体の立像は、右像が右手施無畏印、左手与願印を結んでおり、左像が右手施無畏印を結び、左手には宝珠を持っている。両側には印刻による文字が彫られており、右側が「剛山妙金大師」左側が「賀庵宗慶上座」であることから夫婦像の可能性がある。また、この像は、裏面に線刻による表現があり、「子九月廿日・鉄心信士・寺下人」と文字が彫られている。また、文字の背後には袴を着た人が描かれている。おそらく、表面が最初造られた板碑であり、裏面が後から転用されたものと考えられる。また、書かれた「寺下人」は、本遺跡が寺もしくは寺に深く関連する遺跡である事を示す。

【画像板碑7【第69図-199】】長方形を呈する板碑である。頂部や頂上線はもたず、蓮華座の上に立った2体の立像が彫られている。他の画像板碑は像の背後に舟形光背状窪みをもつが、この板碑は方形の窪みである。右像は、破損が少なく、頭部は螺髮、右手施無畏印、左手与願印を結んでおり、釈迦如来と考えられる。左像は、頭部と上半身が破損しているが、頭部には冠、右手は施無畏印、左手は棒状物（蓮華の可能性がある）をもち、弥勒菩薩の可能性がある。像の下に墨書きが2行確認されるが、判読不能である。



198



網掛け部は赤色顔料が残る

0
20cm
(1 : 6)



第68図 石塔群出土石塔⑦ [画像板碑6] (S=1/6)